



岳 山

年 三 十 第
號 一 第



山 岳

第三十三年 第一號

登山道德

岩石草木 置之山岳
不敢毀傷 德之始也
立碑開道 傳書於後世
以顯山岳 德之終也

福地信世戲言

(本誌會報欄參照)

目次

(大正七年十一月發行)

表紙……………中村清太郎氏圖案

タイトルページ……………理學士 福地信世氏

挿畫

空瀑。王簾瀑。丁子瀑。大瀑。胎内瀧。裏見瀑の舊態……………外山正彦氏寄贈……………二四頁

粘澤の瀑。慈觀瀑……………外山正彦氏寄贈……………三三

七瀑。唐瀧……………北澤基幸氏撮影……………三二

菊田岳。五色岳。賽ノ河原西望。雁戸山。盟主熊野岳……………沼井鐵太郎氏撮影……………四八

八峰つゞきのキレト。八峰のキレト……………朝輝記太留氏撮影……………五六

一、槍ヶ岳より見たる穂高山。二、槍ヶ岳の頂上。三、常念山脈より槍ヶ岳眺望。四、霞澤岳より穂高山を見る。(以上金井千仞氏藏)五、二股小屋より穂高岳を望む。(トムリンソン氏撮影)

(英文欄)

烏帽子尾根。赤岳。越中澤の雪橋。高瀬川沿道。黒岳。唐澤岳……………(ドント氏撮影)(英文欄)

本欄

劍越え

冠 松次郎……………

日光山の瀑布

御前屏風紀行(藏王山の内)

八峯のギャップ

理學博士 武田久吉 …… 一七

沼井久太郎 …… 三九
山口末次郎 …… 三九
朝山輝記太郎留 …… 五二

雜 錄

○山の物理學(伊藤徳之助) ○山の物理學補遺(伊藤徳之助) ○原口林學士の赤石白峰山脈縱横記を讀む(木暮) ○高山植物雜記(一)(武田久吉) ○落合海軍屬死體發見の顛末。

登山案内者(一)

○大町登山案内者組合(百瀬慎太郎) ○越中立山村蘆崎寺の登山案内者(雄山通季氏) ○日光湯本と甲州丹波山の案内者。

○火男火賣(大河内四磨) ○近江國山岳登路表(近江、馬場孫七)

雜 報

○朝融王白馬へ ○白馬山今年の初登山 ○加賀の白山山麓より ○上高地温泉場より ○今年富士の物價 ○大和大峰山の昨今 ○伯耆の大山登り ○日本アルプス北部の登山道 ○今夏の霧島 ○中房温泉より ○槍ヶ岳を中心とせる登山路 ○海拔八千尺の冠帽峰 ○日本アルプスの露天學校 ○アルプス學會近く設立されん ○上高地 ○山を移めよ ○山に行く心 ○山嶽美保護施設 ○種蒔爺 ○登山には酸素袋

會 報

○本會々則一部の變更 ○第一回本會小集會 ○神奈川縣鹽濱市役所主催山岳講演會 ○上智大學山岳會講演會 ○會員通信 ○竊地信世氏の來狀 ○立山劍岳附近五萬分一模型圖頒布 ○外國文欄の創設 ○新入會者

英文附錄

(本號卷末に英文附錄目次あり就て見られたし)

劍越え

冠松次郎

山

丁度繁忙な時期に差し向つてゐる家業を後にして、今年も亦渡り鳥のやうに越中の空にあこがれて行く。會員飯塚篤之助君と七月十六日の（大正六年）夜行で上野を發ち、翌十七日の午前十一時に立山鐵道の上市驛で下車して驛前に出て見ると、豫期してゐた平藏が來て居ない。そして三四人の人夫が此方を指して來る。その内の一人が懷から平藏にやつた端書を示して、平藏が都合が悪くて來られない爲代りに頼まれたと云ふ。軍造、福太郎、經春、兼次郎、皆芦峠の者だ。兼次郎はまだ十九の若者で、體格も細く弱々しく見えるので、重荷を負ふて山に入るのを如何かと危ぶんだ。然し流石は山育ちだけあつて、後には却つてその元氣なのに驚かされる程であつた。

平藏が先導すると云ふことは、この旅行の計畫の重なる部分に入れてあるのに、その人が來ないので少時の間失望の思ひに沈んだ。然し一人位の人夫の爲に計畫を變更する程つまらない氣には勿論ない。假に平藏が行つた處で矢張未踏の地なら知つてゐるよすがないから、天候と地圖と人夫の熟練と自分の少しばかりの經驗に依頼して行くことにした。五萬分一の良地形圖が出來てからと云ふものは、私共の旅行は、どんなに氣樂にそして安全になつたかしのれない。私共が前人未踏の深谷や高山へ分れ入ることの出來るのも、其御蔭を蒙ることが實に多い。

伊折へ行つたことがあるかと聞いたら、一人も知らないと云ふ。實際この山旅は知らないものゝ道連れだつた。計畫を話して行けるかと聞くと、大丈夫行けますと軍造が自信あるものゝやうに云ふ。よしそれでは出掛けやうと、驛前の茶屋で人夫に飯を食はせて、午後十二時過に出發して上市町で鍋

二つ鹽引二尾其外不足の物を調へて、道を右に取つて町を抜ける。上市町から伊折迄の道は新道が出来て、上りも少なく道も可なりよく随分樂だけれども、その代りに平凡極まる處で、何等興味を惹き起す様な景色に接しない。仕方なしに早月川の上流の方を仰いで、夏雲色濃く罩めてゐる大山岳を想像して、僅に旅情を慰める位なものであつた。二里半程で折戸と云ふ所へ出て、それから早月川に沿つて行く。河原は随分廣く水量も可なり多い。午後三時頃になるとお神立が劍の方から襲つて來た。あわてゝ雨合羽を被り、崖上の坦道を行くと、山風は氷冷の氣を帯びて最早夕暮近い涼しさが身に迫つて來る。蓬澤と云ふ小さな部落を左に見て、午後五時半伊折に着き、酒井長作方に草鞋を脱ぐ。

七月十八日。快晴。流石山里の夜は冷い。厚いそして重い蒲團を二枚掛けても、少しも暑いとは思はなかつた。午前四時に床を離れたが、もう家の前庭がガヤ／＼してゐる。出て見ると宿の主人の指圖で、女等が七八人薙や食糧などを荷造りをしてゐるが、皆鑛山の方へ運ぶのらしい。楊枝を使ひながら裏の田圃へ出て見ると、晴れ切らぬ朝靄の奥から正面に壯麗な劍ヶ岳の輪廓が兀々と炙り出された。水晶に吐息が懸つた様な色をして、そしてその額に一點の殘雪が明星の様な美しく光を放つてゐるのを見て、私は足の泥まみれになるのも忘れて、三十分近くも田の畦の中をうろついてゐた。

午前五時頃に出發する豫定だつたが、手間がとれて六時少し過になつて出發した。丁度宿の主人が発電所まで用があると云ふので、序に道連れになつて貰ふ。然し伊折から大窓迄は可なり立派な道が付いてゐるので、迷ふ程のことはない。無趣味な道を行く。午前七時半に大熊谷の橋を渡る時分には、もう劍ヶ岳の全容——大窓から奥大日岳まで——が當面に翼を擴げて、一番はつきり見える奥大日嶺きの殘雪が藍色に溢れて、森林の上に輝いてゐるのを見ては、越中の山奥へ入つたと云ふすが／＼しい氣持にならない譯には行かなかつた。それにしても何と云ふ氣の早い雲だらう、まだ七時頃だと云ふのにもう大窓の中からのそり／＼と銀灰色の入道が大きな手を延ばし始めた。

杉の平の小黒部鑛山事務所に出て少時休む。飯場が二棟に事務所が一棟建てられてあるが、森閑として人の聲さへも聞えない。飯場の傍にある清水の小池の中に十數匹の大きな岩魚や鱒の子が泳ぎ廻つてゐるのを見て、人夫共は急に釣りたくなつたと見えて、針を買ひに酒保へ行つた。事務所から一里程行くと三四十人の者が發電所の作業をしてゐる。その上の方の小さな平に河に向つて事務所が涼しさうに建てられてゐる。少し行くと頭部を繃帯した男が一人に負ふはれ二人に助けられながら下つて来る、鑛山で怪我をしたのだと云ふ。ダイナマイトで飛散した岩の破片が頭に當つたので大分顔がむくんでゐる。これから市へ出て醫者に見て貰ふのださうだ。後を見送つたが何となく心もとない工夫等の暗い生活が影の様に私の心を掠めて行く。白萩川と立山川との出合に出ると、大きな小舎が一つ建てられて、右立山道左鑛山道と云ふ標杭が立てゝある。パンバ島と云ふ所で、伊折からこの立山道を通つて室堂まで一日で行ける。この道は數年前までは廢道になつてゐたが、去年あたりから地獄谷の硫黄を運ぶので、近頃は餘程よくなつたと云ふ。これからブナクラ谷の落口の小舎迄は一時間弱の行程で、道草をしてゐたので大分手間がとれて、正午ブナクラ小舎に着く。

小舎の者は皆仕事に出てゐると見えて二三人しかゐない。飯を食ひながら種々山の様子を聞いたが皆くれ要領を得ない、のみならず始めの中は鑛脈でも探しに入るのだと思つて、中々話し相手にならなかつた。人夫の話して様子が分たつと見えて安心した様だが、劔へ登ると云つてもてんで取り合はない。天狗でもあるまいし羽根もないのに、どうして彼の上へ登れるものかなぞと云ふ位で、前の尾根の様子などは一向知らないらしい。小舎の東南に小溪が一筋懸かつてその中頃に瀧が落ちてその上と下に残雪が午後の日に強い光りを反射してゐる。時々尾根上の方から濃厚な霧が幕でも下した様下つては又上つて行く。彼れは何と云ふのだと聞くとキワラダン（谷）だと云ふ。登れるかと聞くと下の川は越せないがこの小舎の前で川を渡り尾根の下腹をからめは行けるだらうと云ふ。伊折の宿や

の主人の話しによると、この小舎の直ぐ前の尾根の中腹に松尾平と云ふ平があつて、其處には索道の小舎が建てられて、それ迄は道が着けられてあるからそれから尾根を登つたらよいだらうと云ふことだつたが、平から尾根迄は中々あるし、尾根上へ取り付いた所で可なり下つてゐる處だから尾根傳ひが随分長く、藪の中ばかりで時間と辛勞とを考へると馬鹿々々しくなるので軍造に相談すると、矢張キワラダンを行かうと云ふのでそれに決定する。人夫はこの小舎で漸くせがんで蚊針四五本に糸を少し分けて貰つた。然し其後何處でも釣れなかつた。東澤の赤牛岳の下で夜營をした時に漸く二匹釣つたばかりで、東京へ持つて行く筈の岩魚のおみやげも沙汰止になつた。

午後一時出發。小舎を後に、白萩川の川原を拾つて丸木橋を渡り、對岸へ出て、暫くの間道らしい所を分けて行く内に、根曲り笹や雜草の藪の中へ潜り込んでしまつた。幸ひ笹も草も案外酷くないので、顔をしかめる程のこともなく、山腹を流れてゐる溝の様な夥しい流水へ出て、それに付いて暫く登り、午後二時に索道の下の切開に出て、それから左に付いて行く。右方は大分上りになつて、その上の松尾平（宛字）に出るので、遠望すると花崗岩の砂地の様な眞白な平地に小舎が一棟建てられてある。左の方を切開の終點に來ると索道の櫓が立てられ、その先は深い崩崖になつて、白萩川がその底を轟々と渦巻いて行く。索道は谷を越して對岸の池の谷の尾根の下方にかゝつて、それから大窓の方へ續いてゐるらしい。櫓の上に登つて方向を見させる。キワラ谷はまだ可なり上らしい。それから又藪に入る。一時間程へつて漸く谷の降り口を選びキワラ谷に降る。午後三時少し過。霧が随分深くなつて來た。谷巾は狭いが兩岸が可なり急なのに上の方は追々悪くなるらしい。この先で夜營地を定めることは困難だらうと思つて、早いけれども對岸に少しばかりの緩斜地を選んで夜營をすることに定める。この谷の傍には良好な夜營地はない。まだ三時半にしかならない、可なり歩いた積りでも横にへつてゐた爲幾何も登つてゐない、漸く一、二〇〇米突位の處にしか來てゐないらしい。

大イタドリの藪を開拓して、仆した草を疊の代りに敷き、ゴロ／＼頭を出してゐる石を片寄せて危ふげな天幕を突張る。夜營地の眞上ではウツ木が眞盛りで、その桃色の花が美しい。眺望の悪い處なのに霧が深いので時々赤谷の上の方の残雪が見えるばかりで、直ぐ谷向ふの大きな崩れを大残雪と間違へては幾度が失笑した。

○

七月十九日。此頃は雲がもう午後六時と云ふと出始めて、日中は霧が中々深い。然し朝晩は好く晴れるのに、嵐（朝夕谷上から吹き下ろす風）が順當なので何となく氣強い。午前七時に夜營を撤して谷を登ると、間も無く雪の上に出る。少し行くと突き當りが懸崖になつて四五丈程の瀧がかゝつてゐる。小舎から見えたものだ。瀧壺が淵になつてその上の残雪が深く判られてゐるので、瀧の左側の雪と崖との間に行くと傾斜が急なのに雪消の跡で足場が悪いので、崖上の木へ繩を懸けて登つて行く。先へ行つた飯塚君が瀧上に突き出てゐる岩を廻らうとしてゐると、ぶら下つてゐたアイス、アックスが手からこつて瀧壺へ落ちた。幸ひ岩の間に狭まつて流れずにあるので、福太郎が繩で下りて拾ひ上げて來た。約一時間で瀧の上へ出で休む。ブナクラ小舎が好く見える双眼鏡で見ると小舎の前に一人蠢いてゐるが向ふは無論氣付かぬと見えて、又入つてしまつた。山上は濃霧に閉されてゐるが、下界には強烈な日が輝いてゐる。その中間になつてゐる此邊は氣まぐれに日が射すと思ふと直ぐに濃霧が巻き下つて來る。蓬々として雪溪の上を匍つて來る霧を見るのも、丁度一年越だと思ふと懐しくなる。雪溪が急になつたのでカンジキを穿く。約一時間も登ると白樺や梅、黒檜が見え出して前方の岩山の蒼崖の罅隙から瀧の様な奔流が跳出して、その奥は通れさうもないので、雪溪の切れ目から右の小溪に折れて水と岩との間を登る。午前十一時に第一回の中食を認める。水がなくなつてくると傾斜が益々急峻になつて、まだ四五日にしかならない雪解後の落ち着かない石が、稍ともするとガラ／＼と

走り落ちる。先登の飯塚君が一寸足を止らせたと思ふと、岩の破片が二つ程落ちて來た。皆休んでゐたので危ない〜と聲をかけたが、薬研の様な溝になつてゐる急坂なので、石は遠慮なくその底を目がけて走つて行くので如何しやうもなかつた。一ツは軍造と經春との間を抜けたが、一ツは生憎軍造の腕に當つた。アーンと思ふ内暫く仰向きになつてゐたが、幸に左程強く打たなかつたと見えて暫くして起き上つた。着物を脱がして見たが少しばかり痣になつた丈で、さしたこともないのに胸を撫で下した。それから成る可く密着して進むことにする。上の方へ行くに従ひ草原の斜面がだん〜擴がつて、灌木が密生し始めた。そして夥しいキンバウゲの黄金の花が寂しいこの谷の春を飾つてゐる。右の方が好きさうなのでその方へ廻りながら、匂ふやうにして登つて行く内、漸く尾根上らしい針葉樹の領に入つて、午後〇時半漸く大尾根へ取り付き、梅の森林の下に腰を下して休む。

この尾根續きもこれから下の方は、見通せない位著しく低落してゐる。ふと鼻先の梅を見ると幾ヶ所も山刀の痕が付いてゐる、三角點を揚げた時のだらう。兎に角これが目的の尾根に違ひないこと丈は確かだと思つた。私は『もう直ぐ其處に三角點が出て來るぞ!』と獨言を云ひながら皆を勵ました。

濃霧に閉された尾根上ほど荒涼たるものはない。直ぐ鼻先の立山川に面した方は、蒼黒い苔に鎧はれた巨岩が累々として、數千尺の疊嶂を築き上げ猿オガセをおとろに振り亂した梅や黒檜の原木が、鬱々として随分立派な森林となつて、遙か下から響いて來る立山川の幽音は、昂奮し切つた私等の心を知らず〜寂寞の境に導いて行く。暫く休んで森林に付かずにその後ろに茂つてゐる藪をかき分け、一町程上つて灌木の茂つた平地へ出ると、熊笹やナ、カマド、石楠花の藪の中から三角櫓の杭が一本仆れ残つてゐるのが第一に目に付いた。その下をかき分けると石標がもぐつてゐるのに、主三、川と彫り付けてある。此處から少し先へ行くと人跡未踏地で切開なぞは勿論ない。

午後一時第一の目標を捜し當てたのでウヰスキーの祝杯を傾ける。約三十分程休んで尾根上を行くと、森林の下を埋めてゐる灌木の林叢に苦しめられるので、知らず／＼左横に抜け出ると、ナ、カマド、やミヤマハンノキに圍まれた緩斜面に出た。そして其處には消え残つた雪の傍に、大櫻草が幾株も咲きはこつて、白根葵が藪の奥で美しくしい藤紫の手を四ツ五ツ展げてゐる。ミヤマキスミレ、岩カガミ、セリバシホガマ、ミヤマ大根草なども美しくかつた。こんな樂な處があるのにと皆申し合した様なことを云ふ。この尾根は總じて立山川に向つて懸崖を爲し、陰森たる針葉樹が蒼鬱として幽深な自然の領域を形ち造つてゐるのに、一寸池の谷側へ出て見ると、潤葉樹の矮林の間に斷續して緩傾斜の草原が澤山ある。残雪を湛えて、山草に彩られて、そしてミヤマナ、カマドや白樺やミヤマハンノキに交つて、櫻が林のやうになつて茂つてゐる。都の花程のきらびやかさはないが、つゞまじげに咲き匂つてゐるその姿態は、誠に雪の高嶺にふさはしいものである。藪の下を埋めてゐる躑躅も満開だつた。その牡丹色の花の夥しいのを見入つてゐると、霧のヴェールで痴鈍になつてゐる視覚が急に冴々した様な氣持になる。

熊落しを三つ許り見る。これは冬雪の多い時分に、獵師が熊の通りさうな處を選んで、樹の幹や枝を交叉してその上に澤山の石を積み重ねて置いて、熊がその下を潜ると同時にその石が落ちる様に仕掛てある。その頃は山谷も一面に雪に埋もれて比較的自由に歩けるので苔峠あたりの獵師も此邊に來るものがあると云ふ。然し随分危険な仕事なので、一度雪崩に遭へば迎も生還することが出來ないばかりか、死骸すら分らないことが多い。數年前芦峠の者が二人獵に來て、立山川の谷へ落ちて死んだと云ふ話がある。死骸を揚げるのに非常な困難をしたと伊折の者が話してゐた。

午後二時乗越の様な處に出ると、狭いけれども立派な道が立山川から池の谷の方に横ぎられてる。先へ行つた軍造が熊の道だと云つた。成程さう云はれて見ると熊のらしい足跡が道を均して一杯に付

いてゐる。私はまだ獸の道でこんな立派なものを見たことがない。熊の乗越とでも云ふ處だ。この尾根には随分多くの獸の道がある、雪上の足痕を見ると羚羊、熊、兎のが多い。それから暫く行くと七間に十五間位の池のある處に出る。左の方から残雪が瀧の様に押し出して池の底も一面に雪が敷かれ、その上にさい波を打たしてゐる水は美しく澄んで、まだ芽んだばかりの白樺やミヤマハンノキの木の影を醸してゐるのが如何にも冬らしい静肅な感じを與へる。池の汀の雪上に熊の足跡が點々としゐるので、焚火をして第二回の中食をすます。霧が深く日の目も見ないので中々寒くなつて來た。それに見通しが付かないので、尾根筋を違へない様にと随分氣を付けて行く。漸々尾根が狭くなつて追はれる様に一縷の山稜の上の濶葉林の中を縫つて行く中、十間四方位の草の窪地に出て早いけれども夜營を張る。午後四時二十分。今日からは水を得られないので、斜面の下にある雪田の雪を鋸で二尺四方位に切つて荷ひ上げる。

午後六時頃になつて四方の霧が動搖し始めると、潮の如くに池の谷を見懸けて渦巻いて行く。と夕日に雪が輝いて毛勝山の雄姿が西北方に頭を擡げた。

立山方面の様子が氣になるので、西側の巨岩の上を傳つて梅の森の間から西方を覗くと、もう見渡す限り霧が晴れ渡つて、正面に奥大日岳を先頭として大日、早乙女に續く大岳が目さましい白雪を浴びて颯爽たる清容を連らねてゐる。今年は雪がすばらしく多い。奥大日の頂點近くが大カールになつて、其下に放射するごの皴もごの凹も皆青色の雪に彩られて、これ等無數の大残雪を總攝する立山川の大雪溪は、寂として銀鼠の色に黄昏れて行く。

室堂乗越の右上に硫黄採の道が鮮かに刻み込まれて、その上に地獄谷の丘が赤く燻ぶつてゐる。天狗平山は丸く見えるが、室堂も本山も別山續きの尾根に隠されて見えなかつた。先刻から執念深く絡

んでゐた霧が、頭巾を脱ぐ様に東方に吹き晴れると、視線が吸ひ込まれる様に別山續きの山稜を追つて、劔の絶巔を形成してゐる大きく割れた二つの岩の集塊に止まつたが、丁度まばゆい程の夕日に反映してゐるその大頭臚が、もう著しく桃色の勝つた赭紫色に焼けたゞれて、磊砢として四周の山川を睨視してゐる。何と云ふ豪放な姿だらう。そしてその後ろを周らして悠々と澄み渡つてゐる夕暮の蒼空を仰いだとき、私はその豪快と沈静との對稱の壯んなのを喜ばずにはゐられなかつた。

丁度劔の絶巔直下の二千尺近くも下つてゐる處に一大隆起が蟠まつてゐる。その隆起がこの尾根の凸端に當るので私等はこれからその方へ行くことになるのだ。こゝから見るとまだ立派な針葉樹林が可なり續いてゐるが、それが盡きるあたりにはもう偃松の山稜が處々露出して見える。絶巔とこの尾根の接合するあたりは生憎この隆起で遮られて見えない。然し略ぼ尾根の走向が分つたし、行程の見込も付いたので少なからず安心して夜營地へ戻ると夕飯を終り、樹間を漏るゝ星月夜を仰ぎながら静かな寢りに就いた。

○

七月廿日。今日は霧の出ない内に偃松ある所まで出たいと思つて、辨當を詰めずに朝飯丈濟ませると直きに出發した。午前五時半。一時間程行くともう森林の下に長大な偃松が見え出した。森林が盡きると暫くの間は灌木と偃松の雜叢で、歩行が追々難澁になり、偃松のみになつた頃には困難はその極點に達した。切開などは全くないのに山稜は狭まつてゐるので、林の様な偃松の上を渡つて行くより詮方なかつた。始めの内は枝を踏みながら立つて行つたが、餘り長大なので枝と枝との間を膝行して、終りには偃松の枝の上に寝ころんで、手足を延ばしたなり幾度か休んだ。可なり歩いたと思つても偃松は中々短くならない。立山川の方の偃松の枯れた處を選んで行くとも足元から雷鳥の母子が飛び出して、此方を振り向きながら霧の中へ隠れて行くと、頭の上の白樺の枝でカケスがギャーと驚いた

様な聲を出した。小隆起を幾つも越して午前十時半頃に漸く偃松が矮くなり始めると、間もなく大きな草原へ出る。

草原の周圍は大残雪に取巻かれてゐた。そして一面に雪解の跡が泥土と枯草とで、出水の後の様になつて、山草はまた芽さへも出し得ない。それで乾いて居る處にはチングルマや岩高蘭が一杯に匍つて、チングルマ、ミヤマカタバミ、イハ黄耆、岩辨慶草、タカネツメクサ、ミヤマ黄スミレなどがちらちら咲いて、黒百合も少しばかり見えた。大分霧が薄くなつたと見えて、時々その切れ目から強烈な日射がじりじりと照り付ける。雪を鍋に入れて湯を沸し、米をどいで又雪を入れて飯を焚く。天氣具合が好くなるし大分温度も高くなつたものだから、私等は草の上に寝をべつて一時間ばかり山の上にあることも忘れて、心地よく寝入つてしまつた。丁度正午頃に目を覺まして飯をすませ、一時少し前に出發した。原に續いてゐる雪坂を登つて小隆起を二つ程越すと、昨日夕方見た大隆起がもう真近に聳えてゐる。偃松も短くなるし昇降も非常に穩かで、馬鹿に歩きよくなつた。午後二時漸く隆起へ辿り付いて休む。

こゝまでは豊饒な大森林と執拗な偃松で鎧はれてゐた立派な大尾根も、この隆起を境としてその先は全くポロポロに崩壊して、何處を見ても荒廢した岩山傳ひで、そのリツツの上に少しばかり残つてゐる偃松が、僅かに濕ひのある蒼青の色を點綴してゐる。幾世紀日月によつて削鑿されて殘存した、牙をむき出した様な岩山、それが幾つも劔の大頭に向つて並走してゐるを見ると、悠遠な過去に存在してゐたこの尾根の走向が暗示される。

これから道が悪くなる。三つ程並んでゐる岩山を避けてその左下を絡むことにして、崩岩の上を降ると五十度位ある大雪溪の上に出た。軍造が先へ立つて踏み固めながらそれを横切つて行く。今年は春晩くなつて雪が多かつた爲何時もの様に雪が堅かり固まつてゐないので、急勾配の雪上に足を下ろ

すと、カンジキを着けてゐてもづる／＼、這るので中々歩き悪い。雪溪が七八間下から急に池の谷の方へ向つて壁立してゐるので、下方は見通せない。氣を付けてゐても何となく氣味が悪い、一步踏み外すとその方へ這り込みはしないかと思つて。約二町程雪の上を歩いて長大な岩の崩坂をひた登りに登りつめて、四番目の隆起に登り、それから斜に山稜に沿つて池の谷向きの窪崖に荷を下す。午後三時五十分。早いけれども霧が急に晴れさうもないのに追々山容が峻険になつて來たので、一ト先づ休憩して前方の様子を探ることにした。霧の斷え間から見るとこの先にはまた幾つもの凸起が聳えてゐるらしいが、兎に角もう非常に間近い處まで辿り着いてゐるのに違ひないと思つて。先へ様子を見に行つた福太郎が約三十分も經つて歸つて來たが、立山川の谷から煽り上げて來る霧の波で山が馬鹿げて高大に見え、そしてその間の窓が中々深く切れ込んで見えるので、一人では逆でも進む氣になれないので戻つて來たと云ふ。

丁度午後四時頃になつて、アイヌアックスとロープを持たせて、軍造を先頭に三人で行ける處まで足場を好くしながら行くやうに命じた。それから三四十分の間は三人が落して行く石の瀧の音が轟々ど山谷に鳴り響いて、池の谷の雪溪の上を雪煙を立て、岩石が轉げ落ちて行く。私は眼を離さずにそれを眺めてゐた、然し若しやその中に人夫でも共に轉落してはと思つて随分心配をした。その音が止んで暫く經つて、此處から三つ目の棚の様になつてゐるすばらしく高い岩山の上で、三人が休んでゐるのを見たが、其後は又霧が烈しく往來するので、到々見失なつて終つた。

午後五時頃になると空がすつかり明るくなつて、霧がすん／＼ち切れ始めると、狭霧の中から洗ひ出された様な翠嶺白嶂を連ねてゐる、奥大日續きの山々が第一に目に入る。顧ると何時の間にか富山平原の一部が脚底遙かに開展されて、上市川、早月川が美しく白金の綾を織り出してゐる。そしてその間を埋めてゐる森林、田野は瑞々しい午後の日に輝いて、其處彼處に雜然として固まつてゐる部落

を見るのも懐しいものゝ一つである。日本海！。海拔一萬尺を出入する高嶺から望み見る蒼海の麗はしきことは。煙霧の中に森漫たる蒼波を湛え、極目漂渺たる海岸の美を、この様な人圍を絶した氷雪境から眺め得るのも、私等の誇るべき驕奢の一つであらう。三窓から池の谷に押し出して居る峨々たる蒼嶂の後に、毛勝山から赤谷山に連らなる尾根が稍緩かな曲線をうねらせて、その彼方に遠く白馬一帯の山々（鏡ヶ岳まで）が、白雪斑々として夕陽に咽んでゐる。

眼界が急に濶くなり、周圍が長閑に冴え歸ると共に、この數日の間濃霧の中にばかり吐息をついてゐた私等は、何とも云へない程くつろいだ氣持になる。私は岩山の突端の偃松の中に寝ころびながら、双眼鏡を離さずに四境の壯觀をむさぼつてゐたが、視界の焦點を爲す劔の絶嶺へ眼が移つた時、私の視覚は急に鋭敏になつた。今しも茜色に夕榮してゐるその頂點の岩續きを、三人程のそくと歩いてゐるのを見出した爲に。まさか人夫が今頃頂上までは登りはしまいと思つてゐたので、無論他の登山者であらうと思つてよくく、諦視すると、確かに自分達の連れた人夫等だつた。そして先頭の軍造が持つて居るアイスマックスが夕日に閃めいてゐるのを見た時、私は思はずオーイと聲を揚げた。すると向ふでもオーイと返事をする。

此處から千有餘尺も壁聳してゐる絶嶺も、最早谷川の音も聞えない程の高度に登つてゐる私等からは、而も澄み切つた高山の空氣に、風の全くない靜かな夕には、餘程よく音聲が通るらしい。時計を見ると五時半を過ぎてゐる。餘り遅くなつて途中で日が暮れると難澁だと思つたので、又聲をかける。『最早五時半ダゾー。日が暮れると困るから早く降りて来い。』と云ふと三人揃つて此方を向いて、『ヨイ』と返事をする。後に聞いたら私の聲がハッキリと聞き分けられたと云ふ。

此處から見ると三角標のある頂點がやゝ遠いので、其西方（別山向）に續いてゐる岩續きがより近く、そして五六米突も高く突出して見えるので、この方面から見る者は恐らくその方を絶嶺と見紛ふ

であらう。夕日が奥大日岳の後ろに春つくど急に寒冷の氣が襲つて來たので、急いで夜營の仕度に取
かゝる。一人残された兼次郎が集めた偃松の枯枝をドシ〜焚いて湯を沸し、米をどぎ始める時分に
皆降りて來た。『今日誰かゞ登つたらしい新しい、鐘が落ちてゐたので、自分達の登つた印に測量杭の
上にかぶせて置いた』と軍造が云ふ。道理で標杭の上が夕日にピカ〜して、槍の穂先の様に見えた
ので、私は變に思つてゐた。兎に角登り一時間餘、降りならば一時間弱で確に行けると思つた。私
は絶嶺の岩窟へ夜營をする豫定でゐたので、今日中に行けたものを残念なことをしたと思つた。然し
頂上附近には焚物が少ないのと、寒さの烈しいので、不適當だと云ふことを後に知つて、却つてこの
夜營地を選んだことを喜んだ。

何しろもう全く岩と氷の領分に入り込んでゐるので、迎ても良好な夜營地は得られない。已むを得
ず東方池の谷側の雪の上を均して偃松を蔽ひ、莫莖や桐油を敷いてその上に天幕を張つた。風は無か
つたが遠に寒かつた。岩と雪の間で焚火をした爲、焚火がだん〜もぐり込むので、朝までには雪の
中へ大きな穴を開けてしまつた。火が弱くなると匂ひ出しては枯枝を添える。その度に空を見上げる
と尖々たる無数の星光が白雪に滲み込んで、雪にうつる私の影は現實のものとも覺えない程寂しいも
のであつた。

○

七月二十一日。静かなそして好く澄み渡つた夜であつた。午前二時半頃に目を覺まし天幕を匂ひ出
て西北を眺めると、今しも大熊座の七星が白萩川の谷の上を懸け橋の様に横たはつて、三窓の肩を離
れた杜牛坐のα星は燦々として世にも美しく光を放つ。皚々たる白雪の上に立つて暫くの間蒼空を
眺めてゐたが、何だか遼遠の太古に還つて、自分一人廣茫たる原始の野をさまよつてゐる様な氣持に
なる。夜が明けると昨夕遠く霞んで見えた大蓮華の郡峯が、今朝は馬鹿々々しい程近く迫つて來て、

その山頭山窪を一々指摘することが出来る程、明かに連らなつて見える。殊に平地の様な處に屯ろしてゐる、清水平附近の残雪が夥しく目に附く。

今日は連日でない美晴なのに、絶巔に登れる見込が確實になつてゐるので、何人を見ても何となく昂奮して、期せずして午前四時少し過には朝飯を了り、五時に夜營を徹して磊々たる岩傳ひにかゝる。登路は矢張り尾根の残骸をなせる障壁の左方池の谷向を絡んで行くので、昨日人夫達が登つた處を辿つて行く爲、割合に石が崩落しない。急な残雪の上縁を三ヶ所程廻り込み、岩壁の壁を迂回して險惡なナギを二度程越え、それから階段を上る様にして、岩壁を真しぐらに絶巔の右手を目がけて登り始める。頭上脚下峨々たる巨岩の間を行く私等の四肢が著しく緊張して、四圍の情景に惹かされて心持まで何となく壯快の感に打たれる。先へ登つて行つた軍造が、足がりの悪い岩の上で荷なぞを引上げる爲待つてゐたが、別段手傳つて貰ふ程のこともなく、すん／＼登り切つて頂上の一角に匍ひ上つた時、私は休むことも忘れて呼吸をもつかない位めに巨岩の上を飛びながら、絶點の三角標の所にまで無意識に駆け上つた。(午前六時約一時間を費す)。そして茫然として目間苦しい程四周に展開された無數の青緑の山々、濃紫の谷々、その懐に藏されてゐる夥しい氷雪の光を受けて、暫くの間楽しい恍惚の境を辿つた。

何と云ふ晴朗な目であらう、越中の峯々谷々には雲の微翳すら留めない。臥牛の如く蟠まつてゐる立山本峯の彼方に、濃藍色に抜け出てゐる槍ヶ岳の尖頂と、穂高の肩骨の右に連らなる長大な笠ヶ岳のスロープの上を、ゆる／＼と登る焼岳の煙の長閑けさ。そしてその後ろに紫藍の衾を重ねてゐる御岳乗鞍の悠美な山色は、西の方天外に碧翠の色を溶かして、縞面白き白金の雪の裳をかゝけてゐる、加賀の白山の優麗と共に、塵にまみれてゐる私の眼を喜ばしめた。

今年は薬師ヶ岳も黒岳も去年と見紛ふ程壯麗な雪で飾られて、黒岳山脈と野口五郎岳、三ツ岳の一

脈の間に刻に込まれてゐる東澤の溪流が、旭日を受けて鮮かな直線を黒部谷へ引落してゐる。蒼黒の肩を怒らしてゐる針の木岳、午の脊をむき出した様な蓮華岳の後ろの雲海の只中から、淺間が溶けさうな桔梗色の大頭を出す。根なし雲の様に立昇る噴煙も長閑に見えた。何處を見ても森林に埋められてゐる立山の東西は、遊山地としては餘りに陰鬱らしい。黒部別山もこの方面から見ると頂上まで森続きで、その懐にある内藏之助平も何となく暗い感じがする。今日は劔澤の岩屋で宿つて、明日内藏之助平へ出る積りでゐたが、槍ヶ岳まが行くのに餘り日數がかゝるので割愛して、室堂へ出ることに決めてしまつた。

時々鼻を掠めて行く硫黄の臭ひに、地獄谷の方を見下ろすと、何時も二筋しか出てゐない噴煙が今年は十四五筋も盛んに立昇つて、轟々と云ふ音が風に送られてこの頂上までも響いて来る。何か近い内にこの方面に異變があるのではないか。序に大爆發をして、富士の様な高い山を立山の上に重ねたら、嘸かし見事なことだらうなぞと途轍もない空想に耽ける。約三十分も経つと皆ぼつ／＼頂點へ集まつて來た。そして山客も山人も等しく、無言のまゝ環境の大觀に眼を見張るのであつた。立山本山へは繁々と登山してゐる山人達も、薬師岳まで位しか山の名を知らないもので、白馬山から一渡り山や谷の名を教へる。岩穴へ下りて名刺入れの罐を出して見ると、今年はまだ四五人しか登山してゐないらしい。一昨年私が納れて置いた名刺もちやんと保存されてゐる。

二時間餘も遊んで頂上を降り、山稜を傳つて長次郎澤の上へ出ると、雪溪の遙か下の方で黒點が六ツ七ツ動いてゐる、もう登山客が登つて來るなど思つた。四日ばかりの間に何だか人間に遭ふのが嬉しい様な氣になつた。人夫は皆七八貫目位の荷を負ふてゐるので、私はこの劔越えを氣遣つてゐた。殊に六十度もあると云ふこの澤の上部を荷を負ふて降りるのは、これが始めての試みであつたから、若し無理の場合には幾度にも分解して運ばうと迄思つてゐたが、靈岳の頂點を極めた山人等は勇氣數

倍してゐるので少しの躊躇もしずに悠々と降り始める。私は身輕なので先頭へ立つて行く。急峻な雪坂の上をさく／＼と心地よくカシジキの音を立てながら。一番急な所を降り切るといくらか緩かになる。この邊にクレバスが出来るのだらう、もうそれらしい線が硝子のヒビの様に斜に割れ込んでゐる。

暫くの間降つて行く内、私の周りは何方を見ても偉大なる花崗片麻岩の攪蕪と、旭日を受けて清光を放つてゐる大雪溪の晶魔とで埋められた。顧みると頂上續きの山積はもう何時しか見えなくなり、雪溪の上端が大きな凹弧線に剔られて眞に天空を劃してゐる。立派な窓だ。そしてその上を澄み渡る大空は、蒼空とか碧空とか云ふ單純なものではなかつた。白雪と對照する爲か、それは恐ろしく黒ずむだ空であつた。藍黑色に透き徹つた空の色の深さを私は始めて知つた。一年間目を皿の様にしても、都會なぞで見られる色ではない。まだ見ないが熱帶の海、人の死を誘惑する様なその海の色か、或はこれに似通つてゐはしないだらうか。黒百合の様に寂しい、魔の淵の様に恐ろしい、然も瑠璃な様に美しい彩光の流を包んでゐる、その空の色を私は永く忘れることは出来ないであらう。

熊の岩の間にある雪橋を渡つてその下へ出ると、芦岬の春藏が雪の上であぐらをかいて休んでゐる。その後ろにゐる登山家は、京都の若林、三上兩君の一行であつた。午前九時半頃に長次郎澤の出合まで下りて、皆な來る間にさ下流の瀧を見物に行き、劍澤の雪の少くなる邊りまで下りて、出合に戻る。皆岩の上に腰を下ろして休んでゐた。それから晝飯をすませ、劍澤の雪溪を兩岸に聳えてゐる美しくしい岩山の壯景を賞して別山乗越の上へ出て、午後六時に室堂へ着き劍越えを了つた。

私は翌日立山本峯へ登つて見たが、劍へ登つた時の様な引き締つた氣分にはなれなかつた。あの壯大な氷雪を匝らせる岩の殿堂、然もその屋梁を爲せる山稜の峨々たる壯麗は、恐らく神河内峽谷の美を併せ得たる穂高山の崔嵬を以て、僅かにこれに比すべきであらうと思ふ。私はそれから數日の後槍ヶ岳の穂先に立つた。——そこにはもう三角櫓も見えなくなり、屏風岩の處へ針金が釣されて少なか

日光山の瀑布

武田久吉

(17)

溪谷と流水に豊富な日光の山中に、瀑布の多い事は論を俟たない。古來日光の七十二瀑と言はれた位で、華嚴の壯、霧降の美、湯瀑の麗、七瀑の奇の如きは、實に海内無双といふも詛言とは思はれないが、是等の外に曰く何、曰く何と、名のついたものを始めとして、無名でも相當に看るに足るものを列擧すれば、其の數は五六十にも餘るであらう。然るに何故か日光に遊ぶ人士中、探瀑に日を費す者僅少なるは遺憾至極である。それには稱々の理由もあらうが、元來瀑布は山岳と違つて、遠距離から望み得る場合が少いが爲め、人の注意を惹いたり、又は探賞の心を唆る機會が多くないにもよることと思はれるが、又一つには其の結果として、案内記の類も餘りたよりになるものゝないにも職由するらしい。日光山の案内記中、華嚴、裏見を始め五六の名ある瀑布を紹介し、時には其の他の著名ならぬものゝ名を掲ぐるものはあつても、通例は其の位置や順路を示さないで、某山の西にありとか、

某々山中の絶壁に懸るとか言ふ位で、いざ探検にと志しても、何の澤を探つてよいのやら分らぬ場合が少なくない。

昨秋ある動機から、日光山中の瀑布の數、位置等を知りたいと思ひ立つたが、さて據所とすべき圖書に乏しく、又従前里人から聞き知つた名稱や位置も、尙ほ探究の餘地が少くなく、到底参考の資料となるものを編む事の不可能であるのを悟つたが、幸同好諸君から貴重な材料を賜はつたのに勇氣を得て、基本的調査の結果を一と纏にして、本誌の餘白を汚すこととする。萬一此の如きものが、讀者諸君の探瀑の動機ともなる様なことがあらば、それは筆者望外の喜びである。尙此の編を基として、未詳のものは他日自身探検した上、誤謬や遺漏を發見した場合には臨機訂正増補する考であるが、讀者諸賢も亦細大に係らず叱正の勞を吝まれずして、誤謬遺漏を減するに一臂の力を添へられんことを御願して置く。

記載の順序は、先づ各溪流によりて系統を分ち、下流より始めて上流に及ぼし、溪流は日光の東部より始めて、漸次西部に及ぼす豫定であるが、時には臨機の處置を取つて、多少變更する場合もあらうと思ふ、又溪流中短くて名も顯れて居ないものは、便宜上著名なるものゝ支流として取扱ふ事とする。

目 次

一、板穴川筋	………	二〇頁
一、霧降ノ瀑。	二、丁子ノ瀑。	三、粘澤ノ瀑(又華魁瀑)。
四、玉簾ノ瀑(又眞闇瀑)。	五、胎内ノ瀑。	六、空瀑。
七、細薙ノ瀑。	二、鳴澤筋	………
三、三三頁	………	………

- 三、赤澤筋………二三頁
- 八、大瀑（又不動ノ瀑）。
- 四、稻荷川筋………二四頁
- 九、雲龍ノ瀑。十、初見ノ瀑。十一、七瀑。
- 五、天狗澤筋………二七頁
- 十二、白絲ノ瀑（又瀧ノ尾ノ瀑、又素麵瀑）。
- 六、根取川筋………二七頁
- 十三、相生ノ瀑（又白絲ノ瀑、又素麵瀑）。
- 七、田母澤筋………二八頁
- 十四、寂光七瀑（又布引瀑）、十五、羽黒ノ瀑（又一ノ瀑）。
- 八、荒澤筋………二九頁
- 十六、裏見ノ瀑。附相生、白絲ノ瀑。十七、日月ノ瀑。十八、初音ノ瀑。十九、慈観ノ瀑。二十、唐瀑。二十一、紀伊坂ノ瀑。
- 九、深澤筋………三一頁
- 二十二、方等ノ瀑。二十三、般若ノ瀑。
- 十、大谷川筋………三二頁
- 二十四、素麵瀑。二十五、清瀑。二十六、旭瀑。二十七、阿含ノ瀑。二十八、白雲ノ瀑。二十九、涅槃ノ瀑。
- 三十、華嚴ノ瀑。卅一、十二瀑。
- 卅二、御澤筋………三四頁
- 卅三、梵字ノ瀑。

十二、湯川筋	………	三四頁
十三、龍頭ノ瀧。十四、龍雲ノ瀧。十五、湯瀑。	………	三五頁
十六、外山澤筋	………	三五頁
十七、緑ノ瀑。十八、庵ノ瀑。	………	三五頁
十九、冷澤筋	………	三五頁
二十、美彌來ノ瀑。	………	三五頁
二十一、柳澤筋	………	三五頁
二十二、赤岩ノ瀑(又西ノ瀑)。	………	三六頁
二十三、人工ノ瀑	………	三六頁
二十四、按摩瀑。二十五、白髮瀑。	………	三七頁
二十六、其の他の瀑	………	三七頁
二十七、滑川ノ瀑。二十八、瀧頭ノ瀑。二十九、三界ノ瀑。	………	三八頁
三十、追記 小瀑	………	三八頁

一、板穴川筋

(赤羅山の東面より出て、東南に向つて流れ、終に會津街道の
一宿大桑の東北で鬼怒川に合する。上流を瀑澤と呼ぶといふ)

一 霧降ノ瀑。日光三名瀑の一として古來人口に膾炙して居る故、今詳記するのを避けるが、瀑は二段となり、其の高さ合計二十五丈といふ。水は石英斑岩の急斜面を流下するので、宛然布をかけたるが如く、それが玉と碎け銀絲と亂れる處は實に優美で、女性的の瀑布である。下段の瀑の中央に露出して居る岩石は、見方によつては瀑昇りをして居る鯉の背の様でもある。

霧降ノ瀑を訪ふ順路は、日光橋より大谷川の左岸に沿うて日光小學校の側に出で、稻荷川を渡り興

雲律院の前を通り萩垣面を經、赤澤を渡り小倉山の南面を迂迴し、鳴澤を渡つてから道を北に取つて日陰のないつまらぬ道を一上一下して終に霧降瀑の南岸に當る丘陵の一凸點に出る。此處に茶店があつて其處から已に瀑を望見することが出来るが、更に險道を五六丁も下つて瀑壺に達すれば、其處から下段のものを十二分に賞することが出来る。猶霧降瀑の附近で注意すべきは、此の附近一帶の山地が笹やス、キ等の童山であるのと異つて、瀑壺の四周にはよく大小の樹木が鬱蒼と繁つて居ることで、山地に於ける水分と樹木との關係の深いことが、一目にして了解さるゝのである。

霧降瀑迄は日光橋から一里三丁といふが、實際は中々歩ききであつて、一里半位に感じられる。

二 丁子ノ瀑。霧降ノ瀑の上流七八丁の地點に、西から一支流丁子澤が注入する。此の合流點より西方丁子澤の上流約二十間の所にあるのが即ちそれである。瀑は赤蘆の熔岩の凸出した所から落下するので、一寸裏見ケ瀑の小規模のものと云つた工合である、其の下流が數間流れて直に第二段の小瀑布となつて瀑壺へ注ぐのである。思ふに瀑は昔此の瀑壺の所に懸つて居たもので、それが水害等の爲に漸次後退して現在の位置に到つたものであらう。

丁子ノ瀑を探るには霧降ノ瀑見茶屋下手家屋の直手前から左に入つて、一寸した畠の間を通過し、小徑を西北に十丁程も進むと、徑が兩岐して、左霧降鑛山道と記して小さい標木が立て居る、此處から右に四五丁も降ると終に霧降の上流即ち瀑澤に出る、これから川原を六七間も溯ると丁子澤と瀑澤との合流點に出る（霧降の茶店から半時間程を要する）、それからは亂石を越えて丁子澤を溯るので、二十間程で瀑に達するのである。

此の瀑を眞闇ノ瀑と呼ぶ人もある様だが、本當のものは尙瀑澤の上流にある。

三 粘澤ノ瀑（一名華魁ノ瀑）。前記の丁子澤を涉りて瀑澤を横斷し、其の左岸を上ること二十四五間で瀑澤にあるものを言ふ。此の瀑は瀑澤の流水が河中の巨岩の爲めに二流に分れ、水は階段狀の河床

を流れ下り、瀑となつて落ちながら復一點に會するもので、寧ろ急湍と呼ぶ方が適當であるかも知れないが、水は淺く靜に流れて甚だ雅趣ある瀑故、觀賞するに足りるものである。

瀑名は附近に粘土を産するによつて起つたといふ。又華魁ノ瀑とは何によつて命名されたものか不明である。

四 玉簾ノ瀑（一名真闇ノ瀑）。粘澤ノ瀑から十丁内外も上流に於て、冷澤つめたといふ一支流が西から流入する、その合流點から二十四五間の所に懸るのが即ち玉簾ノ瀑で、赤蘆の熔岩が棚の如く差出でた所から落下する水は、高さが十四五間もあらうかといふ。以前は瀑の周圍に大木が密生して、瀑も容易には見えない程であつたが爲に、真闇ノ瀑といふ名も起つたのだが、此の邊の山腹一帯の地が牧場となつて以來、伐木した爲めに明に見ることが出来る様になつたのである。

玉簾ノ瀑に達せんには、粘澤ノ瀑から霧降本流の左岸を傳つて上ればやがて西岸に瀑を認むることが出来る。若丁子ノ瀑又は粘澤ノ瀑を見ずして、直に玉簾ノ瀑を訪ねやうといふ人は、前記の丁子ノ瀑に下る路を右折しないで、所謂霧降鑛山路を行き、丁子澤を涉り、其の東の尾根をこえて終に冷澤に達することも出来る。

五 胎内ノ瀑。玉簾ノ瀑より約一里上流に當り、霧降本流の北岸に聳立する無名の山で、上三分一は笹に蔽はれ、下三分二に雜木密生するものがある、其の山腹の笹と雜樹との分界點に近い所から流水が湧出し、二條になつて霧降の本流に注入するものである。溪流に懸るのでなくて、山腹から急に湧出するので、恰も胎内から流出する様である處から、名けて胎内ノ瀑といふのだと聞く。

胎内ノ瀑は、次に記す空瀑からの下約三丁の所に在るもので、隨つて順路も其の條下に詳記してあるから参照され度い。

六 空瀑。霧降本流で、霧降から約二里の上流にある。傳聞する處によれば下部は石英斑岩で其の上

を熔岩が蔽ふ處のものらしく、夏期又は大雨の後のみ水の落下を見るが、他の時期には乾涸し、只僅に河床凹地より水少許湧出するのみといふ、しかし瀑壺は全く岩石のみ故、水ある時は飛沫四散し美觀を呈するといふ。寫眞は大正六年十一月七日日光警察署長外山正彦氏の踏査隊の一行が瀑壺に立つ處を撮影したもので、瀑壺より一段(高さ六尺位)で河床となるもので、霧降の水源であるといふ。空瀑に到るには冷澤合流點から少許本流の東岸に沿ひて上り、躑て本流を西に涉り、山の尾根を傳うて北に向ひ終に再び本流に出ると此の空瀑があるといふ。冷澤合流點から行程一時間を要すといふ。上述の通り霧降ノ瀑の上流には五箇の瀑布があつて、其の或者は髓に一遊の價値があるが、滅多に訪ふ人もないので路さへ餘り判然せず、瀑名さへ人によりて言ふ處が一致しない傾がある。又霧降の下流には滑川ノ瀑と云ふものなどがあるが、是等につきては編末に記すこととする。

二、鳴澤筋

(赤薙山の南面山腹に源を發し、三四の支流を合せて東南に流れ、小倉山の東麓を匝り大谷川に注ぐもの)

七 細薙ノ瀑。鳴澤の水源地で、赤薙山の東南面の薙から鳴澤に連續する懸崖地にあるもので、夏期増水期又は多量の降雨後に落下する、平素は無水の空瀑であるといふ。水ある時は霧降道から西北方に望見することが出来るといふが、自分は未だ之を判然と指示されたことがないので、是以上を記すことの出来ないのを遺憾とする。

鳴澤には此の外に瀑はないといふが、鳴澤筋は未だ實査を経て居ないから不明である。

三、赤澤筋

(源を赤薙山の東南面の裾に發し、東よりする一支流小岩澤を合せて、小倉山と外山の間を流れて未は萩垣面の南で大谷川に注ぐ)

八 大瀑又不動ノ瀑。外山の東稍北にて、赤澤の本流犬母ヶ澤と支流小岩澤と合流する箇所より數丁上流で、本流にあるものを言ふ。高さ三四丈程。距離は萩垣面から約十八丁。(尙三八頁「追記」参照)。

五萬分一の地圖によると、赤澤の上外山の正北と、此の流れに注ぐ一支流の上流とに瀑の符號があるが、地圖上には記名なく、里人に質しても目下不明である。是等は他日自身探検してから委細を報告する考であるが、尙他に信ず可き記事報告等を得た場合には直に本誌上に掲載する心算である。赤澤の上流に入るには、稻荷川の左岸與雲律院の東に沿へる細徑を北に辿れば、やがて赤澤に會するので、これについて溯れば可なり奥までは流れに沿ふて細徑が通じて居る筈である。

四、稻荷川筋

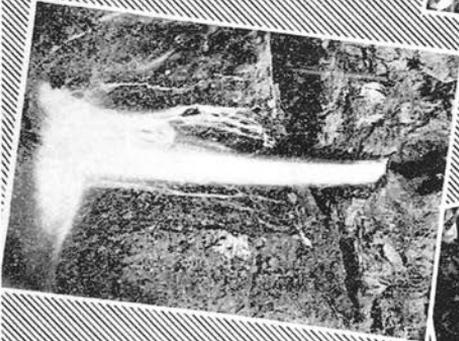
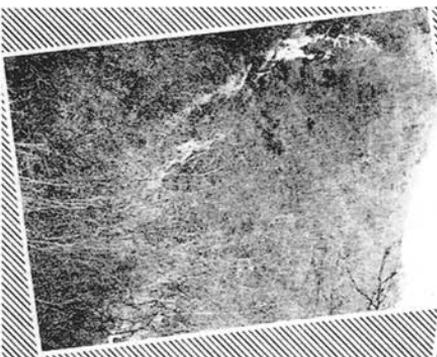
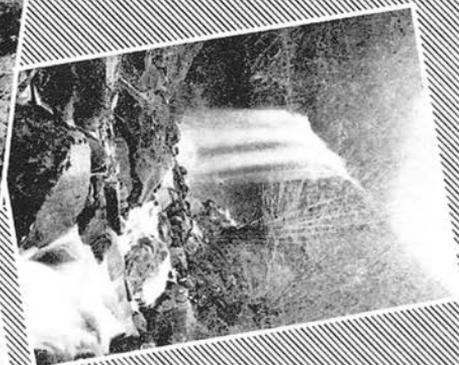
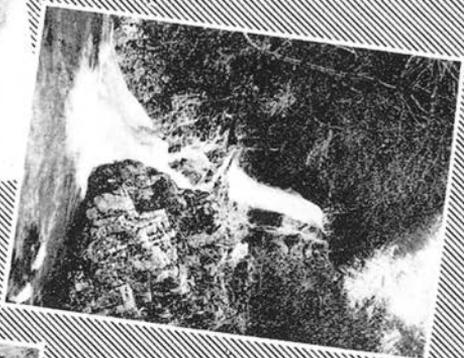
(源を女観山と赤羅山の間で發し、神橋の四五丁下流で大谷川に合す)

九 雲龍ノ瀑。稻荷川は由來傾斜が極めて急で、川其者が瀧の連續したものである位だから、大小無数の瀑布を懸るが、左右の山腹より稻荷川に注ぐ小流中、又瀑布をなすものが少なくない。雲龍ノ瀑は川を溯ること二里餘の地にあるもので、高さは約五十間、幅は六尺乃至八尺といふ。水量は常には甚だしく多くはないが、雨後には急に激増することゝ思はれる。

十 初見ノ瀑。雲龍ノ瀑の更に上にあるもので、雲龍にも劣らぬものだ云ふ。

稻荷川の上流は人跡極めて稀な地で、日光山中の神祕境である。雲龍ノ瀑は何年頃の發見であるか明でないが、これが十餘年前迄の此の川筋に於ける人跡の最終點であつた、然るに去る明治三十五年日光淨上院住職今井徳順師等の一行が更に其の上流に分け入つて、雲龍に劣らない瀑を發見したので、假に初見ノ瀑と命名されたのであるが、其の後明治四十年同氏等は再擧を計つて初見よりも更に上流にまで攀ち登つたが、終に七瀧に達することなくして退却するの止むを得ざるに至つたといふことである。稻荷川上流は險阻を以て鳴る所で、雲龍ノ瀑に到るにも細引の用意が要るといふし、初見以上は登攀が不可能に近いといふこと故、餘程の用意と熟練を要するは言を俟たない。

稻荷川に入る順路としては、先づ瀧ノ尾に到り、それより奥に通ずる小徑を辿つて遂に川原に出で、



瀑の内胎 (左段下)

瀑大 (右段下)

瀑子丁 (左段上)

瀑麻玉 (央中段上)

瀑空 (右段上)

遊覧の瀑見葉 (央中段下)

(阿奇氏彦正山外上以)

其の先は岩石を飛びこえ絶壁を這ひ上つて進むより外に道がない。

十一 七瀑。稻荷川の主な水源をなすもので、女貌の前山の中腹の赭赤色に禿げた岩壁（赤ッ堀と呼ぶ由）の下部と、赤蓮山の一部とに懸つて居る。數は必しも七個に限らないで、大雨の後では十個以上を算することもある。水量は多くはないが、高さは測り知ることが出來ないで、何れも絶壁に白銀線を下垂した様で奇觀である。

元來此の邊一帶の景は如何にも奇を極めて居るので、到底筆紙に盡し難いと云ふのみならず、全景をレンズに收めることすら不可能である。

瀑は之を瀑壺から仰ぐことは未だ嘗て爲し得た人がなく、通例對岸の山腹から望見するのみである。其の地點は、女貌登山路に當る八風の少し先で、稻荷の右岸にある。五萬分一の地圖に、其の直西に當つて絶壁に臨む小鞍部がある、此所から稻荷川の深谷を距て、七瀑を望見するので、地域が甚だ狭いから、多人數で吾勝に瀑を見ようとすれば、絶壁から墜落するを免れない。

前記の地に至るには、二荒山神社の西北隅から、數百階の石磴を登りつめ、行者堂即ち足尾神社と



て役ノ小角を祀つてある小堂の背後から草木の繁茂して居る細徑を辿つて御堂山みだうやまに入り、遂にカラマツやヒノキの若木が植林してある尾根に出て少下り、一小鞍部に出てから正面の急な山腹をカラマツの若木の間を縫つて登ると禁断の石（一名殺生石）に出る。昔は此處は眺望のよい所で女貌赤薙の兩山がよく見えたが、今はカラマツが生長して一向に眺望はなく、禁断石さへ見當り難い程となつてしまつた。此所まで漕ぎつければ後は至極簡單で、植林してあるカラマツの間や、矮小なミヤコザサ（俗に云ふ熊笹の一種にて、本當のクマザサ即ち隈笹とは別者）の間に通じて居る一本道を女貌山目がけて上ればよいのである。禁断之石から可なり登ると兒ヶ墓に出で、更に上ると白樺に達する、こゝから急な八風を上りきつて、頂に近いザラザラ石の崩解して居る崖を横ざると、前述の小鞍部に出る。日光から二時間半内外で達することが出来るが、初めて登る人は途中で眺望を貪つたり又は路が知れ難いこともあらうから三時間と見る必要があるかも知れない。尙委しくは「山岳」第三年第二號所載北澤氏の女貌登山を參照の事。此の小鞍部を俗に七瀑と呼ぶが實は七瀑を望見し得る地といふにすぎない。七瀑其者の懸る深谷は、兎角霧が出易い故、觀瀑を目的として山に登る人は、晴天を見極めて早朝出發することを忘れてはならない、尤も自分は雨中の七瀑を見たことが兩三回はあるが、瀑は見えても雨天では餘り愉快ではない。

稻荷川の谷は日光に於ける最大神祕境で、景の奇なるを以て晃山第一とする、そして水量は上流に至るに従つて多く、到底日光町の附近で見える様な僅少なものではない、隨て飛泉もあり深潭もあるし、絶壁の怖ろしいものも峙つて居る。溪谷の好きな人で、危険を恐れず、命に掛替のある人は是非探検すべき所だと思ふ。稻荷川に入るには瀧ノ尾からが最よいと思はれる、瀧ノ尾以下では景が平凡なものと、川原には路がなく歩行に時間を浪費するの外には得る處がない。上流には野營に適した地がないが、中流以下ならば岸に上つて天幕を張ることも出来る。昔は日光から小一里も上つた所に砂防工事の人

夫の宿泊する粗造な小屋があつたが、今はどうなつて居るか明でない。

五、天狗澤筋

(源を女峯山の南腹なる字白樺の東に發し、稻荷川と略平行して流れ、瀧ノ尾を経て一部は稻荷川に合し、一部は東照宮の御供水として山内に入るもの)

十二 白絲ノ瀑。瀧ノ尾にあるので一に瀧ノ尾の瀑とも呼ぶ。瀧ノ尾は東照宮の西北に當り、神橋から十五丁程もある。此の地に達するには、前條に記した行者堂から右に坂路をダラ／＼と下り本道に合してから左へ二三丁も行けば達する。本道は日光橋を渡り左に折れて長坂を上り、登りつめたところで左折しないで真直に二丁程も行き、更に少し下つて櫻の馬場を経右曲左折して日光を今から一千五百五十二年前開いた勝道上人を祀つてある開山堂のある佛岩といふ地を経て、略稻荷川に平行して其の左岸を、美しい杉並木の間を苔むす石を踏んで行くのである。白絲ノ瀑を素麵瀑と呼ぶ人もあるが、誤でないとするも、一異名にすぎないので、本當の素麵瀑は大谷川の右岸かたがは憾あやま翰たの南にある。

六、根取川筋

(女峯山の東南面字白樺の西より源を發し、同兒ヶ墓附近より發する一支流を合せ田母澤に注ぐもの)

十三 相生ノ瀑(一名素麵瀑、又白絲ノ瀑)。根取川の本流と、兒ヶ墓附近より發する支流とが、里俗倉下と稱する地で落合ふ所に、各の流が瀑となつて、相對して懸つて居る。其の南に面するものを雄瀑と呼び、西に面するものを雌瀑としてある、よつて相生ノ瀑なる名がある譯である。

順路は日光入町の西端にある釋迦堂の角を右に折れ、田母澤たもざはに沿うて寂光に通ずる道を行き、釋迦堂から約十丁も進んで、路が急に西に折れる所から右に雜草を排して小徑を辿り、遂に溪水に沿うて十丁内外も山間を進めば達することが出来る。慥に一遊の價のある瀑であるが、雜草が繁茂して道の知れ難いのは遺憾である。

七、田母澤筋

(源を女観山の南面に發し、二三の支流を合せ日光町の西、惣輪の稍下で大谷川に注ぐもの)

十四 寂光の七瀑(一各布引ノ瀑)。明治四年日光山の神佛混淆禁止以來、寂光を若子と書き、之を無理にジャッコと讀ませてある。これは元來寂光權現を祀り、寂光寺の舊跡であるのを、神として若子神社と改めたのであるが、寧ろ寂光の方が通りがよい。瀑は田母澤の一支流寂光澤にあるもので、水は四五段となつて、其の一部は岩石の上を滑り流れるので、布を引いた様であるところから布引ノ瀑とも呼ぶ次第である。

寂光は神橋から三十四丁と註されてある。相生ノ瀑の條下に記した道により、全然田母澤に沿つて行くのであるが、舊境内の入口までは辛うじて人力車を通じ得る。

寂光ノ瀑は昔選ばれた日光八景の一で、徳川時代に來聘した朝鮮の正使趙泰億の詠じた左の詩が残つて居る。

炎天樓閣欲生寒 千尺飛流落翠巒

時有遊士來入洞 錯疑雷雨門林端

十五 羽黒ノ瀑(二名一ノ瀑)。若子神社の北五丁許の地で、田母澤の本流に懸るが、日光山志には羽黒山と稱する山の麓から流れ來るより斯く名くごある。瀑は二段になつて落ち、下段のものゝ下流を横ぎつて、左岸の崖を上ると、上段の瀑の下に出ることが出来る。其の上には、餘程の上流は知らず、近くには外に瀑は見當らない。

羽黒ノ瀑は水量も中々多いし、形も整つて居るのと、近づき易い特徴もあり、霧降、裏見、華嚴の三名瀑を除いては、第一に推すも差聞ない位立派なものであるし、又日光からの距離も僅で、道路も可なり良いから、是非一遊を御勧めする、昔は若子神社から先は荊蕪を排し、流水を徒渉などして、

辛じて瀑下に達する程であつたが、昨秋から道路も修繕されて、大層歩きよくなつた。

八、荒澤筋

(本流は大真子、小真子兩山の南面から流出し、二三の支流を合せ、南流して大日堂の附近で、大谷川に注ぐ)

十六 裏見ヶ瀑。日光三名瀑の一人で、荒澤筋では最古くから知られて居て有名である、又一に荒澤ノ瀑ともいふ。明治三十五年九月二十八日の大水害前迄は見事な瀑であつたが、此の時上流から大木大石が怒濤の如き水と共に流れて来て、其の爲に瀑口の差出た岩を破壊したので、瀑は五六尺も後に退いた、其の結果裏を通行することも不自由となつてしまつた(其の當時は不可能であつた)加之瀑水が途中で岩に觸れて飛散するが爲めに、美觀を失つたのみならず、水沫が立つて附近を潤すので、永く瀑を賞して居ることも出来ない様になつたのは遺憾である。瀑の上には荒澤不動を勧請し、昔は籠堂さへあつたといふ。

裏見ヶ瀑の左右にも小瀑布が懸つて居るが、水量も少いので水害以後は甚しく其の美を損じて、一顧の値もない様になつてしまつた、右のを相生、左のを白絲と呼ぶといふ。

裏見ヶ瀑は神橋の西一里十丁の距離にある、今は其の途中まで電車を利することも出来るし、又道路も近年改修されて、歩行にも容易である。

十七 日月ノ瀑。裏見ヶ瀑の裏を経て左岸に上り、更に其上流に沿うて細徑を二三丁も上下して進むと、路は一小池に達して止まつてしまふ、此の池を前に控へて荒澤が瀑を形作つて居るものが即ち日月ノ瀑である。瀑は大して高くはないが、四隣の風景がよく整つて居るから、小規模ながらも見事な瀑である。裏見に遊んだ人は一投足の勞であるから、日月ノ瀑を訪はん事を御勧めする。

十八 初音ノ瀑。裏見ヶ瀑の上流十餘丁の地で、同じく荒澤が瀑を懸ける、遺憾なことには容易に瀑側に達することが出来ないで、只丹青山たんせんやまの裾にある慈觀ノ瀑路から之を望見するにすぎない。

此の瀑は元と日月の瀑と呼ばれたのであるが。故北白川宮能久親王が輪王寺門跡の時、此處に遊ばれて鶯の初音を聞かれ、依て今の名に改められたるのだといふ。

十九 慈観ノ瀑。裏見から小一里も上流にある。瀑は高さ三丈内外で、敢て奇とする程でもないが、瀑の上流敷丁の間河原が凹凸ある熔岩の一枚岩で、其の上を溪水が數條に分れて流るゝ所が値打である。そして瀑自身も數條に分れて落ちるので、瀑背は裏見と同様に集塊岩が崩れ落ちて間隙をなして居る。

此の瀑は慶應二年慈観僧正の開いた處で、其の名もこれに因て起つたものと言ひ傳へてあるが、實際は何時頃か樵夫か何かが見出したもので、其の景の奇なることより土人の間に喧傳されたのを、何年の頃か記録はないが、慈観僧正が瀑背に不動尊を祀つたので更に有名になつた、然し此の頃已に名稱があつたかどうかは不明である。此の慈観僧正は日光華藏院の住職であつて、當時の高徳として大に尊敬された人で、後其の頃一山の學頭であつて、學徳兼備の僧を戴くを例とした修學院に轉じ、慶應二丙午年八月七十餘の高齡で入寂されたのである。依て人々は同師の徳に報いんが爲め、同師と因縁淺からざる此の瀑を、慈観ノ瀑と呼ぶに至つたものと考へられる。

慈観は紅葉の名所として知られて居た、秋期行厨と瓢を携へて此處に遊び、彼の一枚岩の上に座を設けて紅葉を賞するなどは他に比類のないところであつたのが、後樹木は伐つて薪炭とされ、濫伐が原因の一となつて大洪水を起し、有名な一枚岩も闕け折れて瀑は後に退き、川原には木石が所狭きまに散亂し、又瀑の左岸に凸出した一地點で、瀑を観るに最良かつた場所が崩れ落ち、往年の態は到底窺ひ知ることが出来ないのは惜しむべきことである。

慈観に遊ぶのは、裏見の下の茶店の側から荒澤を渡り、其の右岸について右に志津道を上り、小徑が兩岐する所で其の右のものに従つて、澤からあまり離れない様にして辿れば遂に到達する。

尙此の外に、寧ろ順路としては、裏見ヶ瀑の直ぐ手前で、瀑に向つて左の崖に上る細徑がある。初

めは稍瀑の下流に向つて斜に上るが、やがては右曲して、前述の路に會することになる。若し裏見を訪ふた上、更に慈観までも遠征しようとする人には、此の路をとる方が、距離に於て大に利益である。

二十 唐瀑。慈観の更に上流で、川原傳ひに亂石の間を數丁溯ると、岩石が重疊して、一見瀑の様に見える所に出る。水は大雨の後では此の岩石の上を流れるのだらうが、平常は此の唐瀑の下から湧出して居る。上流の水は何處かで川床をくゞつて、唐瀑の下から復湧出するものと考へられるが、未だ唐瀑以上に上る機がないので明言することが出来ない。

唐瀑まで達した人は、歸途は往路を戻るよりも、路はないが左岸の草原を東に七八丁も上つて、富士見峠の道に合し、此の道を下つて、出面峠いづらを経て再び裏見の茶店に達するもよし、又は更に東に下つて寂光に出ることも出来る。此の方が變化があつて面白い。

廿一 紀伊坂ノ瀑。明治二十一年印行農商務省地質調査所の二十萬分一日光圖幅によると、荒澤の上流あたりに紀伊坂ノ瀑なるものが記してある。自分は未だこれを確める機がないのを遺憾とするが、此の瀑の存在を知る人も殆んどない處を以て見るに、或は現存しないものかとの疑も起らざるを得ない。これは他日存在の確證を得てから記すより致方がないが、何方か其の眞否を報知して下らば幸である。

九、深澤筋

(男峠の東南麓から流れ出る數流の短い溪水を合せて、深澤橋の下で大谷川に注ぐもの)

廿二 方等はらだらノ瀑。中禪寺道の深澤の茶屋から、女人堂を経て四五丁も上ると、劍ヶ峯の茶屋に達する。此の茶屋から對岸に二つの瀑を見る其の向つて右の細いものが方等ノ瀑である。

廿三 般若はんげんノ瀑。右同所から左に見えるもので、水勢の盛な方である。

右の二瀑については、「山岳」第十一年第二號三二頁にも一寸記した通り、日光山志には向つて右を

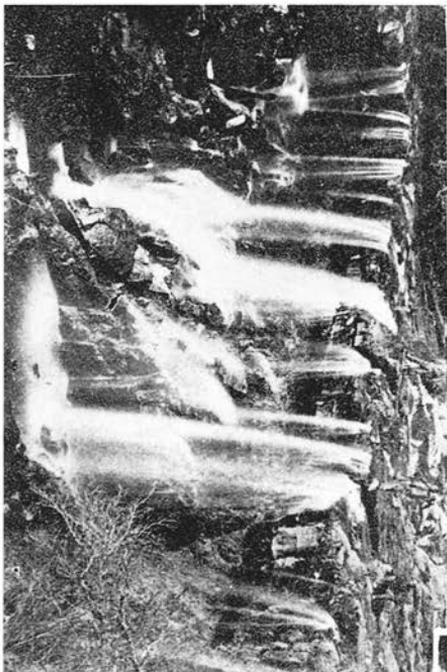
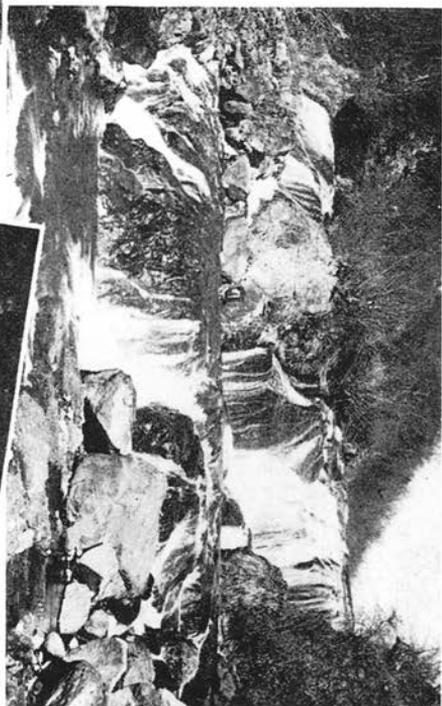
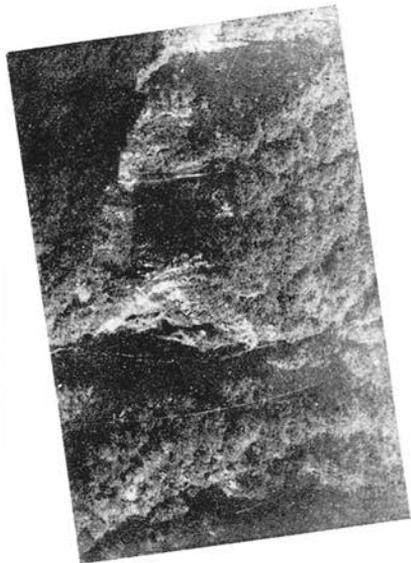
方等、左を般若としてある、其の他では三好理學博士編著日本植物景觀第二集（明治三十八年刊）に向つて左のものを般若として掲げてある、然るに五萬分一地圖を初め坊間にある地圖案内記等には此の逆に出て居るか又は曖昧にしてある、日光山志の方が正しいとは思ひながらも味方が少いので主張するにも多少躊躇するが、どう考へても右を般若、左を方等とするのは誤りと思ふ。由來日光山は僧門に因縁が深い、それで華嚴、阿含、方等般若の瀑名は皆佛典から出たものである。即ち圓滿無量で深山の奥に潜むで居る中禪寺湖を法華に譬へ、其の次に來る最大な瀑を偉大なる華嚴に比して華嚴ノ瀑とし、次を般若、次を方等、最小のものを釋迦牟尼佛が鹿園時に説いた阿含教に比して阿含と大さの順に命名してある。して見ると劔ヶ峯の茶屋から向つて右に見えるものゝ方が左に見えるものよりも小いから、之を方等として、夫れよりも壯大な左のものを般若とすることが不當とは思はれない。

十、大谷川筋

（中禪寺湖より流下して、末は鬼怒川に合するもの。此の川の筋の本流にある瀧と無名の小支流に懸る瀑とを次に録す。）

廿四 素麵瀑。前に記した白絲ノ瀑や相生ノ瀑にも素麵瀑なる異稱があるが、通常素麵瀑の名を以て呼ぶものは、大谷川的一名所憾給ヶ淵（俗にガンマンといふが、元來不動の眞言中にある梵語のカンマンであるの故、假令如何なる漢字をあてゝあらうとも、カンマンが淵と呼ぶのが正しいのである。貝原益軒の日光名勝記には、これを聞き違へてか釜ヶ淵と記してある。）に到る通行橋を渡り、直に右折し間もなく左折して、錢澤不動に至る道の入口から復右折し、原野を横ぎつて、やがて小溪に會したならば是について上れば四五丁にして達する。瀑はあまり高くはないが、水は數段に分れた岩石の上に散りかゝつて白沫を飛ばし、假令幽邃の趣はないにしろ、近づき易い瀑で、慥に一遊して落膽しない瀑である。此の瀑の下流は憾給ヶ淵の直下で大谷川に注ぐものである。

二十五 清瀑。馬返しより稍下なる清瀧村の清瀧権現の社後なる崖に懸る小瀑布である。高さは三四



影攝氏幸基澤北) 瀑の觀遊 (左段上)
應舊の瀑の觀遊 (左段下)

(附寄氏彦正山外) 瀑の潭粘 (右段上)
(影攝氏幸基澤北) 瀑の潭粘 (右段下)

丈もあらうかなれど、水量は僅少であるから、單に名所であるといふに止まつて、瀑見物に出かけるには稍々もの足りないのは惜しいことである。

二十六 旭瀑。馬返よりも上流で、大谷川に架してある榮橋の稍々下、川の左岸に崖上から飛沫を散じて道路に落下する水を旭瀑と呼んで居る。近年新道が此の瀑下を通らず、川の右岸を行くので水に潤ふ心配もなくなつてしまつたのは、甚だ幸ひである。

二十七 阿合ノ瀑。劍ヶ峯の途上中ノ茶屋から華嚴ノ瀑の下流を距て、對岸の山腹に小瀑の懸るのを望見することが出来る。此の邊での最小の瀑で大して見る價値もないものである。

二十八 白雲ノ瀑。大平から華嚴ノ瀑壺へ下る途中で、此の瀑を横切る事になつて居る。水量は中々多く、それが岩石に激して玉と亂り霧を起して、數間の幅で懸崖を流れ下るところは中々壯觀である。此の瀑を横ぎつて架けてあるのが、譚の橋である。

二十九 涅漿ノ瀑。大谷川の本流華嚴ノ瀑の下流數十間の所に近來路を一瀑布に通じ、これに名づくるに涅漿ノ瀑を以てしたが、瀑は此の名を冒すには餘りに小さ過ぎる。寧ろ鹿園ノ瀑とでも命名した方が適當であつたらうに。一説にはこれが本當の阿合で、前記のものではないといふが、今之に斷案を下すに困難を感ぜざるを得ない。只此の如き峻路を下つて初めて見得る様な瀑が、華嚴、般若、方等などの命名を見た頃に、己に知られて居たかどうか疑はしいと思はれる。

三十 華嚴ノ瀑。日光否恐らく日本第一の大瀑布華嚴については多く言ふを要すまい。昔は高さ七十五丈幅八間と稱へたが、大正三年一月栃木縣基本調査會に於て實査の結果は、高さ三百二十六尺といふ事であるから、傳説は事實の二倍以上である。落口の幅も實際は四間内外にすぎないが、兎に角大したものである。尙右實査の結果によれば、瀑壺の長さ二十間、廣さ三十間、水深三十六尺といふことである。

昔は只瀑を崖上から斜めに望見したにすぎなかつたが、明治三十四五年頃であつたか、星野五郎平といふ老人が新道を開鑿して、今は瀑壺附近から之を仰いで其の壯觀に倦くことを得る様になつた。

華嚴も裏見と同様に土臺が石英斑岩で、上部に熔岩があり、中途には集塊岩があるから、自然瀑背に間隙が出来て、裏から瀑を見得る様になつて居る。瀑背に達するには瀑の上流を横切ぎつて右岸に出で、断崖に路を寛めて下るのであるが、良案内さへあらば案外に僅少な危険を以て行ひ得るものだといふ。

三十一 十二瀑。華嚴ノ瀑の背後の岩壁の中段に十數本の瀑が懸つて、同じ瀑壺の中に落下する、之を總稱して十二瀑と言ふのである。これは中禪寺湖の水が、華嚴瀑背の山腹をなす熔岩の下にある集塊岩の間隙を通過して漏れるもので、これ以下の岩石は主として此の邊の最古の山骨をなす石英斑岩から成つて居るのである。

十一、御澤筋

(男鉢山の北裏から大真子、太郎山等の水を集め、西流して戰場ヶ原に開くが、平常は無水の川原である)

三十二 梵字瀑。御澤の中流で、右岸から御澤に注ぐ澤にある。此處は目下西澤金山の鉄索の中繋所となつて、道路も大に修繕された故、湯元から一時間位で達することが出来る。自分は御澤を通過した経験はあるが、未だ梵字瀑を見る機會を有しないのを遺憾に思ふ、しかしあまり立派な瀑ではないことゝ想像する。

十二、湯川筋

(湯湖より出で、戰場ヶ原を貫流し、菖蒲ヶ原にて地獄川に合して中禪寺湖に注ぐ)

三十三 龍頭瀧。湯川が地獄川に合する少し手前で、湯元道の左手にあるもの、古來人のよく知る處のもの故詳述する必要はあるまい。水は凸凹極まりなき川床の巖上を奔湍となつて落ちるのである。

又川の左右にはコマツガ等の針葉樹がシラカンバ等の闊葉樹と交つて生じて居る景は捨て難い風情である。

三十四 龍雲ノ瀧。龍頭ノ瀧の直の上の所を龍雲と呼んだことがあるが、この名はあまり著名とならずに終つた。蓋し龍頭の續きで、其の一部とも言へば言へる位のものである。龍雲の更には湯川の流れに中々の好景があつて、水は實際に瀧をなして流れて居る。

三十五 湯瀑。奥日光第一の名瀑である。高さは二百尺許り、下部は巾六七間もあろうか、水は二段となつて石英斑岩の斜面上を落下するが、上段は二三間程で直に下段の瀑の主部となる、下からは上段の方は見えない。此の瀑は龍頭を過ぎて赤沼ヶ原に入るや已に望見し得るが、側に近づいても之を下からも中途からも又落口からも見る事の出来る、至極近づき易い瀑である。

十二、外山澤筋

(前白根の東端に位する外山の南面より發し、中流以下で冷澤に合し、千手原を貫流して末は中禪寺湖に注ぐ)

三十六 緑ノ瀑。みどり外山澤上流の二派に分れる處にあるものだといふが未だ實査したことがないので確言し難い。

三十七 庵ノ瀑。いほり緑瀑の西に當つて同じく外山澤の一支流にあるといふがこれも未見。

十四、冷澤筋

(外山澤より一峯を距て、其の南にある澤で、末は外山澤に合して千手を貫流する)

三十八 美彌來ノ瀑。みやこ冷澤の上流にあるといふが未見である。

十五、柳澤筋

(錫ヶ嶽の東面から出る澤で、西ノ湖の北を流れ、湖の下流の水を合せ、千手ヶ原を貫流して中禪寺湖に注ぐ)

三十九 赤岩ノ瀑。柳澤の上流にあるもので、附近の岩石赭赤色を呈するが爲に赤岩瀑と呼ぶといふ、

又一に西ノ瀑とも稱するらしい。距離は不明であるが湯元から一日で往復し得るといふことである。千手入の方面では赤岩瀑が一番壯大で見ると値するといふことである。外山澤にあるものは大したものでもないといふが、嘗て外山澤の上流を溯つて左方にあるものは遊に價値があると聞いたことがある。本誌第十一年第二號四七頁に一寸誌して置いたが、其の折は詮議が不充分であつた爲め思はぬ誤謬に陥つて、此の瀧を赤岩瀧であるかと記したが、事實相違につき謹んで正誤して置く。尙其の外山の位置についても誤記したから、今此の機を利用して訂正して置く、即ち外山は地圖に二一九〇米突の獨立標高點を記すものとして差問へはない様である、しかし此の峯頭が東北に分派した所に尙一小峯があつて、これが直接湯元から望見し得られる、丁度地圖の「外」の字あたりでもあらうかと考へられる、自分はこの小峯頭が二一九〇米突の峯頭と考へたが爲めに、外山の位置を移さなければならぬ様になつたのだが、實際此處は二つの峯頭が各三角形に尖つて居るので、外山は泉門附近まで行かなければよくは見えないものである。猶此の方面に就いては更に自身踏査の上報告する考であるが、讀者諸君中で精しく御承知の方があつたら意見を發表して頂きたい。

十六、人工の瀑

四十 按摩瀑。山内長坂さんないながさかの中部以上に當り其の左手に、小溝の落水が人工で作つた大石の瀑口から落ちるものである。水は山内の用水の剩りて、其の源は瀧ノ尾の瀑である。名稱の起りは昔按摩が陥つたのでかく呼ぶと里人の口碑である。

四十一 白髮瀑しらか。日光停車場から大谷川を距て、對岸に見るもので、製麻會社發電所への用水の剩餘を排水するものであるが、水量も多し、其の容も萬更捨てたものではない。名稱の起原は、該工場が帝國製麻會社に合併する前日光製麻會社と稱し、同所に發電所を設け、隨て彼の瀑を成した頃、社長

の鈴木要三と云ふ人(當時の要三氏の先代)が黒髮山に對する故に白髮ノ瀑としては如何と言つたのに因るが、其の儘此の名を用ゐることとなり、昨年大谷川に架替へた橋さへ白髮橋と命名する程になつた。

十七、其の他の瀑

四十二 滑川なめがしノ瀑。廣義の日光に入れても差間はあるまいが、日光町以外のもの故此所に掲げることとした。瀑は最初に出した霧降瀑の下流で、小百村にあり、高さ二丈幅十五六間といふことである。未見のもの故其の位置さへ詳しく述べ難いのは遺憾である。

四十三 瀑頭ノ瀑。右の滑川ノ瀑の上にあるもので、それ故瀑頭ノ瀑と云ふのだらうといふ。位置形狀共に未詳。

四十四 三界ノ瀑。これは日光の内に入れるのは不適當かも知れないが、日光山彙中の名山女貌山の北裏に懸るのと、日光から栗山へ越える富士見峠を北に下つた途上から仰げることから、日光人士の口に膾炙して居る故、序に掲げて置く。位置は女貌山の山腹で野門澤の上流に當るもので、五萬分の地圖に布引瀑と記すものと同一と考へられる。水は三段になつて落下し、中段のものが最高いといふ。此の瀑は遠方から望見するのみで、近寄ることは困難と思はれる。

是等の外では、赤澤の上流には無名のもの少くも二つあり、稻荷川の上流には大小無名のもものが二十もあるし、鳴澤、田母澤や荒澤の上流などにも、人の知らない瀑がないとは言へず、般若ノ瀑の源にも瀑と呼んで差間のないものがある。又湯元の附近では湯湖の西、外山澤の東の峯の東面にある薙にも無名のものがあるといふし、又同じく外山の東南面に當る大根澤おほね(宛字)にも無名の瀑がある。尙金精峠の西面にも瀑があると聞いたが、自分は未見であるから何とも申しかねる。是等は他日探検

した上で重ねて筆を執る考である。

尙筆を欄くに當つて一言すべきは、本篇執筆中往々疑念を生じた場合には、日光警察署長外山正彦氏に照會して、或は記録の蒐集或は實查を煩はしたことが少くない、氏は其の都度之を快諾して有力な材料を供給し、殊に霧降瀑の上流を探る爲め昨年十一月七日探検隊を組織し、寫眞師を従へて山中に分け入り、貴重なる結果を得て之を盡く供給された。本篇中同方面の記事が在來の地圖や案内記に勝つて詳密なるは一に同氏の好意によるのである。尙其他種々忠言を與へられた好意と努力とに對して深く感謝の意を表する。氏は實查の際、名瀑の道路が荒廢して居ることを慨嘆され、日光町の關係者に謀つて之を修理し、觀瀑の便を計る考であると言はれるから、後來の遊士は多大の便宜を得ることゝ信ずる。尙又日光日増院住職中里昌競師は、種々有益な材料を供給されたり、或は前に挿入した雲龍ノ瀑の原圖である得難き寫眞を送られた事に對して、深く感謝する處である。

尙序に記す可き事は、本篇の附圖として挿んだ裏見、慈觀兩瀑の寫眞は、明治十年頃日光で手に入れたものから複寫したもので、寫眞術の上から見では取るに足りないものであらうが、明治卅五年に大破して昔の面影を止めない此の兩瀑の記念かたまりとして、敢て此の兩圖を印刷に附することゝした。又雲龍ノ瀑の挿畫も、明治卅五年五月十日撮影の寫眞に據つたもの故、其の後兩回の大出水に、崩れ易い稻荷川の上流のこと故崩壞して、現今では多少變つて居ることゝ想像するのである。

追 記

本編印刷中、日光警察署長外山正彦氏から赤澤筋の瀑布に關して通知を辱うした中に、未だ本編に登載されないものが一つあるから、それを次に記して追加とする。

小瀑。赤澤の上流なる小岩澤と犬母ヶ澤とが外山の東北東にて合する地點の稍々上流にて、犬母ヶ

澤にあるもの、大瀑の略二丁下流。瀑の高さは七八尺。

此の瀑に白馬ヶ瀑なる異稱があるらしいが、未だ確證を得ない。此の名は或は一部人士間に用ゐられた名であるかも知れない。

御前屏風紀行(藏王山の内)

沼井鐵太郎

大正六年五月廿五日より廿七日まで

白石——鎌先温泉——御前岳——南屏風岳——北屏風岳——水引入道——鎌先温泉。地圖「白石」及「上ノ山」。(本誌十年三號所載「藏王山」参照)。

一、鎌 先 ま で

「あゝ屏風が見える。おい、あれだよ。」汽車が北白河驛のあたりにさしかゝつた時、私は隣の友に知らした。同じ山好きの彼は眠から覺めたものゝ様にきつと直つて窓に手をかけた。窓の外には柔畑などが走つて行く。白石川は今は線路近く少女の繪筆になすられる様な優しい淡碧の水をうねらせて、其れに沿うた陸羽街道の並木の松翠と幹の赤い色とを絶えず下へくくと洗ひ去る。かうした畫趣のある平地の彼方には、むつくり上つた青麻山(あまて)(七九九米)の頭を聊か踏まえて、藏王(ざわ)の連峯が大きく立列んでゐる。「尾根一面の雪だよ。」と、此は去年の此頃登つた事のある一人の友が、うす曇の中に見える所々の白い物から判じてか、自信のある様に言ひ切つた。

汽車は短かいトンネルをくゞつた。そして其を出切つてしまふと、成程、御前、屏風、後烏帽子一帯の連山は、春霞ともつかぬ又岩の色にもあらぬ薄白い肌着をつけてゐるのが明かになつて來た。冬休みに歸京の途中、この山々の白い輝きは如何に見事であつたらう、かつきりと線の縫れもほぐれた晴れやかさに、思はず窓外に乗出した程であつた。其山は今や春に眼覺め、薄衣を纏うて我々を待つてゐる。花は咲いたであらうか、雪はまだどんなに厚く美しい事だらう、「去年でさへ常念山脈などに見られない程の素敵な雪だつたから、今年はたまらない程いゝよ、きつと。」と先の友が人の心を咬るのも却つて恨めしかつた。

宮城野信夫の仇討でお馴染の白石は、今は可成りの廣さに軒は連るが、例の東北氣分がありぐと覗かれるさびれさである。よくいへばおつとりしてゐる。此處から鎌先温泉迄約二里、馬車が通ふけれど、まだ四時頃だつたので、地圖に見える間道を歩いて見る事にした。

町から北へ、白石川に架した一寸長い橋を渡る、向方の袂に二軒の家があつて、其が本道どの境である。私等の道は一段上の平地に上つて、畔道らしく麥畑や早苗の間を山縁の方へ向つてゐる。時折、空から田の畔に雲雀の影が落ちる。やがて御前岳から來る灌漑用水を越えて長袋といふ小字の外れに通るかゝると、人の棲むは、ひも無い位ひつそりした田舎家の傍から、畑に別れて心細い小徑にはいつて行く。行先は兩側藪の小坂である。もうこの時はそろゝ胴籠の蓋が開き始め、五人の間には平和な沈黙と眞面目な調子が織りこまれて來るのであつた。

坂の上は感じのいゝ高臺になつてゐる。稍々上り氣味の馬追道が草原の中を分けてゐる、所々には古株まぢりに松や栗や櫟などの疎林が佇み、レンジツ、ジは其縁を縫つて赤く咲き盛つてゐる。山蔭はタニウツギのはればつたい桃色、地は所嫌はずアヅマギクやタチツボスミレの花が咲きこぼれる、一體に緩やかな丘である。吾人は山からのうすら風に吹かれて、急ぐとしもなく歩みを續けてゆく。

高みを越えて小山一つ廻つた所にはアツモリサウが咲いてゐた。あちこち探して得た數株を手にして只管道を急いだが、もう日は暮れて闇の色が濃くなつて来る。間もなく本道に出て右へ少し下り氣味に廻つて行く。馬子らしいのに道程を聞いたら、序でにアツモリサウの地方名を教へて呉れた。「嫁のこんぶくろ」といふんださうな。其處から鎌先はちきであつた。

温泉は今ひまであらうと思つたら、やはり村の兄いや姉さまが室々にごろ／＼してゐた。湯主の一條旅館に泊る。兼て通知してをいたので、混雜の折柄、隱居の室をあけて呉れる。八疊二間を打通して、夕食には前祝ひとあつてビールのの満をひく。其後は湯に行くやら、採集品の整理をするやら、碁をうつやら、暢氣な晩であつた。

二、裾野

案内者は去年の二高山岳會旅行に連れて行つた毛利三次郎といふ男で、朝早くから宿に来て待つてゐた。直談の結果豫定を變更して、北屏風から水引入道を経て下山することにきめる。滅多に里人も行かない處であるから面白からうと勇み立つて出かける。七時頃。浴客がげげんな顔をして我々を見送る間に、すぐ前の樹の繁みをさつさと上つて行く。小さい澤があつたり、凄いな竹藪が見えたりする。其の所々に尺許のギランがさびしい白花をつけて、僅かに下草の美を誇つてゐる。

上りきつてほとんど里道にさび出した。見ると御前岳の裾野はずうつと此方に走つて来て、小原をばらの山との間の谷間に落ちこんでゐる。大かた樹も炭にされたのか、所々小さな林が草の間に残つてゐる。その草野の傾斜を見ては、いにし冬の遊びを未だ忘れ兼ねてか、五人とも同じ様に彼處を滑つて見たいねなどといふ、足下には道に寄り添ふて例の用水が勢よく流れてゐる。

片山蔭に廻りこんだ時、初めて連山の雄姿が望まれた。御前、屏風、水引入道みづひきいりだう、馬ノ神まのかみの一派――

刈田、熊野は見えないが——後烏帽子が半體を、共に天鷲絨の胸に白の飾りを掛けて見せてゐる。今日は此頃にもない晴れ様だと案内者は銘を打つ。唯一片の羊毛の如き雲が腰のあたりに浮んでゐるばかりだ。「近いやうで遠いなア。」と、誰かの聲が幸多き春の日を思はせる様に響いた。

午前八時二十五分、軍馬補充部出張所に着。其迄の道は段々に山がよく見えて来たばかりで變つた所もなく、植物の状態も仙臺附近と大した差異を見なかつた。此處は海拔五二三米、一寸した窪地になつてゐる。建物は出張所の可成り大きいのと炭焼の小屋とがあるだけ、其小屋の傍を、ニンサウ、カテンサウ、スミレサイシン、コンロンサウ、クリンサウ等の好陰濕性の草本に取りまかれて、一條の清流が有るか無きかの音に私語き走る。御前岳はすぐ向ふ上に胸を張り出して、長く曳いた裾野の上を横川へ行く道と牧場の柵とが、波のやうにうねり廻つてゐる。

私が此處に初めて来たのは去年の十一月初旬の事であつた。横山君(會員)と二人で白石から直ぐに上つて来た。其れは風の烈しい午後の事で、山は寒げに佇み、黄葉が裾野を渦卷いて舞ひ下り、時には木蔭水の上にさら〜と散りたまる。「明日は大丈夫でせうか。」「多分いゝでせうがねえ。路上小學校の老先生とこんな會話を交した事もあつた。吹き荒む風を透して吾妻山が大きく鼠色に南方の空に見えた。そして其夜は此處の炭焼の小屋に泊めてもらつたが……質朴な山人夫婦、宵にばつたり風が止んで小屋の背後に見た岳の寢姿、寂寥に飼犬の泣く聲、冴えた星影……秋の山の思ひ出はさびしいながらに、何となくいまだに深い感興を湧かせる。

暫く休憩してから出張所の後ろの小徑に入つた。小川を渡つて笹原を越えんと牧場の柵があつた。放牧の頃の長閑さを想像しながら、又回んだ地に下りる。一面に柔かい草がゆら〜と風にゆれてゐる、牧草の新芽であらう。向ふには大ス、(爆裂火口?)が半開の恐しい口を半分開けて見せる。まもなくブナの多い坂にかゝつた。灰白の幹に新緑の嫩葉を髪と被せて、ブナは之から俺の領分だぞと

言はぬばかりに立ちわだかつてゐる。間もなく坂を上りつめてまだ枯草の色の見える原をちりちり上つて行くと、やがて眼前に美しい高原が開けた。

私達は鳥居の跡（約七百米）に来て休んだ。節くれ立つた一本の柱が斜にすつと立つてゐる。もう一本の柱は破壊して只切株のやうになつてゐる。其左右からのび上つた山々が大きな雪田をエプロンの様に、或は白襟の様に打ちかけて、鮮かに見参に入る。御前岳は乳房状に大きく、水引入道は鈍三角形に小さく、馬ノ神は馬背の如く長い。そして入道と御前との間には、稍遠く奥深く白い屏風の尾根が、南屏風だけは隠れて、心持よい線を引く。其れだけで澤山だが、峯頭から胸、胸から裾と眼を走らせると、賽ノ碓から此方、する／＼と裾野が下りて来る。裾野といふには比較的高い。その線が（得心の行く様に線と言はう）何時の間にか、私等の四邊では、する／＼と走るでもなく、自ら惰性の傾斜を續けてゆく。そして振りかへると、一方はブナの林に轉げこみ、直後は小山に一寸支へられて、左方からもう先の見えなくなるのは復た静かに下りて行くのであらう。

實際、私達は歩くのも忘れた人のやうに、足を投げ出して高原の風色に酔つてゐた。岳おろし、伸びも弱いシラヤナギの黄な花穂のもとに、心持白いアヅマギクがぱちりと空を見上げて居る。秋はウメバチサウとマツムシサウが淋しく笑つてゐたが、今は春の——思つたよりはおくれて——花野といふには少し心もとない。此處に多いオキナグサさへ未だ漸く眼覚め時である。その草々の亂れの幅十五六町程の兩側には、岳から澤が回みを作つて来て、澤すちはブナの密林がぐる／＼と、細眼に見ては馬鹿に太い條のやうに見える。「此處に小屋を作つて一冬滑り暮したらどうだらう。」又もシーの話になつた。「全く交通の便さへあつたなら今年でも来たんだつたのに」と愚痴をこぼしても仕方がない。話の腰が折れると、空になつたキャラメル箱が棄てられて、再び登山が始まる。九時二十分過。しばらくして左方ブナの木立の下に雪の塊が見えた。氣早の者は急いでとんで行く。初めての残雪

である。珍しさに我もく〜とどうく〜皆とんで行つた。近づくると小さな澤の上に見るからつめたさうな塊が稍崩れかゝつてゐる。塊の端からぼたり〜と滴が落ちる、滴は水嵩を増して青黒い岩間をちよろ〜走る。「つめたいなア」其は私共でなくても誰しも一掬の後に發する感嘆詞であらう。林中でいゝ匂がする、其香に惹き寄せられて手折つたのは、花の咲き出たクロモツの枝であつた。

傾斜はだん〜と増して来る。横道が時々十字に交はる。サハヲグルマやナガバシスミレ、タチツボスミレ、ニホヒタチツボスミレなどがぼつ〜見付かるが、草の多くは未だ芽を出したばかりである。其上を靴ばきの人はつる〜滑りながら妙な腰つきで登つてゆく。どう〜後の一人が聲をあげ始めた、靴では歩かれないといふので、先へ行つた案内者を手真似でとまらせる。私達は早く賽ノ積の高山植物を見たいから、黙つて上つて行く。

もう十時頃、ふと頭の上に犬の齒の様な岩が現れた。賽ノ積だ。左の方へ絡んで行くと、近く雪溪が眩く光つて見える。その上に跳び下りてはつて息をついた。これは先から左に見えたカラ澤である。幅十間程で、上下共に段になつてゐて分らないが随分長いらしい。やがて靴を草鞋に穿きかへた者も案内といつしよに上つて來た。早速一枚カメラに入れて、又右上の登山道に歸つた。

三、賽ノ積より頂へ

散亂した岩の間にナナカマド始め種々の灌木が生へてゐる所に、一條の登路が消えるやうに隠れて行く。ふと見付けたイブキジャカウサウの緑の葉、手に取つて嗅ぐ私の心にはもう紅や黄や種々の花びらが満ちて来る。暫時はざりざりめもない幻を描いてゐたが、道が少し登つて左へ折れやうとする、其處に白い幾輪と艶のいゝ圓い葉を見出したらすつかり眼が覺めてしまつた。ハクサンイチゲとイハカミミとである。日本アルプスでは二千米以上位からで無ければ見なかつた姿が、千米を僅か越し

たばかりの高さで見られた、南から来た人々が何でなつかしがらずにゐられやう。其ばかりでは無かつた。追々どミツバワウレンやミヤマキンバイは路傍を彩つてくる、そしてじめじめとした日當りのよい所に來た時、ユキワリコザクラの群が優しい色に面を染めて仰いでゐた。

斯うして賽ノ積から上は俄かに高山的になる。木立も灌木狀にひねくれて岩を挟み、平地では可成高いコブシも四五尺に縮まつてゐる、其花が夢の様に白い。乾いた土の上にはイブキジャカウサウの新葉が青々と被ひ、時には木々の根をどりまく様にヒカゲノカヅラが這ひ出てゐる。そして所々に紅紫黄白どりぐの小さい御花畑が開けてゐるのだ。

十一時に近い頃カラ澤の水を左に渡つた。此から上はもう水が無いといふので思ひきり飲んだ。この時氣が付くと一人の影が見えない。この澤の右へ上つても行かれない事は無いが、笹がひごくて苦しいさうである、どうもそつちへ行つたらしいと盛に呼びかへす。一人は後を追ふ。案内も探しに行くと。オーイといふ聲は少し日のかげつた空に反響もなく消えてしまふ。どうで大した事は無からうと暢氣に構へて、残つた十三人が水際に荷をおろしてしまつた。其處にはシラネアフリが何も知らぬげに紫の蕾を擡げかけてゐる。

纏て遠くから長い低い聲が聞えて、間もなく案内がやぶ蔭からぬつと現れる。其方でも好いのださうだ。成程向ふを見ると左方に移らうとして山腹を蠢めてゐる夏帽が見える。其處で復た胴籠をかついで峯へ志した。此處も一寸傾斜の緩やかな所で、あちこちにシラカンバの立木等が見える。千三百米位はあるだらう。一本の白樺の幹が山に面して皮を剥いてある、之から山に登れといふ暗示であらう。友はぱりぱりと頻りに皮を剥がした。

其から段々急になる。細い路が大體直線的に上つて行く。紅葉したまゝのイハカハミヤ、出たてのユキワリコザクラがまだ固い蕾に夢を結んでゐる。スゲの類の間に時々可愛らしいヒメイチゲが咲き

出てゐる。小さい湿地ではモウセンゴケが泥塗れの姿が拾ひあげられた。灌木は至つて少い。左は大スツの上のダケ澤だ、雪溪の傍ら稀にはその中に、白樺が寝た様に生え續いてゐる。ふと見上げると御前岳の頭は、反りかへつた胸に全然隠れてしまつた。上の方の人間が小さくなつて歩いてゐるのが何だか一寸分らない。下を見ると、賽ノ碓が馬鹿に平に見える。其内にもう山の肩の木が見分けられる様になつた。登りは三十五度にも近い傾斜であらう、私の背筋には汗が流れ出した。

「何つちへ行くんだあ」と上から聲がする。見ると別方面から登つて行つた二人が、右の尾根のツガか何かのやぶの下で、突立つてゐる。峯には程近い、だが二人ともとんでもない所に取付いたものだ、いゝ加減笹にいちめられてゐるのに、又あのヤブ尾根をつたふのか。「こつちやだ〜」と案内者はむきになつて、右手を左の岩のある低い方に振つて見せる。歩き出すと私等は少し傾斜の鈍くなつた事を感じた。足下に早やコケモ、やアカモノが見える、元より花も蕾も未だ無い。アスヒカヅラ、タカネヒカゲノカヅラ、マンネンスギ等も見える。其間を路は左に向つて、一つ二つ雪田を越えると、安山岩の破片の散らばつた、夏ならば美しい御花畑であらうと思はれる所に來た。

肩に出て見ると、屏風の内面はすばらしい残雪である。思はず感嘆の聲をあげたが、其も束の間、急に腹がへつてしまつた。もう一時に近い。飯にしやうせと先の二人が魂の抜けた様な聲でいふ。まア頂上の見晴らしを肴にと、人も吾々隔まして登る事にする。「あれが御門石です」と案内者が云ふので、「御門石? 御門石!」と聞き直しながら見たが、つまらない石だ。昔は白衣の人達が先達に率ゐられて六根清淨を唱へながらあの石の間を通つたものであらう。私達は石をくぐらないで、鼻の先の峯頭目懸けて短い尾根に取りかゝる。左右とも凄じ急さだ。殊に左の方は赤いナギになつて、遙かに下方は密林に落ちこんでゐる。尾根の間々少しく下方に偃松の白くされた残骸が、數十年前あつたといふ山火事の悲惨を物語つてゐる。

午後一時五分、御前岳の三角點標石（一七五〇三）を踏んだ、直後に離れて小高い所があるが、此方が幾らか高く思はれる。其下に權現様が小さな石の祠の中に鎮座してある。參拜終つて小屋掛けの跡らしい板圍ひの側で辨當を開いた。食後にかりんとうを噛りながら屏風、水引入道などの氣持よい色に見惚れてゐると、岩蔭から黒い影が矢の様にすうと飛んだ。見定める暇もなく、復た向ふから逆落しに落ちて来る。そして次第に數が増すと、靜かな岳の上を大小幾つかの亂れ輪を描き、またすうと屏風の方へ小さく成つて行く、雨燕だ。誰かゞ雪の塊を、ちぎつて投げてやる。勿論、雨燕の後を追ふ譯はない。

三十分休んでから愈々屏風に向つた。權現の後から又下りになる。信飛境の山に比べればラクな路だが、兎に角高山の内だ、岩の上からすり下りたりして、一寸危ない所もある。右を見ると、屏風は元より、此山の傾斜面にも、水引入道の腹にもべつたり雪がついてゐる。然し今下る尾根の左側には一點の白も見えない。中途で誰であつたか案内の側に立止つて「熊だよ」と低い聲。然し指された雪溪の上は霞んでゐて私には分からなかつた。偃松の枝をつかんだまゝ案内者も笑つて居る。どうとう熊の形は疑問のまゝに、一行は下つて行く。聽てアイハギの峯とかいふ峯との間の鞍部に着く。此處にも偃松の殘骸が喰ひ盡された獸の様に散亂して居る。

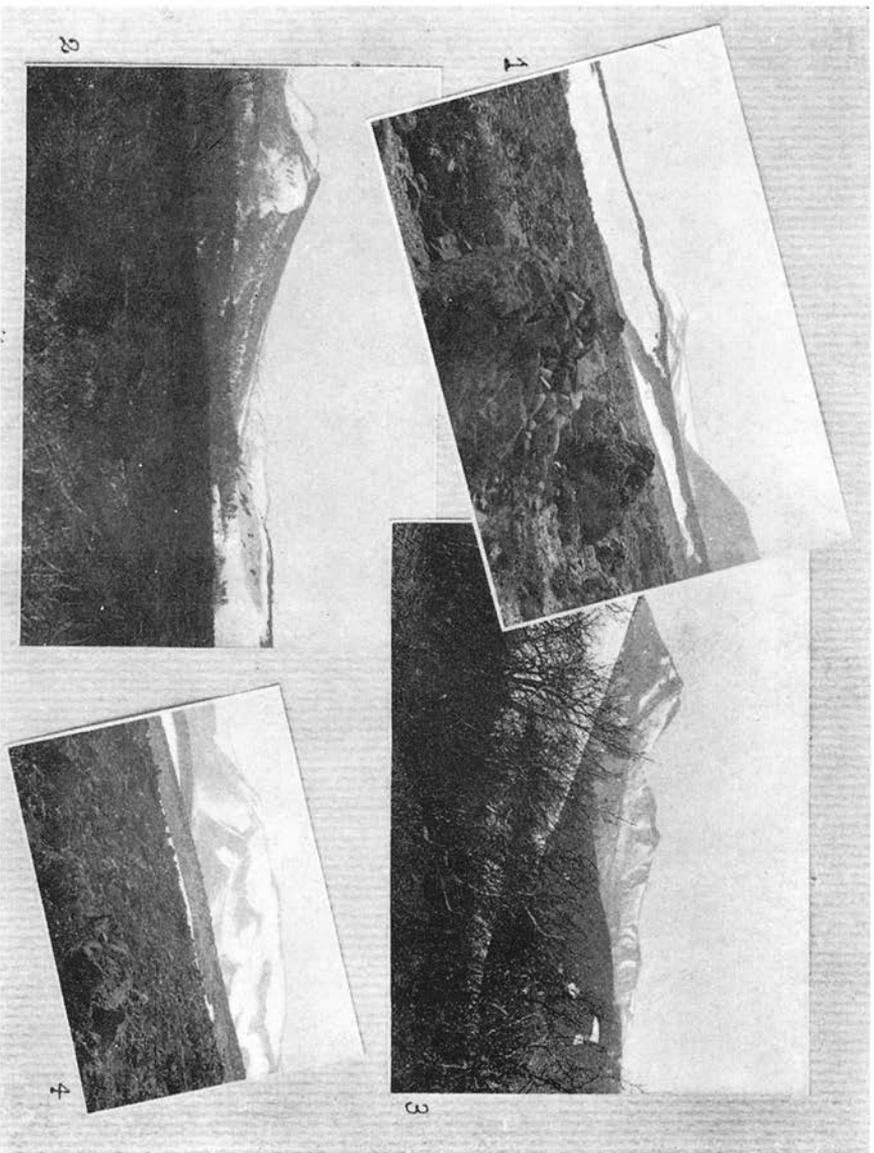
人にすれば先づ裸體である。餘り多くない偃松は頭髮などにも譬へやう、コケモ、ガンカウラン、ミネズツウ等は細毛であらう。アイハギの峯と御前岳とは斯くて數十年來地肌を曝して居るのだ。然し又一方から見れば、其丈高山的風貌がなだらかな屏風一帯よりは遙かに優つて居る。全く鞍部から仰いだ御前岳などは、寫眞にして日本アルプスの一峯と題しても素人は容易く信じると思はれる位である。かう考へながら登つて行く先に、熊笹が密接してゐる所がある。其を抜けると千八百米の南屏風岳だ。出てから彼是二十分もかゝつてゐる。

四、屏風峯づたひ

山の上はまだ夥しい残雪であつた。御前の東北方から白い輝きが始まつて、向側は水引入道、馬ノ神まで、雪溪、雪田、雪堤、色々の形になつて高嶺の權威を示してゐる。殊に驚いたのは此處南屏風から彎曲しながら走る屏風尾根の残雪である。薄くも一丈はあらうと思ふ、所々クレジャアツス(?)が口を開けて晩春の空に銀帯一連とでも云つた風に遙かに續く。下へも凹みを狙つて幾條か雪溪が走つてゐる。尾根はふつくりと圓みのある雪堤となつて、其縁に立列ぶ丈の低い偃松や、米梅などと共に北へ走り續く。先に來た三人は雪堤の縁に腰を下して歌などを歌つてゐる。私は小躍りしながら方々の雪を踏んで見る。まるで蹠が始めて土に觸れた時の赤兒のやうに喜びながら。私は其時眼前に展開して來た北屏風の背面、刈田、熊野の諸山を注視することさへ忘れて跳び廻つてゐたらしい。今にして其時の遠望の記憶といへば實際春の霞の様にぼんやりしたものである。

纏て最後の友も案内もやつて來て、一同は一しきり、三脚を据ゑたり雪の臺を見付けたりして、自然を縮圖するに苦心してゐた。其が濟むとそろ／＼雪堤の上を北屏風へ向つて進み始める。行手には北屏風の大きな山背が一と所べつたり雪をつけてなだらかに傾き、黒い杉ヶ峯は稍遠く之と對峙し、更に其間には可成近く、刈田、熊野、五色等北藏王の山々が北方にも劣らない位眞白に光つて聳えてゐる。「向うもやつぱり高いだけあるよ。」と感心しながら歩く。雪堤の上を歩むのが何だか柔かい敷物の敷きつめられた床上を歩いてゐるやうな氣持がする。「雪の廊下」一人が簡單に賞讃した。

日本海の方から吹いて來る風の爲に、降り積る雪は皆表日本の側に拂ひ落され、山の側面に白い層を幾つか重ねる。白い層は自身の重みで次第に固まつて行く。夕べ曙の映えに或は淡く或は濃く、眞珠カルビーのやうに輝き渡る色は美しいことであらう。冬はこの靈場も熊と獵師との争鬪の舞臺であ



1

2

3

4

二 西原河の峯 (右端は子朝屏風)
 (沼井鐵太郎氏撮影)

一 刈田岳 (中央) 五色岳 (右端)
 三 雁戶山 四 豐手熊野

らうが、今は春模様にも色めき立つて、其處を歩いてゐると實際雪崩でも起りはせぬかといふ心配がないでもない。

一時間程して尾根が蝶番のやうになつてゐる部分に差しかゝつた。此原だけ雪が消えたのか落ちたのか、梅や石南等の香高いヤブになつてゐて、聊か歩きにくい。水引入道は右方踵の下だが、其間はひどく落ちこんでゐる。そして蝶番ひを左に廻ると、此迄よりも美事な雪堤がジグザグな線を突き出して現れた。私達は此處に荷物を置いて數丁先の最高點に向つた。

南屏風附近の雪堤は圓みがあつたが、此邊からのものは著しく角が立つてゐる。傾斜は四十度又は其以上もあらうと思はれる。雪堤の縁に近寄つて谷を見下すと、氣が遠くなつて引入られさうだ。成るべく雪堤の真中を歩いて行くが、折々ばこつと落ちこむからたまらない裂目の孔の奥が師走の宵の空の様に青黒く光つてゐる。

午後三時三十分、北屏風岳一等三角點（一八一七・一）に着いて、萬歳を叫んだ。標石は割合に灌木の少ない所を切開いて立てゝある。來る時見た山背の林叢は此處迄來てゐるし、其れに偃松が少ないから、長居したい様な所でもない。眺望は三角點の所在地が特別に高まつてゐないだけあまり良しとは言へぬ。然し今まで見る事の出來なかつた雁戸山かんどの急峻な山容が望まれる。これは藏王山塊の北隣にある千五百米許の休火山である。

五、水引入道を経て鎌先に下る

四時に近い頃、記念の撮影を終つて、再び雪の上を蝶番ひまで駆け下りた。そして荷物を背負ふと直ちに急壁を下り始める。ヤブの中を枝に縋つて轉落を防ぎながらずる／＼下りて行く。時々痛い木に觸つてびつくりする、下を見ると滑り出したら止りさうも無い様だ。熊笹の葉まで手頼にして、つ

もりだけは静かに下りた。暫くして案内者が左の方へ姿を隠したかと思ふと、ずつと下の方に現れて頻りに手を振つてゐる。何かと思つて其方へがさ／＼すり落ちて行くと、雪だ、短い傾斜が急である。仕方がないから雪の側の木をつかみながら下りる。忽ち一人が滑つて雪の上を腰を突きながら落ちて行つた、そして好い具合に右方の木に衝き當つて止つた。之を見た他の者は木を手蔓に下りる煩しさを嫌つて、同じ様にすん／＼滑つて行つて皆うまくとまる。かうしてヤブから雪、雪からヤブと下りて(實は滑り落ちて)行く内に、今度は右の方へ移つた。見るともう鞍部に近い急斜面で、一二町の間すべて一面に雪である。何の足跡もない、處女地!今度は案内者を後に一人／＼立つて滑り出す。丁度三人だけ靴で他は草鞋であつたが、靴の人はシーの要領でいゝ具合に足を扱ひながら美事に滑る。踵から小さい雪煙がさつ／＼と立つて人を追つて行く。私達草鞋組はすぐ雪がつかへてうまく滑れなかつた。下り立つた所から見上げた時、よく下りて來られたものだ、我ながら驚嘆した。時間には出發から約十分經過してゐる。

其から二三町下つて漸く北屏風と水引入道間の鞍部(一六〇〇?)に到着した。傍らに池がある。半ば雪に埋れた小さいものであるが、去年の秋南屏風から見た疑問の光は是である。其時此邊が野營に適しさうに思つたが、來て見ると果して池はあるし、又風除けもよく、四邊に燃料は多いから、すつかり喜んでしまつた。然し之から屏風まであの急斜面を攀ち登らなければならぬ事考へると、うんざりしない譯には行くまい。其急斜面は恐しく急に伸び上りさま天空に一線を引き上げ、長い雪堤はそれと直交して横はつてゐる。あの痛快な滑走のあとも明かに眼に入るので、誰しも振り返つて見ない者は無かつた。佐藤君は飯豊山にもこんな所は無いいふ。日本アルプスでも普通の通路では遭遇しない所だと、宮本君と二人で話し合つた。

案内者は此處で迷つた。若い時一度位しか通つた事の無い所だといふから、記憶も臆なのであらう、

切開は入道の上までついてゐるが、其上つてよいのか、之から直ぐに山腹を廻るのか、澤に下る方がよいのかと頻り考へて居る。我達は素々好んで来たものだ、何でもいゝからもう一つ峯を征服しつて頗る元氣がよい。其れで彼もなほ考へながら、入道へかすかな切開を分け上つて行く。十間許上から偃松が多くなる。其間を切り抜けながら胸をせり上つて頂を間近かに見る頃、もう切開が判からなくなつてしまつた。其からがひどい。よく生長した偃松の海を理も無しに泳ぐ、身體の軽い私は、ともすると跳ね上げられる、時々落ちこむと下にはハリブキの莖らしい針の鋭い奴が脛を引搔く、痛いから無理にももぐつて行かれず、偃松の舞臺でんだダンスを演じてしまつた。頂上は眼先に見えるが、其十間許がどうしても行きつけない。右を見ると案内者はすつと下の方でがさ／＼やつてゐる。何時のまに離れたか分らない。時計を見ると四時四十分。ふと私の頭に「ピークハンターの愚かさ」といふ事が稻妻の様閃いた。それでもう五間とは隔らない絶頂を見棄てゝあはてゝ案内者の方に泳いでゆく。

二十分程偃松どハリブキとに窘められて、やつと入道の南の肩に當るザクに着いた時は吻とした。一行の内にはズボンを鍵裂きに裂いた人もあつて、短い時間の休憩中も偃松渡りの苦しさの話で持ち切つたが、少し前から恠しくなつて來た空は、今や屏風の上に灰色の雲が懸るよと見る間に、俄然一陣の強風が吹き出して、終に烈しい暴風と變じ、小石がさら／＼飛び、首に巻いた手拭が吹き流しのやうになる。石を放り上げると横さまに吹き飛ばされて落ちる。物凄いに寒さも加はつて來た。白石まではまだ遠い。私達は直ちに下山の途に就いた。然し屏風に對して最後の敬意を表する事は忘れなかつた。

水引入道の肩から、灌木の中を夢中になつて下つた。時には雪溪を滑り下りやうと主張して、案内者と争ふ事もあつた。傾斜が稍々鈍くなつた頃は、白山一華や、サハラゲルマなどの花から心もとない

◎八峯のギャップ 山口、朝輝

五二

夕暮の氣分を味はされた。賽ノ嶺と同じ位の高さの山腹を過ぎて、ブナの繁つた谷に入り込むこと、シロヤシホが淋しく笑ひ、澤すちの小路のあたりは下草の羊齒が陰氣な匂を漂はした。私達は放牛の群を見たが、鳥居跡を過ぎた事は氣が付かなかつた。そして闇の中を探り、ぬかるみを辿つて、彌次郎道から鎌先に急ぐ時、先づ念頭に浮んだものは楽しい夕食と暖かい温泉とであつた。

(六年十月六日)

八峯のギャップ

山口末次郎
朝輝記太留

後立山脈中の盟主、鹿島槍岳から北方五龍岳(山岳第拾壹年三號に木暮氏が此の山名に就て詳説されて居る)。到る連山の脊梁即ち八峯と稱へられて居る所が、たゞならぬ難場と豫てから耳にして居た、其中程に一大キレットがある、久しく私達の問題となつて居つた所謂八峯のギャップ、何時か一度吾が手にかけて見たいと思ふて居つた、丁度今年(六年)の夏の初め頃、竹下、朝輝二名が此の行程を採ることに決定したので、一も二もなく賛成で直ちに其準備にかゝつた、元來この連峯の縦走は徒に勞多くして其割合に得る快味が尠いのか、餘り多數の人が足を向けない、随つて發表された紀行其他の參考資料を見出すのに困難である、種々と書物をあさり、榎谷氏其他の先輩にも伺つて見たがこれと思ふ確かな所を得る事が出来ないので百瀬慎太郎氏に重要點について指示を受け大體の計劃が出来上つた、夏休みの始つた直ぐ翌日(七月廿三日午後十一時三十二分)の夜行で大阪を後にすることゝな

つたが、出發に區んで同行の竹下君が公務上差支が出来不參の止むなきに至つたのは、實に残念であつた、二人の出發に臨んで會員竹下英一君、高浦吉三郎君、政友巖三君、田中晴埜嬢が態々見送つて下さつた御厚意に對し特に感謝する次第である。

碧空にギラ／＼と強く輝く朝の光を背にして大町の對山館を立つたのが七月廿三日午前八時五十分、一行六名は青田の上をかすめる冷風と、立木の小蔭に慰められつゝ鹿島川を遡つて行く、前面に袂を連ねて聳え立つは後立山脈の主峯、祖父、鹿島、槍、例年になく多量の雪を肌を粧ふて吾が一行を迎へる、其日は鹿島村をはなれて冷澤の上流北股と西股との分岐點で露營の第一夜を過した。

翌二十四日星のある内にテントを出て見ると、ほの暗い谷間に冷澤の水のみ白く、萬籟寂々として流の音のみ耳に入る、案内の菊十翁が火を焚きつけた時分から、山々は明るくなつて、行く手を見あげると小隆起に兩分されて右には槍の南峯、左は祖父から布引の頭に續く脊梁が朝の光を浴びて大空に屹立して居る、上天氣だ、午前七時に出發する、直ぐに本流を徒渉して左方の西股（ザラ越）を上ること三時間、谷は急に開けて草本帯に出る、中食後ザラの急斜面を上る程に、このガラ／＼は遂に胸突きとなり不尠困つたが、何うやらかうやら布引の頭の南、喰の池と祖父岳との中間の窪みの稍祖父に近い地點へ上り切つたのが二時二十分空は此時申分なく晴れて、四方の大景を心行くばかり眺めることの出來たのは何より嬉しい、殊に今年は梅雨期にひゞく降らず、梅雨があけて後も亦今日に至るまで殆んど雨らしい日がなかつたから例年に比して雪が多く残つて居る、去る大正四年も残雪が多かつたがそれよりも多量に残つて居るのは實に嬉しい。

前面黒部の谷を距て、天空に巍然と屹立せる劍岳は威風堂々白銀の鎧を飾つて老武士の如く立つて居る、それより左方別山、大汝、雄山、一の越淨土に續いて眞白の五色ヶ原を望み、尙南方薬師の三峯から笠ヶ岳上高地のあたりへ連立せる靈座の一つ／＼残りなく見渡せる、更らに足下から南に伸び

て、祖父、扇澤の頭、岩小屋澤、鳴澤から、スバリ、針木蓮華と重つて遙か南方に特長ある本槍の見ゆるあたり、真綿の小切れの様な雲が碧空に漂ふて居る。

なんといふ長閑さであらう。

眼を轉じて行く手北の方を見ると、真近の鹿島槍ヶ岳の南北二峯の中間なる東側に、有名な猿股雪を乗せかけて一行を招いて居る、いつの間にか一團の群霧が五龍岳の頭を掩ふてその先驅が槍の肩の邊に迫つて來た。

眺め倦かず立ち盡して居つた二人は菊十爺の聲に促されてやつと腰を上げて短かい假松で綴られた國境線の越中側を歩いて下り、やがて喰の池、布引の頭を過ぎ鹿島南峯の肩で露營の第二夜を過すべく辿りついた。

七月二十五日、前日に劣らぬ快晴、大空には雲らしい片影も見當らない、随つて眺望の爽快は言ふまでもなく、昨日の地點よりも稍々高い丈け、更らに雄大である、午前六時頃雪を解して漸く出來上つた飯、一種特有の香のする其の飯をかき込んで同七時半に寢床の窪地に別れを告げ、先づ槍の頂上に上つて再び壯觀を擅にする、空には名残りなく澄み切つて、晩春の長閑さを味ふやう、三角櫓の元に腰を下ろして柱に背を靠せてそよふく風に髪を吹かせてゐると、ポカ／＼暖かい朝の光が眠氣を誘ふ、連る靈峯雪嶺を脚下に従え、恍惚として身雲外に在るの想ひは、蓋自然界の帝王にのみ許さるゝ所、嗚呼山！嗚呼山岳、暫時は時の移るのを忘れて居つた私達は、やがて動き出したのが八時三十分、頂上の北端から國境に沿うて岩崖の急斜面を下り行く、前日遙かに望んだ有名な猿股雪の上に来た、右寄りの行く手に北峯が聳えてゐる、この猿股雪は槍の南北二峯を限りとした可なり大きな「カール」である、そこから北峯の頂上を右に見て肩の邊を斜めからんで、北峯の北側なる、國境線に取付いてこゝからが名こゝを「八峯一」である。

暫くは尾根の越中側を下り氣味に傳つて行くと、やがて十一時半頃に問題のキレットの手前まで来た、菊十爺は此の邊から下に降りて稍々後もどり氣味にそのキレットの直下の澤まで下り更に又登るのだと言ふたが、先づ行ける處まで行つて見やうと言つて、朝輝が先きに立つて偃松を踏みつけ、キレットの突鼻まで来たは来たが、上から下を覗いても底は見えない、更に偃松の稍大きなのを握つてずつと覗いて見たが危くて矢張り底を見ることは不可能であつた。

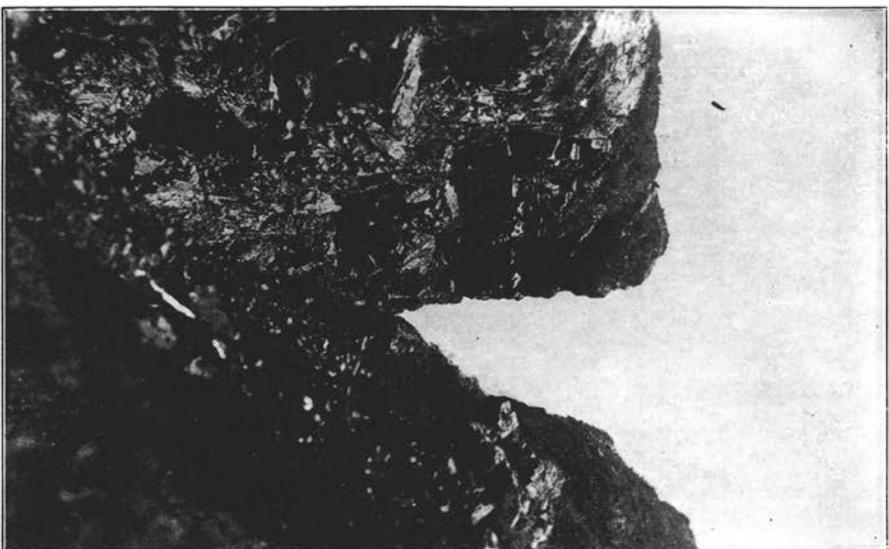
こゝで斷つておきたいのは、參謀本部の五萬分一地形圖に此のギャップが記入されてゐないのである、今大略其地點を示せば、大町の部の左上の隅から欄外を下へ十一番目に高度を示す(2500)の數字がある、其のすぐ右の欄内に南北に通る國境線を挟んで左右から押し迫つた崩れが記されてある、多分この崩れの或部分が東西からと上の方からと作用されて一大ギャップが出来たものと思はれる、最も私達の不完全な推定であるから確な事は云へぬ、且地圖にも多少の誤謬は免れないとして見ると尙更らること大方の御教示を待つ次第である。

偕キレットの罅隙は約十間程あるやうに思ふ、斷つておくがこれも見當の推量である、周圍が目馴れない所へ加へてこの壯觀と來ては、到底目測なんかは出来ない、一寸見には五六間位だらうとも思はれるが全く見當が付かぬ、殊に平地で物を見るのと高い處で物を見るのとは、高い處では餘程物が近く見えるが實際は遠い様である、山口が此から少し降つた地點から鉛筆を目の前に舉げて指で長さを測り、其儘體を廻して、元と來た脊梁に目標二個を假定し、その間を足數で計つて見たら約三十二歩あつた、そこで普通の歩度三步で一間とすれば十間餘りある勘定となる。

察するにこのキレットは脊梁の切れ目と同じ間隔を保つて可なり深く切り下げられて居るらしい。寧ろ中程では廣くなつて居る個所もあらうと推定される、勿論底を見る事は不可能であるが後から澤の下からキレットの方を見上げた時に随分廣くえぐれた處もあつたからかくは推定した次第で、兩側に立

ち残つた硬質の岩壁はおい／＼風化作用で削り取られて行く様子やら、天候の悪い時の此處の有様が思ひやられる、それにしても今少し充分に観ておきたいと思つて種々苦心をしたが相當の道具がなくては駄目であるので更に下に降りて一の岩角から上を仰いで記念の爲めにこのキレットを撮寫して此處を後にしたのである、これと云ふのも私達は今夜の泊りも氣づかはれるのと時間も餘裕がないから残念ながら切り上げて向側の國境線に取り付く手段として其仕度にかゝる、此から大分下つて又それだけ登らねばならぬ、即ち東谷の上流北股の水源と覺しき點まで大迂廻を始めるのだ、さうして此邊一帯の信州側は斷崖絶壁でとても思ひもよらぬ地點だから、越中側をへつるより外に仕方がないから、其大迂廻も越中側でやるわけであるが、丁度此處は槍の北峯からキレットにかけて、北股に向ふ斜面が扇形状を爲して幾筋かの小さい尾根を派出して下つて居る、それでこれを行くより仕方がないのであるから先づ腹を作へることだと岩角に腰を下ろして晝食を取つたが、この附近一滴の水は勿論一塊の雪も得られないから、吾々の携帶する海軍用水筒（八合入）の水が何より尊い。

やがて草鞋を新しくして愈々下りにかゝる、キレットから南へ三ツ目の尾根の中腹へと見通しを付けて私達は槍の北峯の方へと後と戻りをする、可なり下の方に見ゆる少し許りの残雪を目標に、脊丈けよりも深い偃松の中へ飛び込んだのが丁度十二時三十分、偃松の海を泳ぐといふ言葉は實際うまく實状を穿つたものだと切に感じた、今迄に度々泳いでは居るが、こんなにひどいのは今度が初めてそれに地盤が急斜面であるから實に歩きづらい約二百米突程下りると偃松は無くなつて岳樺等が密生して居る、愈々益々歩きづらい、それでも私達は身軽だが、人夫達の方はとても話しにならぬ。やう／＼先きに目標として置いた少しばかりの残雪のある處に出で更に此から尾根を下つて行くのだが行く手に可なり大きい唐檜に山刀の痕のあるのを發見して皆々これに力づくこゝでホツと一吸人夫の一人が樺の一枝の切つてあるのを見付けて、その切り口を示しながら、それは山刀で切つたのだといふ、と



(影攝氏留本記輝朝) トレキの峯八



(影攝氏留本記輝朝) トレキのきびつ峯八

他の一人はそりや去年切つた痕だといふ、いやまだ新しいといふ、何れにしても人の通つたのは事實だから各々手わけして下り口を探し始めた、その内矢張り尾根を先づ真直に下つて行くものと見定めて又候木の枝にすがりつゝ降りて行く、とある木の間に樺の幹を横へて二人は充分寝られる丈けの泊場の跡が目についた其附近には焚火をした處も残つて居る、此にも唐檜の幹に刀痕を見受ける、中には讀める字もある、外國人の名らしいものもある、愼太郎と鮮に彫み込まれたものもある、多分對山館の百瀬君が五龍岳から此を通過された時の記念ではないかと思はれる、自分達も山口アサヒと二行に彫みつけて尙六、七、二五と年月日をも刻んで居る間に菊十爺が路を探して來たから一同は再び重い腰を上げた、此からは草の中の急斜面をすり下りると、變な工合に横から岩が開けて、横に落ち行く小さな瀧の中段の曲り角へ降り付いた時は（これがキレトの直下と思はれる）思はず、干からびた瀧の石窪に僅かの水がちよろ／＼と流れて居るのを見ると直ぐ様一同飛びついて飲んだ時のそのうまさ、此れが大迂廻の最底部で此の空瀧かちに沿うて少し上ると棚につき當り其行き詰つた處から左へ抜けると小さな残雪がある、其上部を横にへつて一つ北の方に細い澤の切れ込みに入り、其から瀧の棚を少し登るとガラ／＼の急斜面を落石の危険はあるが、前後大聲でどなりつゝ矢鱈に這ひとる、此の迂廻は下りが二時間半と上りが二時間を費したので、漸く上りついた所はキレトから約百米突計り北方のこれも今にキレテ落ちさうな崩れた頭で、此が即ち槍から來た國境線であつた、こゝからはギヤップは見えない少し南に戻れば見得るかも知れないが、正に五時に垂んとして今夜の露營地を知らない私達は、兎も角先きを急ぐ事にした、これから先きは兩方面共甚だしく崩壊してキレトの候補者が連続して居る様な有様で不尠苦しめられたのである、夕陽なおひ／＼と赫味を帯びて西方立山の頭に近づいて行く、氣の急ける事夥多しい、腹はすく足は進まず漸くテントを張る丈けの餘地のある所へたどりついたので彼是七時（鹿島槍から五龍岳間でテントの張れる地點はこゝ以外には一個所もない）人

夫達はまだ三丁程下まで雪を探りに行く、荷物をうち開けて行李に雪をつめ込んで歸つて来る若者の顔をみるとそいろに哀を感じざるを得ない、飯の出来るまでのつくろいに、對山館に頼んで作つて貰ふた白餅を焚火で焼いて一同は食つて空腹を満した、一時間程立つて飯と汁とが出来たので形ばかりの夕食を取る、其終つたのが丁度九時、天幕の外を仰いで見ると遙かの中空に磨き澄した鎌のやうな月が凄い、谷も山も一つになつて黒い色に包まれた中に焚火の光りに照らされて、テントのみはくつきりと浮出し居る。

明けて廿六日、前夜來少し吹きかけた風は、今朝方、霧を誘ふて時々立山をかくす、そろ／＼天候が氣になる頃合だ、今日丈けは是非降らない様に、降れば明日から大黒鑛山で逗留か、なご／＼昨日の疲れをも忘れての大平樂、午前七時と云ふに出發矢張り今日も八峯つゞきで昨日に劣らぬ惡場を五龍へと急ぐ、相も變らず信州側は裁ち切つた様な斷崖だから越中側の急斜面を行く、偃松のある處はまだ樂に通れるが無い所はガラ／＼の脊筋をカランだりへツツたり、午前九時前にどう／＼足下から鉛筆の先きのやうに削り取られた小ギャップに行詰つた、尤も昨日のキントに對しての小ギャップであつて、これが最初に出會つたとすれば小ギャップ位では仲々すまない、立派なギャップの資格を備へて居る、先きに立つた山口が先に偃松に擱つて崖鼻を馬乗になつてツリ／＼と覗込むだ、丁度舊式の軍艦の衝角の様に、兩側が見事に削り取られて、残つた中央の崖が一直線に殆んど垂直にすり下つて居る、それも七八間先きまでは見えるが、その下は見る事が出来ないのみならずトモ素手では下りられないと見て後へ戻ると、代つて朝輝が覗き込む、綱で下りやうかと言ふなり手にもつアックスを向ふの窪地を目掛けて投げ付けたがねらひは外づれてカンカランと音を立て信州側のザラ／＼の方へ落ちて大分下の方の雪溪まで行つてやうやく止まつた、後ろに残つてる山口は「うまくいつたの？」と聲をかけたが、朝輝は無言で偃松を力にしきりに覗きこんで居る、「如何だつた」と再び山口が尋ねた

時見向きもしないで「ナニ後から人夫に取りに行かせる」とすましたものだ、そこへ後ろから菊十爺がノコノコとやつて来た。

「如何です先生方、降りられるかね」といひつゝ鳥渡越中側を見下ろして苦い顔をして居る、他の人夫達も昨日の難場を思ひ出してか變な顔して無言で荷物を下ろして了つた、少々哀れつばい感なき難はずとでも言ふべきか、この時何を考へたのか菊十爺が、ナニ行つて見るだと人夫達を促して先きに立ち少し戻つて假松の中を越中側へ下りて、キレトの中段、崖に稍々足がりのありさうな邊を目がけて鳶口で足形を切つて横にへつり辛うじて向側の崖の下へ取つき、そこから無暗にリツヂへ這ひ上つて先づ安心、こゝから振り返つて見上げると丁度横濱の消防夫が被つて居る兜のやうに見えるキレトの端に私達が覗き込んだ邊が危く落ちかゝつてゐる、險い事、やがてアックスも菊十爺の手で拾はれたので一同は氷砂糖で元氣をつけて又出かけた、尙ほも危険至極な尾根を、右へからみ左へへツリ、大きな岩に出會しては一寸考へ、崩れかゝつた所では一と思案、兎も角も喘ぎ／＼二時間程やつて来た、これから先きは前夜の泊場からも見えて居つた、私達の所謂亂杭渡りと名をつけた五龍の南方八峯最後の難場である丁度地震の後の墓場の様で随分ひどい岩塊が可なり連つて居る、先づ初めての岩上に進んで見渡すと、右手信州側は足下から垂直に崩れ落ちて、裾は鹿島川の本流に落ち込んで居る、此の本流は遠見山の下で右即ち西に折れて槍から出る尾根で隠れて了ふ、左方越中側は或る所まで矢張り崩れ落ちて、先きは密林となり、其裾から北股が流れ出て東谷となり可なり先きまで白く河原が光つて見える。

前方行く手には芋をつくなたやうな五龍岳が、何所から取つ付いてよいか判らぬ様な荒肌を正午近い日光に曝露して私達を威嚇して居る。

亂杭渡りと言つても別段圖抜けて大い岩が邪魔をして居るのでもないが丁度等身大か、稍々大きい

位の塊が次ぎから次ぎへゴロ／＼と轉つたり、突き立つたりして積み重つて居る、それに足がかりが不安定であるからついで手をもつて支えやうとする、此の岩なればと思つて便りにする奴がグラ／＼と崩れかゝるのだから甚だ危険で冷い汗を手に握つたり、襟元へ流したりするやうな事は數知れぬ、少しひどいになると、キレトの候補地とも言ふべき所に今にも落ちさうな岩が二ツ程取り残されて居つて岩の根元からは兩側共にザラの急斜面が目の届かぬ程下まで下つて居る、先登に居つた朝輝が一足ザラにかゝつた時、石白大の岩片が何とも形容の出来ぬ悲痛な音を立て、信州側の谷間に向つて走り出した、行く／＼友を誘ふて中程から下は幅數間のザラの瀧、澤に届く頃には抜け落ちたやうな音を立て、四邊に響き渡るものすごさ、漸くにこの難場を通り抜けて五龍のすぐ南に聳つ一ピークを越して五龍との鞍部で晝食した、五龍岳へ南から登るには、始め見上げた處正面から右はとてまか／＼れさうにもないから左へまはつてガラを斜に這ひとつて行かうと菊十爺が言つたがガラを登るもの随分登りづらいからと言ふので矢張真中より稍右にかけて岩角を這ひ上つた、幸ひ誰れかが通つた足跡を發見したので先きに上るものは落石をせぬやう氣苦勞を重ねて約四十分で頂上の一角に取りついた。

私達はこゝから西北に向つて出てゐる尾根を傳つて直下の大黒鑛山へ出る豫定であつたが、道が見出せなかつたので、右方の小隆起を二つ計り越すと其の先きに北城村から鑛山に通ずる大黒の道路が見えて居るので、結局この峠道に向ふことになつた、途中で少し霧に出逢つたが大したこともなく無事峠路を下つて五時過ぎに事務所に到着して今夜は兩三日振りでも湯にも入り疊の上に寝た譯だが、特に蚤に弱い山には夜中大分若しんで矢張り天幕の方が可いどつぶやいて居つた。

私達は其翌廿七日祖丹谷温泉を経て小里郎谷の南平に一夜の露營を爲し（此では大きなブナノ樹に大阪山口アサヒ六、七、二七、泊と彫んだ）廿八日は池の平の鑛山事務所で一泊し翌廿九日は平藏谷入口で露營し、卅日長次郎谷より劔の頂上を極め立山へ出て室堂の裏で露營して翌卅一日の朝此所を

立つて其日の午後七時二十分五百石發の汽車にて富山に出で一泊翌日の夜行で八月二日の朝大阪へ歸つたのであるが、

要するに八峯の縦走は、天候が悪ければ殆ど不可能といつて可いだらうと思はれる、前にも記した通り鹿島槍から五龍までの間には唯一個所丈けの泊り場がある計りでそれも我々六人が充分足を伸して寝る丈けに天幕を張ることが出来ない様な狭い處しか無い、且つ水の手の最も悪い場所であるからこの泊り場を外したらば溜水は勿論一塊の雪もないが、此の八峯通りは必ず途中一泊を要する行程であるから一度天候が悪くなれば此の泊り場も安全な地點とは言ひ難い、必ず大風であれば天幕なんかは信州側の斷崖へ吹き落される様にも考へられる。

私達は行程十二日間一滴の雨にも出會はなかつたのは非常な天佑で慥かに楽しい山行きを一層愉快に終らせたのも又非常な幸福であつた。



雜 錄

山の物理学

海の物理学、國民物理学、精神物理学など云ふ名もあるが、らには山の物理学とも云ふも不穩當ではあるまい。

あまたたび筆をとつては、幾度となく筆をすてたらう。あるがまゝに、美しき自然の表現を、わが心に感得し、或はわが身心の全きをもてうちつけに、抱合することもなせず、さかしらなる智識を誇りがに、自然の母の骨肉を殺ぎ、皮肉も露はに、解析の桎梏にかけて、僅にあはれむべき智識欲を充さんとしてゐる。

たゞ漫然と杖をひく彷徨者の群にうちまじりて、事々に無智の驚嘆の念を抱く順禮者の心より轉じ、或は何等理解もなく、徒に時勢の趨向に従つて山に走る心を省みるとき、吾等はこゝに大いなる懷疑の念の、涌き起るのを否み得ない。

美しくたをやけき高山植物の微妙繊細なる生育の秘密をこく植物學者は多い。雄渾魁偉なる山脈の、生成の歴史を探り、地殻構造の理を談じ、或は有史以前の夢を語る地質地理の學者もあれど、八月の夜山頂に立つて、Orionの星座を仰ぎ、秋の夕に Siriusの閃きを眺むるなど、まことしやかに記文に載せて、自他ともに許すやうでも、まことに嘆はしいと思ふがまゝに、せめては山に關する廣汎深遠なる物理現象の一端を、窺ひ行かんと企てたのである。

曾て Tyndall はアルプの山懐をさすらひ、その麗容をうち仰ぎて

“I asked myself, How was this colossal work performed? Who chiseled these mighty and picturesque masses out of a mere protuberance of earth?”

と疑つた如くに、吾等も時々この端嚴なる山岳の殿堂を形づくる材料、構造にも立ち入つて探究するとともに、或は山岳を彫刻し、深谷を穿つて、今吾等の仰ぎみるかの雄大なる山脈を生成しては、再びこの昂げられたる山嶺を崩壊して、高低なき一様なる準平原ベネシとなす地形の輪廻——時代、營力の問題にも、或はこれに伴つて起る、種々の附帶的現象——廣汎なる現象が、未決のまゝ吾等の前に横はつてゐるのを思ふとき、今更に寔に哀むべき吾等の智囊の乏しさを喞つのみである。

例へば地形學の事柄にも、單に舊來の地質地理學者のとりたる如き、概念的の取扱ひでは、到底解決し得ぬ事の多々あるを信じて疑はない——America 或は Deutschland の、新進の學者の進みゆく路は、今日本邦に多く見る如き、岩石の分類のみに捕はれたる、頑陋なるものではない。

もどより系統を立て、記述する程未だ材料も蒐つてゐないのみか、電氣に磁氣に、光に、熱に、ありとあらゆる物理の現象の、彼此迭に關聯して、複雑極りなき山の現象の、項目を分つべくも

ないので、得るに任せ思ひ出づるがまゝに、時に氣流を論じて流體力學の門戸を窺ひ、或は熱力學の殿堂を訪づれて水蒸氣の秘鑰を覓め、時にブロッケンBrockenの妖怪 (Brocken Gespenst) 時にサンテルモ (St. Elmo) の焰を探つてもみたい——眞摯なる、敬虔なる感激に充てる順禮として。

されば物理學の應用として氣象學も論せねばならず、たをやき山の湖畔に佇んでは湖沼學を想ひ、或は地形地貌を論じて風化水蝕の斧鉞を露き、或は阿僧祇劫に亘りて星辰の私語に耳を傾けねばならない。

かくて他日を期して完成すべき、わが「山の物理學」の序曲として、このさゝやかなることろみが生るゝ運びになつたことについては、自分にとつて又さなく嬉しい懐ひ出もある。

最後に一言すべきは、萬全を期せんが爲めに、多くは既知の論文を骨子として、これを普延して紹介するにとゞめ、餘りに新稀を衍ひて、ひとりがりの珍説を出し、他を誤らすことはしないつもりである。

寧ろこの一篇は、今迄のもろゝの研究の果
sumé とも見るべきで、これも今日の吾々として
は、又一つの必要なる仕事であると考へる。

Je ne suis rien : je ne suis qu'un simple
solitaire. J'ai souvent entendu les savants dis-
puter sur le premier Etre, et je ne les ai point
compris ; mais j'ai toujours remarqué qu'il est
à la vue des grandes scènes de la nature que est
Etre inconnu se manifeste au coeur de l'homme
l'homme..... — Chateaubriand

一、山脈と降水量

わがこの試みの序曲として、山脈と降水量との
關係を論ずるのは、これが最も適してゐるからで
はない。右せんか左せんか、岐路に立ちて惑ひた
る旅人の如く、とかよの是非を辨へぬがまゝに、
何となく思ひ浮めたるこの論題を掲げて、たゞち
に學究徒の眼を向けよう。

吹きよする風は山に沿うて舞ひ昇り、昇るにつ
れて空氣は膨脹して温度が下り、そのうちに含ま
るゝ水蒸氣は凝結して遂に雨となるので、風向き

の山腹や平地には雨が多いが、山の峯を越ゆると
氣流は下り、空氣は壓縮して温度が昇り、水滴は
蒸發し雲霧は消えて雨が降らない。そして高山で
は山腹に最も雨の多い處のあるのは、可成り古く
からよく知られてゐる事實ではあるが、あくなき
吾等の智識欲は、只事實を事實としてのみとりに
れずに、何かうべなひ得る理由を探りたい。

然し翻つて考ふるに、山脈と降雨とを論ずる前
に、降雨を齎らすべき氣流の運動に立ちいらねば
ならぬ。氣流に關しては、後日に到り詳論する所
存で、已に一半の稿もなつてゐるから、今はたゞ
簡單なる流體力學の問題を解くにとゞめよう。

氣流に就いては、論ずべき問題は至つて豊富で
ある。誰しも聞焉として闇深き白馬の山頂の小屋
の夜半、遙に黒部の深き峽谷を越えて襲ふ、凄じ
き外あげの風の吹き荒む音を聞き、凜烈たる寒氣
の肌をすどきの寂しさを忘れぬであらう。自分も
此の夏、再びあの山頂に幕營した曉、咫尺も辨せ
ぬ濃霧と、外あげの吠ゆる響に、又なき孤獨の念
のみあげては、迥に都なる親しき誰彼の懐しさに

嗚咽するのであつた。

或は歌枕に床しい比良の根風、筑波根風、冬の都に荒ぶ秩父風、さては「嬋天下と涸ッ風」と云はるゝ上州の名物、或は時ならぬに氷雪を融して、平和なる Tyrol の山村を毀つ風炎 (Föhn) をはじめて、山風、谷風と挙げ來たれば問題は寔に多い。數年前になるが、獨創に富み、卓抜の見を抱くかの K. Wegener は飛行船に乗つて觀測を試みた結果、山頂より略々二百米以上の高さを流るゝ氣流は、殆ど山の影響を蒙らないと論じてゐるが、惜しむらくはその飛行船の航した地方は、比較的山岳の少い地方であるから、この論斷はあまりに匆急に失して、寧ろ吾々は影響を受けると考へらるゝ。

果せる哉 H. Ficker (meteorologische Zeitschrift Dez. 1913) は飛行船の山脈を横斷したときに、船上に備へつけた自記高度計にかゝれた高度曲線によつて、山頂より一千米の上でもなほ、氣流は山岳のために擾亂さるゝことを示してゐる。飛行船は谷の上をよぎる時自然に下降し、山頂の上を通

る時は抬げられる。詳しくは後に氣流の論のときにあぐるとして、たゞ一言附け加へたいのは、輕卒に考へると謎のやうに思へるも、強い風の時程、山岳の爲めに氣流は擾亂さるゝことは少いが、却つて風力の小さい時には著しく攪亂される。これはまことにさもあるべきことではあるが、これを矢津昌永氏の氣界講話にあるごとき空氣の粘性をもつて説明せんなどは、謬見も甚だしいものである。

扱て氣流が平衡の状態にあるとして、その中の或る小部分に眼をつけて考へてみよう。ρを空氣の密度、Pをその點に於ける壓力、單位質量に働く力をKとするならば、釣合つてゐるがためには

$$\text{grad } p = \rho K \dots\dots\dots (1)$$

でなければならぬ。

外力としては、簡單に重力だけが働いてゐるならば、VにはポテンシャルがV成立するから

$$K = -\text{grad } V \dots\dots\dots (2)$$

その流體の實質部分の位置を、任意にとつた直角坐標軸について (x y z) で表はすならば、ポ

テンシヤル V は、この坐標のみの函數であつて、時間 t には無關係であるから

$$\text{grad } p = -\rho \text{ grad } V$$

$$dp = -\rho dV, \dots\dots\dots (3)$$

等ポテンシヤルの面、即ち $V = \text{constant}$ の面に沿ふては

$$dV = 0$$

従つて

$$dp = 0$$

即ちポテンシヤルの等しい面に沿ふては、壓力も變らないから、ポテンシヤルが定まれば、それに一々對應して壓力は定まるべきである。數學的に云へば、壓力はポテンシヤル V の函數として

$$p = f(V) \dots\dots\dots (4)$$

で表はせば

$$dp = f'(V) dV$$

これを (3) の式に入れて

$$\rho = -f'(V) \dots\dots\dots (5)$$

つまり體流の密度 ρ もポテンシヤル V へ定まればさまるのである。

吾等にこそ雄渾なる山脈も、地球全體に亘る氣

流の循環や、信風などを論ずる場合とちがつて、極めて小さい起伏にすぎず、部分も狭いから、可成り廣い場所にわたつて、地球の曲率も無視して、重力の大きさも方向も一樣であつて、平行に働くと考へてもよいから、等ポテンシヤル面は、水平面となるので、殊に水平的に氣温が異ると空氣の密度も異ひ、釣合ふことはできなくなる——同じ高さ即ち V の或る一つの値に對して、 ρ が唯一つにはきまらないで、種々の値をとるので釣合は破れて、容易に氣流の運動が始まる。

垂直の方向については、氣温の逆轉でもあつて、上に冷い層でもあれば、その比重が大であるから下降するは明である。今温度が一定であるとして、重力だけの影響を考へてみよう。

しかしこれとても、單に大體の概念論にとゞめておくために、重力 g は、重力異常もなく、山によつても影響されてゐない又地球の自轉も考へないで、たゞ地球の中心 (球として) からの距離 r できまるものとする。地表に於ける重力を g_0 地球の半徑を r_0 で表はせば

$$g = \frac{10^8}{r^2} g_0 \quad r = 6400 \text{ km}$$

$$V = 1 - \frac{r_0^2}{r} g_0$$

温度を一定としたから、 ρ は p に比例するので

$$\rho = k \cdot p$$

$$(3) \quad r_0^2 \frac{dp}{p} = -k p dr$$

$$\therefore \log p = \text{const.} - k V$$

地表に於けるものに添字 0 をつけて示せば

$$\log \frac{p_0}{p} = k (V - V_0)$$

$$= \frac{k g r_0 (r - r_0)}{r} \dots\dots\dots (6)$$

勿論これは大體論のみであるが、温度が一樣なる時、垂直的には氣壓が此の關係にある時にのみ釣合ひ、さなくば氣流が起る。大氣の釣合ひについては、熱力學的にいらべて、その状態が安定か不安定か定めるのが至當であれど、其他氣流の起る状態については、後に詳論するとして、今この概念論にとゞめておく。

それよりも今は、氣流が山脈によつて如何に擾亂さるゝか、解析數學にかけて論じてみたい。

マヤクボの雪溪を攀ちて針木岳のハヒマツにからみついて頂をうち仰いだ時にも、掬子の肩にへづつて白馬を眺めた時にも、新乗越に嵐の最中に行んだ思ひ出にも、尾根を越ゆる雲霧の流れゆく姿を辿つてゆけば、巴と亂れ、狂つて、さまざまの渦をまき文をなして躍る。

されど吾等が流體力學の初歩の問題として取扱ふ場合に、渦なしの運動 (irrotational motion) でなければ非常に難しくなり、縦令渦なしとしたところで、更に種々の假定を設けて状況をできるだけ簡單にせねばならぬ。

人間の顔貌の縦断面の曲線を、調和分析にかけて音響學を論ずる世の中であるからには、山の起伏を簡單な數式で表はして、それを Fourier 級數で展開することも許容されやう。

渦なしの運動とすれば、速度ポテンシャルが成立するから、數式も相當に簡單になり、場合によつては、共軛ポテンシャルの理論を應用すること

ができて、白馬連山の如き、姫川の溪谷に臨みて、急峻な斷層面で高聳するもの、黒部の深谿、或は槍岳の尖峯などに、變らない水平氣流が衝突する場合に應用しても差支ないやうに思へる。これについては、風を論ずるときに立ち入るとして、今は降水量と關係上必要なだけの、浅い道筋を辿つてゆきたい。

狀況を極めて簡明にするために、自然を虐み、できるだけ種々の假定を設けるが、しかしこれでも數學は中々に困難であり、又かくも多くの條件のあるにも拘らず、降水量を論じて、割によく事實に吻合するとは面白い。

(一) 變らない氣流 (steady flow) 即ち或る點では、時がたつても氣流の状態は變らない。

(二) 氣流の中で、急に速度が變るやうな處はなくて連續してゐる。そして完全な流體で、外力にはポテンシャルが成立し、密度は壓力の函數であると考へるから Lagrange の定理が成立して、初めに渦がないとすれば、渦は生ずることはない。

(三) 更に氣流は何處でも、或る一つの定まつ

た垂直な平面に平行に流れてゐるとしやう。従つてその平面のうちに直角坐標をとつて位置を定めるとして、坐直にとつた坐標 y と、水平の坐標 x で表はし、 x と y に垂直な第三の方向に於いては、すべての事柄が等しく成立つものとして、二次元の問題とするが都合よい。

(四) 氣流が地表に接する處で、實際の空氣では摩擦があるけれども、この外部抵抗はないものとするのみか、氣流が山と衝突するために、はじめ上層と下層と同じ速度であつたにしても變つてくるから、速度の勾配 (gradient) があるので、内部抵抗即ち粘ばさが考に入つてくるのを、これもない理想的な氣體を想像する。

(五) 山の上や谷の上では、前述の Föcker の研究の如く氣流は攪亂せらるゝが、非常に高い處では、その影響は極めて小さいから無視して、完全な水平氣流で、上昇も下降もせず、一樣な速度 a で流れてゐる。

(六) 地表の形については、已に(三)で氣流は x, y に垂直な方向に對しては、事柄が同様に起る

と假定した以上、これもそれに適するやうに定めねばならない。

又氣流を論ずる微分方程式の解を求める上の便宜からして、地表は波形をなしてゐると考へるのが都合よい。或る一定の距離を隔て、海の波の起伏のやうに、山脈が起伏してゐるとする——これこそまことの「山なみ」であらう。數學的に云へば、 x, y 面に平行な平面で截つた山脈の垂直斷面の曲線は、その平面がどこであつても同じ形をしてゐて、週期性を帯びてゐる——即ち地表はある同形な平行な山の波のうねり^{うねり}でできてゐる。

このやうな條件のもとで、氣流を論ずると云へば、理論物理学の問題に目新しい人には、餘りに自然とかけ離れてゐると驚くであらう。然し自然は、吾等の貧しき頭腦、解析の知識にかけるには、立ち勝れて壯嚴であり、幽遠である。これをそのまゝに感受し得る詩人は幸なるかな。その幽冥の境に遊ぶ哲人はまことに羨しい。吾等はおどましくも智慧の木の實を食みたるの報に、乏しい智囊を漁り、影より陰、夢より幻を追ひ究め、あ

りとあらゆる羈絆を設けて、そのいと狭い牆のうちに彷徨して、僅に小さい箱庭を造つては、かくもあらんと付度する。それでも實相の名月は變らぬ光を投げはする。

氣體の運動を論ずるのに、流れゆく氣體の各々の部分に著目して、その流れゆく跡を辿つて變化を論ずる所謂 Lagrange の方法と、流るゝ氣流よりも、そのために起る事情に注意して、空間の種種の點に於ける状態を研究する Euler の方法とがあることは有名な事である。吾々の場合では、已に變らない氣流であり、且氣流そのものよりも、空間に於ける状態を知ることが必要なので、Euler の方法をとることにする。

氣流の水平の方向の分速度を u 、垂直分速度を v 、氣體の密度を ρ とすれば、變らない運動であるから、 u, v, ρ は x と y の函數で、時間 t には關係しない。即ち

$$\frac{\partial u}{\partial t} = 0, \frac{\partial v}{\partial t} = 0, \frac{\partial \rho}{\partial t} = 0 \dots \dots \dots (7)$$

連續の方程式は

$$\frac{\partial(\rho u)}{\partial x} + \frac{\partial(\rho v)}{\partial y} = 0 \dots\dots\dots (8)$$

更に渦なしの運動であるから

$$\frac{\partial u}{\partial y} = \frac{\partial v}{\partial x} \dots\dots\dots (9)$$

従つて速度ポテンシャルを ϕ とすれば

$$u = -\frac{\partial\phi}{\partial x}, \quad v = -\frac{\partial\phi}{\partial y} \dots\dots\dots (10)$$

高さが増すに従つて温度や氣壓が低まり、空氣の密度が變り、多くは減少するけれども、この割合は場合によつて著しく異なる。殊に上昇氣流のあるときには、氣流の速度にも、水蒸氣の凝結、ついで起る温度の變化に迭に關係するが、最も簡単な事情をとつて、 dy だけ高さが増せば、氣壓は dp だけ減少すると考へやう。

$$-dp = \rho g dy \dots\dots\dots (11)$$

(負號は高さが増せば氣壓の減少することを示す) 降雨を起すとき、空氣は水蒸氣を含んでゐるが、これを單に乾燥した空氣と水蒸氣との混合であり、且つ水蒸氣の量も僅少であるから、地上の普

通の温度の範圍では完全なる氣體に關する Boyle や Charles の法則が充分に成立するものと考へてよむ。 ρ を一立方米の質量、 θ を絶對温度とすれば、一氂の氣體につき

$$p = R\rho\theta \dots\dots\dots (12)$$

$$R = 287.09 \text{ (空氣)}$$

s 氂の水蒸氣が $(1-s)$ 氂の乾いた空氣が混じてゐる濕つた空氣について、 f を水蒸氣張力、空氣に對して比重が $1-s$ であるとすれば

$$p - f = R(1-s)\rho\theta$$

$$f = R s \rho \theta$$

$$p = R\{1+(e-1)s\}\rho\theta$$

$$\left. \begin{aligned} p - f &= R(1-s)\rho\theta \\ f &= R s \rho \theta \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (70)$$

$$\frac{f}{p} = \frac{e s}{1+(e-1)s}$$

$$s = \frac{1-f}{1-\frac{e-1}{e}f}$$

$$T = \frac{e\theta}{e - (e-1)\frac{f}{p}} \dots\dots\dots (13)$$

とおけば

$$p = R \rho T \dots\dots\dots (14)$$

と書ける。Tは所謂 virtual temperature と稱するもので、乾いた空氣については、水蒸氣張力が零即 f が零であるから、絶對温度に外ならない。このやうな T を導けば、濕つた空氣についての式も形は全く同じくなる。

さてこれを(11)の式に代入すれば

$$\frac{dp}{p} = -\frac{R}{RT} dy \dots\dots\dots (11a)$$

積分して

$$p = p_0 e^{-\int_0^y \frac{R}{RT} dy} \dots\dots\dots (15)$$

もし T が到る處變らず、R も一定ならば

$$\frac{p}{RT} = q = \text{const.} \quad \text{とおけば}$$

$$\log \frac{p_0}{p} = qy \dots\dots\dots (16)$$

q は常数であつて、その逆数は、米を單位にすると、凡そ八千米となつて、所謂 homogeneous

atmosphere の高さである。壓力の代りに密度で表せば

$$\log \frac{p_0}{p} = qy \dots\dots\dots (17)$$

この簡單なる氣壓の配置を假定しておいて、Pockels の論文 Theorie der Niederschlags bildung an Gebirgen を大體の骨子として論じてみよう。

同じ高さの水平面に於て、温度の差が著しくない場合には、空氣の密度 ρ は只高さがちがへば變ると考へてよい。即ち ρ は x によらず、y のみの函数であるとすれば前の簡單な氣壓の式を用ゐることが出来る。

$$\frac{\partial \rho}{\partial x} = 0$$

(8) の式に速度ポテンシャルをいれて書き換へば

$$\rho \left(\frac{\partial^2 \phi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \phi}{\partial y^2} \right) = -\frac{\partial \rho}{\partial p} \frac{\partial \phi}{\partial y} \dots\dots\dots (18)$$

(17) を微分すれば

$$-\frac{1}{\rho} \frac{\partial \rho}{\partial y} = q$$

これを(18)に代入すれば

$$\frac{\partial^2 \phi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \phi}{\partial y^2} = q \frac{\partial \phi}{\partial y} \dots\dots\dots (19)$$

扱(五)及(六)の條件の結果として

$$\left(\frac{\partial \phi}{\partial y}\right)_{y=0} = 0 \quad \left(\frac{\partial \phi}{\partial x}\right)_{y=\infty} = -a$$

であるから(19)の微分方程式の解として

$$\phi = -a(x - b \cos mx e^{-ny}) \dots\dots (20)$$

$$m^2 - n^2 = qn$$

$$n = -\frac{1}{2}q + r, \quad r = \sqrt{m^2 + \frac{1}{4}q^2}$$

水平、垂直の分速度 u, v は

$$u = a(1 + bm \sin mx e^{-ny}) \dots\dots (21)$$

$$v = a b n \cos mx e^{-ny} \dots\dots (22)$$

この速度ポテンシャルの成立するやうな氣流の運動に適する地表の形貌は、流れの線(stream line)の一つであればよい。變らない流れであるから、氣體の實質部分の實際にとりゆく路筋(path)と流れの線とは一致する。扱流線は微分方程式

$$\frac{dx}{u} = \frac{dy}{v}$$

を積分するか、 ϕ と共軌なポテンシャル ψ を求めればよい。即ち

$$\frac{\partial \psi}{\partial x} = -\frac{\partial \phi}{\partial y} = a b n \cos mx e^{-ny}$$

$$\frac{\partial \psi}{\partial y} = \frac{\partial \phi}{\partial x} = -a(1 + bm \sin mx e^{-ny})$$

それを積分して

$$-ny \sin mx = -\frac{m}{bn} + C e^{ny} \quad (23)$$

(72)

Cは流線を定める parameter である。

山脈の斷面の曲線は、坐標の原点を通るとして、普遍性を失はないから、この條件をいれると

$$C = m \sqrt{b q n} \dots\dots (24)$$

この曲線上の點の縦座標を η で表はせば

$$\frac{bqn}{m} \sin mx e^{-ny} = e^{q\eta} - 1$$

$$\frac{bn}{m} \sin mx e^{-r\eta} = \frac{1}{q} \sinh\left(\frac{1}{2}q\eta\right) \quad (25)$$

地表の凹凸は極めて小さいと考へれば、 η は小

さい量で、山の頂、谷の底について共に

$$\left(\frac{1}{2}q\gamma\right)^2 \angle \angle \angle 1$$

ならば、雙曲正弦を級數に展開して、高次の項を捨てて

$$= b^n \sin m x e^{-\gamma y} \dots \dots \dots (26)$$

の超越方程式によつて γ は定められる。このうちで b と m は任意にとりうる Parameter であつて、 b は山脈の高度、 m は山の廣延によつて定まる常数である。

地表は同じ様に起伏する山のうねと考へたから、二つの相隣れる山脈の頂きの距離を λ で表はして

$$m = \frac{2\pi}{\lambda} \dots \dots \dots (27)$$

とおけば、 λ は波の丈(波長)である。

與へられた條件に適ふ解は此の外にはないこと、もし二つあつたと假定して、その差に等しい函数を考へた場合に、結局それが零になると云ふ

◎雜 録 山の物理學

結論を得るので容易く證明される。それで非常に都合のよいことになり、地球上に山脈の波が起伏してゐないでも、曠野のはてに山脈が聳えて、これに水平な氣流が吹きよする、極めて重要な場合に應用することができぬ。

實際の山脈はこのやうな單純な式では表はせないで、 m や b が種々の値をもつてゐるものを重ね合はせたものと見做さるので

$$\varphi = a \left\{ x - \sum_{(1)} b_i \cos m_i x e^{-\gamma_i y} \right\} (28)$$

$$\gamma = \sum_{(1)} \frac{b_i \pi_i}{m_i} \sin m_i x e^{-\pi_i y} \dots \dots \dots (29)$$

y も γ も共に小さく、 $e^{-\pi y}$ 、 $e^{-\pi_i y}$ が1とおきうれば

$$\gamma = \sum_{(1)} \frac{b_i \pi_i}{m_i} \sin m_i x e^{-\pi_i y} \dots \dots \dots (30)$$

更に $m_i = \frac{2\pi}{\lambda_i}$ とおきて、 i が次第に整数で變つてゆくならば、任意の山の曲線 $\gamma = f(x)$ を x の ∞ から λ までのすべての値について、級數に展開できる。しかし i は ∞ から次第に無限につゞいてゆくの、遂には非常な大きな數に達するから

H_{imj} が i の如何なる大きな價に對しても 1 に等しいことは、その最高點の高さが λ に較べて極めて小さくなければならぬ。

簡単な場合をとつて考へるゝとして、曠野のはてに高原性の山があり、その曲線は次の條件で與へられる。

$$\begin{aligned} \eta &= \frac{12H}{\lambda} x && 0 < x < \frac{\lambda}{12} \\ \eta &= H && \frac{\lambda}{12} < x < \frac{5\lambda}{12} \\ \eta &= -\frac{12H}{\lambda} x + 6H && \frac{5\lambda}{12} < x < \frac{7\lambda}{12} \dots (31) \\ \eta &= -H && \frac{7\lambda}{12} < x < \frac{11\lambda}{12} \\ \eta &= \frac{12H}{\lambda} x - 12H && \frac{11\lambda}{12} < x < \lambda \end{aligned}$$

η を Fourier の級數で表はすべしなから、即ち

$$\eta = \frac{2}{\lambda} \sum_n \sin\left(\frac{n\pi}{\lambda} x\right) \int_0^\lambda \eta \sin \frac{n\pi x}{\lambda} dx \dots (32)$$

$$\text{扱つて} \quad \int \sin \frac{n\pi x}{\lambda} dx = -\frac{\lambda}{n\pi} \cos \frac{n\pi x}{\lambda}$$

$$\int x \sin \frac{n\pi x}{\lambda} dx = -\frac{\lambda}{n\pi} x \cos \frac{n\pi x}{\lambda} + \frac{\lambda^2}{n^2 \pi^2} \sin \frac{n\pi x}{\lambda}$$

であるから結局

$$\begin{aligned} \eta &= \\ &= \sum_{n=0}^{2H} \sum_{m=0}^{2(p+1)a} \frac{1}{e^{(2p+1)\pi}} \frac{\sin \frac{2(2p+1)\pi}{\lambda}}{\lambda} x \dots (33) \end{aligned}$$

扱つて(28)の速度ポテンシャルの式を微分して

$$\begin{aligned} u &= a (1 + \sum b_m \sin m x e^{-my}) \\ v &= a \sum b_n \cos n x e^{-ny} \dots (34) \end{aligned}$$

(74)

この式で明な通り、山の斜面の中腹と、その直上の點では高さに拘らず氣流の水平速度は、いつも a に等しい。そして b や m は正の數を考へても差支ないから

$$\begin{aligned} x &> 0 \text{ 即谷の上では} && u < a \\ x &< 0 \text{ 山の上では} && u > a \end{aligned}$$

わけて簡単な場合をとつて調べて、一般の事情が推しはかれるから、單に

$$\eta = \frac{bn\lambda}{2\pi} \sin \frac{2n\pi x}{\lambda} e^{-ny} \dots (29a)$$

$$\varphi = -a(x - b \cos \frac{2\pi x}{\lambda} e^{-ny}) \dots (28a)$$

$$u = a \left(1 + \frac{2\pi b}{\lambda} \sin \frac{2\pi x}{\lambda} e^{-ny} \right) \dots (34a)$$

$$v = a b n \cos \frac{2\pi x}{\lambda} e^{-ny}$$

u は x が $\frac{\lambda}{4}$ の點で極大、 $-\frac{\lambda}{4}$ の點で極小であり、v は x が 0 即ち山の中腹で極大で、 $\pm \frac{\lambda}{4}$ で極小となる。

山の中腹から谷の方へ水平に $-\frac{\lambda}{4}$ だけ隔つた地點、即ち谷の中央で

$$u = a \left(1 - \frac{2\pi b}{\lambda} e^{-ny} \right)$$

$$v = 0$$

地上に於ける速度を u_0 、谷底より h 米の高さの速度を u_1 とすれば、山の中腹から谷の深さは H 米であるから

$$\frac{u_1 - a}{u_0 - a} = \frac{e^{-n \cdot (h-H)}}{e^{-nh}}$$

谷の中央の直上では、h が數千米になれば、水平速度は a と見てもよいことがわかる。それで吾々は $x = -\frac{\lambda}{4}$ よりもきは、すつと平原がつゞいてゐて、その上を水平な氣流が流れてくる場合について、この式を用ゐる。

しかし次第に高まるに従つて、風速が増すので、速度の勾配があり實際は粘さを考へにいれねばならないが、完全な氣體としてなものとす。

水蒸氣の凝結は主として、垂直分速度 v に關係するから、v について少し調べてみよう。x に 0、 $\frac{\lambda}{12}$ 、 $\frac{\lambda}{8}$ 、 $\frac{\lambda}{6}$ 、 $\frac{\lambda}{4}$ を入れた値を夫々添字 1、2、3、4、5 をつけて表はすならば

$$v_1 = a b n e^{-ny}$$

$$v_1 : v_2 : v_3 : v_4 : v_5 = 2 : \sqrt{3} : \sqrt{2} : 1 : 0$$

この簡單な場合では、いつも垂直速度は高さが増すに従つて、 e^{-ny} の割合で減少するが、更に少し複雑な場合で、 η が最初の三項で表はせるものについて、Pockels は計算してゐる。

$$\eta = 1100 \left\{ \frac{1}{2} \sin mx + \frac{1}{9} \sin 3mx + \frac{1}{50} \sin 5mx \right\}$$

$$\lambda = 60000 \text{ meters}$$

$$m = 1.047 \times 10^{-4}$$

$$\phi = -a(x - 881e^{-\eta}) \cos mx$$

$$-148.3e^{-\eta} \gamma \cos 3mx - 24.8e^{-\eta} \gamma \cos 5mx$$

で表はせるものでは、山腹の中央より十五籽隔てた處に山の頂と谷の底とがある。そしてこの式の丘ができて、高さの差が九百米になる。このために、 v と a との比は次の表で示すやうになる。

山中央より高さのり(米)	山腹の中央より水平距離(籽)				
	0	5	75	10	45
500	0.099	0.0406	0.0129	0.0012	0
1330	0.0842	0.04075	0.0149	+0.00226	0
2440	0.0740	0.0400	0.0182	0.0064	0
3460	0.0651	0.0387	0.0206	0.0093	0
4530	0.0575	0.0370	0.0217	0.0108	0

山の斜面の中央の直上では、高くなるに従つて次第に v は減少するのに、その近くの山麓や山上では、或る高さに極大があることは、表からも、亦 v を y について微分してみてもわかる。氣流に關する事柄は、不本意乍らも、もとよりこれが當面の問題ではないから後日に譲り、一と先づこれのうちきり、凝結の研究に入らねばならない。

しかし大氣の熱力學的研究についての、Neuhoff, Bezold, Hertz, Hann, Thomson, Guldberg 及 Mohr 等の立派な論文は、これも他日に廻して、さしあたり簡単な考究をつゞける。

水平に流れてくる氣流が山に衝突すると山の傾斜に沿つて上昇し(矢津氏の説く如き、空氣の粘性!ではさらさらない)ついで水蒸氣の凝結が起るが、この際上昇氣流は斷熱的(恒熱的 adiabatic)變化をうけるものとする。變化の際に外からとる熱量は零であるから、熱量を Q とすれば、

$$dQ = 0 \dots \dots \dots (35)$$

濕つた空氣の内部エネルギー (internal 或 intrinsic

energy) を U 、容積を V 、 J を熱の仕事當量とすれば、熱力学の第二法則は

$$0 = dU + JpdV \dots\dots\dots (36)$$

變化の前後に z と $z + dz$ へ entropy H は變つた。よ

$$dH = 0 \dots\dots\dots (37)$$

更に山に向つて流れてくる氣流は、前以て斷熱的に平衡の状態にあるものとすれば、谷の上で空氣の温度と湿度を測れば (湿度は specific humidity を用ゐることにする) 或る高度で水蒸氣の飽和する値を計算することができる。

y の高さにある水平面上の、單位面積をよぎつて、(長さの單位として米を用ゐる) 單位時間に垂直に流るゝ空氣の量は v_0 、今單位面積の底面で、高さ dy の直六面體を考へ、これが雲の中にあるならば、高さ y 及び $y + dy$ との飽和の狀況にて含む水蒸氣の量だけ凝結するから、 $H(y)$ を高さ y にて飽和した空氣の湿度とすれば、單位時間に凝結する量は

$$-v_0 \frac{\partial H}{\partial y}$$

單位時間内に、雲の中で y と y' の間で、單位面積の底面の筒の中に凝結する水蒸氣の總量 W は

$$W = -\int_{y_0}^{y'} v_0 \frac{\partial H}{\partial y} dy \dots\dots\dots (38)$$

凝結した水蒸氣がどんな工合に水平な氣流に流さるか計算する手懸りがないので、只垂直に降るものとすれば、斷熱的平衡の状態にあるから、途中で蒸發することもなく、水平面上の單位面積に、單位時間の降水量は (36) で表はせる。とは云へ、雲の上層に於ける靜に泛む水滴や氷片については、水平の移動は大きな問題であるが、雲の下部に於ける大きな水滴にはこの移動は餘り重要でもなく、又實際下部のものが主として降水量に影響する。しかしこの水平移動は山腹に於ける全降水量に影響しないが、たゞその配置の狀況と、或る地點に於ける降水量が實際と少し變り、これを考へ入れない理論的の計算よりも、最大降水量の地點は山の頂の方に偏る。

全降水量を出すためには、 y' は上昇氣流の中に凝結の起らなくなる點の高さを置きかへるべき

(77)

も、餘り高い處、 λ に對して大きな値については、此の解を用ゐるは不穩當であり、又大氣が斷熱的平衡の状態にあると云ふことも云ひ得ない。

それで今は雲には上の界限が定まつた高さに起り、これが考へてゐる場所では、何處も同じ高さとし、 y' に此の値を入れるが、 y' が數千米になれば $F(y)$ も $\nu\rho$ も急に減少するから、實際 W に及ぼす影響は極めて少い。前の式を書きかへて、

$$W(x) = \left[\nu\rho F(y) \right]_{y'}^{y_0} + \int_{y'}^{y_0} F(y) \frac{\partial(\rho\nu)}{\partial y} dy \dots (39)$$

雲の底が山の頂よりも高い場合と、雲が山の峯にかゝつてゐる時とわけて考へるが都合よい。即ち y_0 が y' よりも大きい處と、 y' が y_0 と y_0 との間の値をとる時とがある。

F は高度 y に於ける飽和空氣の湿度で、この點に相當する氣温、氣壓とともに、 ρ の計算に必要な量であるが、簡單に表はし得る解析的の式はないので、Pockels は Hertz の研究になる Methode zur Bestimmung der adiabatischen Zustandsänderungen feuchter Luft に基く表によつて F を求めてゐるが、

其後一九〇〇年に Neuhoff の Adiabatische Zustandsänderungen feuchter Luft, etc. なる立派な論文があつて F の表もこれで求めらるゝが、詳細は後日に譲り、只、今の處では F は是等の表によつて求めらるゝものとしておく。

扱 Hertz 或は Neuhoff の表を用ふる場合に、明な事乍ら注意すべきは、吾等の式中の y は海拔ではない。

(39) の積分を來めるのに F の式がわからないので y_0 から y' までの區域を、 F を一定と見做しても差支ない位の h 個の小部分、即ち $y_0 \dots y_1, y_1 \dots y_2, \dots, y_{h-1}, y_h$ に分つて、その第 k 番目の小部分の F の平均値を F_{mk} で表はせば

$$\int_{y_0}^{y'} F(y) \frac{\partial(\rho\nu)}{\partial y} dy = \sum_{k=0}^h F_{mk} \left[(\rho\nu)_{k-1} - (\rho\nu)_{k-1} \dots \dots \dots (40) \right]$$

簡單な場合で Δy が (34a) で表はせ、又 (17) によ

$$\rho = \rho_0 e^{-\alpha y} \dots \dots \dots (17a)$$

であるから、

$$c = a b n \rho_0 \quad k = q + n$$

$$\frac{\partial(\rho v)}{\partial y} = -c k \cos \frac{2\pi x}{\lambda} e^{-ky}$$

$$\int_0^y F(y) e^{-ky} dy = f(y) \dots \dots \dots (41)$$

よび

$$W(x) = \cos \frac{2\pi x}{\lambda} \left[\frac{\partial f(y)}{\partial y} + k f(y) \right]_{y=y'}$$

$$W(x) = C \cos \frac{2\pi x}{\lambda} \dots \dots \dots (42)$$

$$C = \left[\frac{f(y) - k f(y)}{y'} \right]_{y=0}$$

Cの値はaに近い常数で、降水量は簡單な餘弦曲線で表はせ、山の中腹即xが0の處に降水量の極大の地點がある。

降水量の變化する様子は次の式で表はせる

$$\frac{dW}{dx} = -\frac{2\pi C}{\lambda} \sin \frac{2\pi x}{\lambda} \dots \dots \dots (43)$$

実際には降水量の極大の地點は、中腹より少し山稜の方に高めらるゝが、これは雲から落つる水

滴がたゞ垂直にのみ降らず、水平氣流によつて流されるのと、温度や湿度の状態が今假定したやうな理想的な場合と違ふことによると考へられる。山の斜面の或る區域に亘る降水量Gは、このWの式をxについて積分すれば求まる

$$G(x) = \int_{x_0}^x W(x) dx$$

$$= \int_{x_0}^x \rho v \frac{\partial f}{\partial y} dy dx \dots \dots \dots (44)$$

簡單な場合にとらへば(42)によつて

$$G(x) = \int_{x_0}^x C \cos \frac{2\pi x}{\lambda} dx = \frac{\lambda C}{\pi} \cos \frac{\pi(x+x_0)}{\lambda} \sin \frac{\pi(x-x_0)}{\lambda} \dots \dots \dots (45)$$

斜面全體に亘つては

$$G = \int_{-A}^A W(x) dx = \frac{\lambda C}{\pi} \dots \dots \dots (45a)$$

今迄の議論は雲の底が山頂よりも高い場合、即ちyがγよりも大きいのであるが、山の頂が雲に蔽はるゝ時はγを、y' < γ < y°とγ° < γ < γ°との二つの區域に分けて考へねばならない。そして雲の

◎雜

山の物理學

かかつてゐる部分では、雲の底の高さの代りに、山の高さをおきかへる。降水量の配置は、最も簡単な場合でも、餘弦曲線許りでは表はせなく、原點に對して對稱的でなくなる。

雲よりも下の山の部分では、二三を除いて今迄の式がそのままあてはまる。雲の中に入った區域ではWは

$$W = - \int_{y'}^{y''} v_p \frac{\partial F}{\partial y} dy \dots\dots (46)$$

然るにyは(29a)で表はせるから、山の斜面の傾斜はyをxについて微分すればよい

$$\frac{dy}{dx} = \frac{bn \cos \frac{2\pi x}{\lambda}}{e^{ny} + \frac{bn\lambda}{2\pi} \sin \frac{2\pi x}{\lambda}} \dots\dots\dots (47)$$

降水量の變り

$$\frac{dW}{dx} = \frac{\partial W}{\partial y} \frac{dy}{dx} = v_p \frac{\partial F}{\partial y} \frac{dy}{dx} \dots\dots\dots (48)$$

Pooleks によつて具體的に數を入れて

$$\lambda = 24000 \text{ meters, } bn = 0.262 \text{ meter}$$

10

$$n = 2.62 \times 10^{-4}, \quad r = 2.69 \times 10^{-4}$$

x =	0km	4km	2km	0	2km	4km	6km
y =	-1495m	-1194m	-885m	0	444m	715m	805m

山頂の高さは谷底の平原より二千三百米となる。もし谷は海よりも百米高く、氣壓は七百五十耗、氣温は攝氏二十三度、濕度は一疋の空氣の中に十瓦の水蒸氣が含まれてゐるならば Hertz の表からして、雲の底は千二百二十米即 $y^\circ = -375$ となる。かりに雲の上限を海拔四千米とするならば、雲の山と接してゐる地點は $x = -1.35 \text{ km}$ となり、雲よりも下の區域では

$$W = -0.262 a \cos \frac{2\pi x}{\lambda} \int_{375}^{805} p e^{-ny} F(y) dy$$

$$= 1.09 \times a \cos \frac{2\pi x}{\lambda}$$

氣流の水平速度が平均毎秒一米であるとき、一時間の降水量を耗を單位としていくらの深さになるか求むれば

x (km)	6	5	4	3	2	1	0	2	4	6
w (mm)	0	1.01	1.96	2.78	3.40	3.50	2.94	1.95	0.88	0

雲より下 雲の中

全降水量は

$$G = - \frac{abn\lambda}{2\pi} \sin \frac{2\pi x}{\lambda} \int_{y'}^{y''} \rho F(y) e^{-ny} dy$$

同じ高さの山ならば斜面が峻しくなる程、又短くなる程、降水量は少くなる。

Bezold は Beason や Suring が氣球をあげて観測した結果から、五百米毎の温度と湿度とを調べて、垂直に温度の減少する度合は、斷熱的と考へたものよりも少なく、又湿度も飽和に達してゐない。然れば吾々の取扱つたごとく、到る處同じ高さの雲の限界が成立すると云ふことも許容されないし、山の斜面を匂ひ昇る氣流によつて起る水蒸氣の凝結は、たゞ垂直分速度のみに關係するのではないから、變らぬ氣流の状態に於て、單位の空間に凝結する水蒸氣の量は、同時にその空間に流れこむ水蒸氣の量と、流れ出づるものとの差に等しいとして W を計算すべきである。

一立方米の空間に一秒間に凝結する水蒸氣の量は前と同様に極めて小さい直六面體をとつて考へれば、

$$-\frac{\partial(\rho u F)}{\partial x} - \frac{\partial(\rho v F)}{\partial y}$$

この空間に流れこむ水蒸氣の量に比して、凝結するものは極めて小さいと考へてもよいから、連續の式は

$$\frac{\partial(\rho u)}{\partial x} + \frac{\partial(\rho v)}{\partial y} = 0$$

をいれると、凝結する量は

$$-\rho \left(u \frac{\partial F}{\partial x} + v \frac{\partial F}{\partial y} \right)$$

前どちがつて F は x と y との函數と見て、或る地點 x に於ける降水量は

$$W = - \int_{y'}^{y''} \rho \left(u \frac{\partial F}{\partial x} + v \frac{\partial F}{\partial y} \right) dy \dots (49)$$

y' と y'' とは x に於ける雲の下と上との界限である。

扱前と同じく最も簡單な場合について考へれば

$$k=q+n$$

$$\int_0^y \frac{\partial F(x,y)}{\partial x} dy = F(x,y)$$

$$\int_0^y F(x,y) e^{-ky} dy = f(x,y)$$

$$\int_0^y P(x,y) e^{-ky} dy = p(x,y), \dots$$

とて計算した結果、

$$W(x) = Q(x) + \sin \alpha R(x) + c \sin \alpha S(x) \quad (50)$$

で表はせる。

然し吾々は氣流や雲について至つて不完全な知識しか有つてゐないので $Q(x), R(x), S(x)$ の形式がわからないから、寧ろ Pockels の如き假設をいれ、數量的に取扱つてゆく方が穩當であらう。

谷の中央の直上即ち $x = \frac{1}{4} \lambda$ の點では、到る處垂直分速度は零で、水平に氣流が流れてゐるが、ここに於ける氣温と湿度からして、流線に沿うては空氣は斷熱的の變化をうけるものと考へ、個々の流線の上で飽和に達する點を求め、其等をつ結びつけた軌跡で雲の限界を定めることにする。Bezold

の結果により、温度を次の様に假定する。

Y (米)	-1500	-600	400	1400	2400
海拔 (米)	100	1000	2000	3000	4000
温度	17.7°C	11.0	5.3	0.9	-5.0
湿度	8.2	6.69	4.59	3.03	2.60
温度	0.2	0.6	-5.1	-10.8	-14.6
湿度	2.92	2.17	1.64	1.19	0.86

雲の限界を定めるために流線の式は

$$e^{-ny} \sin \alpha x = -\frac{m}{bqn} + Be^{\alpha y} \quad (23)$$

或る一つの流線が山の腹の直上で y_0 ならば

$$B = \frac{m}{bqn} e^{-ny_0}, \quad y - y_0 = y$$

$$e^{-ny} e^{-ny_0} \sin \alpha x = \frac{m}{bqn} (e^{\alpha y} - 1)$$

随つて流線の式は

$$\frac{bn}{m} e^{-ny_0 - ny} \sin \alpha x = \frac{1}{q} \sinh \left(\frac{1}{2} \alpha y \right) \dots \quad (51)$$

$$\left(\frac{1}{2} \alpha y \right)^2 \ll \ll 1 \text{ ならば}$$

$$\eta = \frac{bn}{m} e^{-ny} \circ e^{-ny} \sin mx \dots (52)$$

山の曲線の式(26)と比較してみるに、その項に e^{-ny} がかゝつてゐる。これは或る一つの流線については定まつてゐる大きさで、 y_0 が大きく即ち高い處の流線程、この項は小さくなり、つまり高い處に始まるもの程、振幅がひしやげてくるので、山の頂に流線は集る傾向がある。

谷の中央で高さ y_n の點を過る流線について、 η の近似値を求めてみれば

$$\eta = -\frac{bn}{m} e^{-ny} - n(y'_n - \eta) \dots (53)$$

海拔千、二千、三千、四千米の點を過る流線を夫々、i. ii. iii. iv. 山の曲線に。符號をつければ、それ等の最高點は夫々 2940, 3610, 4330, 5100, 米となる。

前の表に掲げた温度と湿度とに基いて Hertz の表で凝結の起るべき高さを此等の流線及び山の表面について索めてみるに

	0	i	ii	iii	iv
風	930 ^m	1570	2730	4080	(5125)
冷	600 ^m	2070	2070	4130	5100

これで直に知れるのは、普通の大氣の状態では、冬でも夏でも、五百米よりも低い山では凝結は起らず、夏では六百から八百米までの山では、雲が千米から三千米の間に涌くので山にかゝることがない。又ivの流線の最高點は五千百米で、この流線について夏に凝結の起るべき高さはこれよりも高いから、雲の上限はこれよりも少し低い處にあるのであらう。冬には偶然にも一度一致する。

更に Hertz の表によつて、是等の流線に沿うてゆく湿つた空氣の、每一町の中で凝結する水蒸氣の量は

	0	i	ii	iii
風	2.85	2.42	1.22	0.26 gramme
冷	1.5	0.45	0.34	0.14

谷の中央の上で高さ h に始まる流線に沿うて、 x に到るまでに凝結する量を $g_x(h)$ 、 h の點では

空氣の密度で、水平分速度 u 、 x の點で雲の上限に丁度交る流線が谷の中央で高さ h にあるものとする。

雲の始まる處から x までに、巾一米の底面の上に、一秒間に凝結する水蒸氣の總量 G を瓦で測るとして

$$G_x = \int_0^h \rho u' g_x(h) dh \dots \dots \dots (54)$$

一秒間に x 點で、一平方米の水平面に降る雨量は

$$W_x = \frac{\rho G}{\rho x} \dots \dots \dots (55)$$

最大降水量の地點は、夏では $x = 1 \text{ km}$ 、中腹との間にあつて、降水量は $a \times 2.2 \text{ mm}$ 、冬では $+ 2 \text{ km}$ 、中腹との間に $a \times 0.75 \text{ mm}$ となる。

雲が風とともに漂ひ、雲とともに氷や水滴の運ばるゝので、風向きにあたらぬ山腹にも降水はあるが、この減少の度合は、前の一定の厚さの雲の層があると假定した場合よりも少ない。

以上 Pockels の論文を普延して長々と論じ來つ

たことも、顧みれば寔に不十分な點が多い。更に精細に亘つては熱力學的の考察をもつと充分に加味したい。Hertz の表を用ふる場合に、攝氏零度以下の氣温にて凝結するものは、直に氷片となると考へてゐるが、少し氷點下の間は、氷とならずに生成するであらうし、又凝結した水はすぐさま雲から落ちると考へ、雲とともに氷などの運ばるる雲の状態を省いてはあるが、是等はさして此の論文に變化を來さしむる主眼ではない。

此の推理の結果として、次の結論が眞に重要な事であり、又これは事實によく適合するのである。

一 風向きの山腹に降水量の極大に達する點がある。

二 降水量には山の絶對高度よりも傾斜が重に關係する。

然しついでに Pockels が補遺として述べたる如く、此の計算は長週期に亘りたる降水量の平均値に適用さるゝものではなく、夫等に關しては、實驗式を一々に個々の地點について導くべきである。

Hill は India の雨量 h にか、Schreiber は Sachsen

にての實驗式を發表したが、前者は高度の三次式、後者は一次式で表はさるゝが、何れも土地の傾斜を考へないが、實際は傾斜の影響が大なるものである。

Hüner は三百米以上の地點にて、土地の傾斜を

$d \cdot \text{高距を } h \text{ (米) で表はす時、年雨量 } R \text{ (耗) は}$
 $R = 793 + 0.414 h + 381.6 \text{ tga} \dots \dots \dots \text{ (56)}$

で表はされる。しかし注意すべきは、 α が直角なる時、降水量は ∞ になる。これは用ふべき極限を越えて論じたからで、總じて實驗式を用ふる場合、その適用を誤らぬやう、吳々も注意すべきである。

翻つて筑波山について、佐藤順一氏が氣象集誌第三十年八號に掲げたる論文により、明治三十五年より四十三年に至る九年間の結果につき、山頂、中腹、山麓に於ける年平均總雨量は

山頂	海拔六七〇米	一四一・七・四耗
中腹	二四〇米	一五三・六・九耗
山麓	三〇米	一二九・四・七耗

明に中腹に最大降水量の地點のあることを示してゐる。

主として理論的の、研究に立ち入つて、個々の現象の原因を及ぶ限り究めたいのが、この一篇の目的であるから、統計的の數についてはこの佐藤氏の論文を參看せられたい。

然し以上の議論は全く Toekels の論文に捕はれて、僅許りの普延の外、何事新らしき點を認め得ないのは、résumé とは云へ、吾乍ら恥づかしい次第である。

Sur Parnason mi foje suriri intencis, sed la Parnaso estis jam pena; pri lauroj mi foje songhis, sed anstatau lauroj mi trovis dor-mojn; en korojn mi enpenetri foje penis, sed la koroj estis fermitaj.

—S. Schulhof

あゝ顧みれば益々吾等の知識の乏しく、數理の力の遠く及ばぬのが嘆かれる。吾等はバルナススの山に杖ひく詩人ともなつて、あるがまゝの自然の慈母の懷に、安らかに寝る赤子の心に還りたい。

遙なる地平の外の山の影
 偲びてよれば落葉するかも

(伊藤徳之助)

山の物理學補遺

一、山脈と降水量（補遺）

山脈と降水量の分布との關係についての、大體の理論は Pockels のによつて説明さるゝが、これを述べた所以は、一般に冷たい山にあたるがために、空氣が冷却されて雨が降ると考へてゐる謬見を破るのにある。勿論冷たい山體に接する空氣は、冷却さるゝには相違ないが、それよりも地形の影響が大なのである。地形に強ひられて上騰する空氣は、そのために斷熱的膨脹をして、自ら冷却し遂に飽和して雨と降るので、山によつて冷却さるゝは重なる原因ではない。

扱、最後に佐藤順一氏の筑波山に於ける降水量の調査に基き、年降水量の九年間の平均値より、明に中腹の降水量は山頂のよりも、亦山麓のよりも大なることを知つたけれども、普通考へるやうに、これをもて見に Pockels の論を證とすることは適當なるものではない。

多くの既知の論文や書籍に於ても、山脈と降水

量との關係に於て、風向を考にいれない降水量によつて Pockels の論を是非して、前と同じ弊に陥つてゐる。

勿論、山の中腹に於ける降水量の大きいことは、その統計の示す通りではあるが、Pockels の論には、風向が見遁さるべからざる要素をなしてゐる。つまりは山頂を吹き越えてくるとき、風上の山腹に多く雨を降らしてしひ、且つ下降氣流の温度の上昇によつて、風下の山腹には殆ど雨が降らないから、降水量の大部分は、風に向つてゐる時にあつたものと云ふことを、暗に許容しての結果、風の方向を考にいれず、單に數字の示す降水量からして、これを Pockels の論の證としてゐるのは、殆どすべての人の辿つた跡である。

然し、眞に彼の論を論證せんがためには、風向きを區別して降水量の統計をとり、そして山との關係を見ねばならぬ。

東京帝國大學理科大學に於ける寺田教授の、地球物理學の演習に於いて、數年前、小須田勝造、

二見良平の二氏が「筑波山に於ける降水と風向と

の關係に就て(氣象集誌第三十四年六一五頁)調べられた。

その方針は明治三十六、七兩年の報告に基き、四時間ごとの降水量を計算して、山頂の雨量Gより中腹の雨量Mの多い場合の回数 n_1 、又MがGより小なる回数 n_2 として、これが風向により如何に配布さるゝかを調査した。

風は物理的の量では vector で、向きと大きさと方向(方向 direction と、向き sense とを區別してゐる)との三つで言ひ表はされなければならぬ。よつて、四時間の平均風向を求めるときは、風向と風力とから、vector として計算せねばならないけれども、それは非常な勞力があるので、この研究に於ても、繁雜を避くるために、方向のみの平均をとつて風向の平均とし、又中腹に於ける風の観測がないので、山腹のものによつて、中腹も山頂と合じ風向であると考へて調べねばならなかつた。

普通舊來の観測の風向の報告をみるときに、特に著しいのは、心理的の錯誤が多くて(氣象集誌

三十二、三、四年参照)、舊來の観測をそのまゝとり入れることは頗る危険であるので、十六方位のうち、ひきつゞいて三つの方位に相當する量をABOとすれば、そのうちの中間の方位に當る量はRでなくて、 $(A+2B+C)/4$ として計算したのである。

雨が降ると降らないに拘らず、或る方向の風が吹く頻度をNとするならば、風が吹いたときに、山頂、山腹の何れにも、又は何れか一方に雨の降るべき期待、即ち確率(昨年になつて probability, Wahrscheinlichkeit と云ふ言葉を確率と譯すべきことを理科大學教授會で定めた)は $\frac{n_1+n_2}{N}$ に比例する。

扱、 n_2 n_1 が1よりも大きいことは、山頂の降雨が中腹よりも多く、1よりも小さいのはその逆を示す。その結果によれば、 $\frac{n_1+n_2}{N}$ は、北西の風の時最少で、南と北東との間の風のときに最大である。これは同じく寺田教授指導のもとに横田、大槻兩氏が調べられた "On the Distribution of

Cyclonic Precipitation in Japan” (東京帝國大學理科大學紀要第三十七冊第四編) によるに、本邦各地に就いて、低氣壓の中心の位置に對する降水の確率の調査の結果、筑波附近即ち氏等の所謂 P_4 の區域に於て降水の頻度が最大に達するのは、低氣壓の中心が北緯三十二度三十分と三十五度、東經百三十七度三十分と百四十度とに圍まるゝ區域に來るときであつて、其の時は降水を九十パーセント迄豫期し得るのである。

其の時の低氣壓の中心の位置は、筑波山の南西に當るために、筑波山頂の風向は、これと四十五度乃至直角に近い南又は南東の風が吹き、そのとき $\frac{v_1 + v_2}{2}$ が最大になるのは當然である。

前に述べた通り n_2 n_1 が 1 よりも大なるは、山頂の雨量が却つて中腹のよりも大なることを示すのであるが、兩年を通じて、北西より南をへて南東に到る半面に於いては、1 よりも大であつて、反對の半面では 1 よりも小である。筑波山にては南面より吹く風に對して、山頂の雨量が中腹のよりも大なる回数が多いのである。

よつて寺田博士は Pockels の理論に設けたる多くの許容し得べき假設が、場合により適應せられないためであらう。最も著しくは孤立せる山頂の風上より風下にかけて現はる Hi denisswolken のある場合の如きは、風力が弱いと假定して、雨滴は直に直下に降ると考へたことゝ矛盾し、孤立せる峯にては、風上の山腹のために上昇せる風は必ずしも再び風下に沿うて下降することも要しない。更に筑波の中腹觀測所は、山頂觀測所の略南にあたれど、筑波より十三塚峠を連ぬる峯に對しては、南東に走る山脈に半面を圍まれたる如き位置にあるがために、中腹が風下に當る場合に峯に落つべき雨が、風速の大なる爲めと、渦流のためにより、風下の中腹に吹きよせらるゝことあらうと云ふ御主意である。

然しこゝに少しの疑問の存する餘地がある。前の結果にては果して Pockels の議論と矛盾するかどうかは斷じ得ないと思はれる。何となれば、Pockels のは降水の絶対量についてとあつて、山頂の降水量が中腹のよりも多い回数が縦合多いにもせよ、

必ずしも中腹の降水量が山頂のより少いか否かは決し兼ねるのではあるまいか。それを決する爲めには、二點の降水量の差の絶對量を風向きについて考へることが必要であらう。

つまり風向を考察にいられて降水量を分類して、山頂と中腹と比較してみたいのであるが、これは中々根氣のいる仕事である。とはいへ Pooler の論は過信すべきものではない。寧ろ吾々には、此の如き概念的の取扱ひよりも、統計より歸納することが必要でもあり、又さうあらねばならない。降水量の外に降水確度（術語の定義は岡田博士「雨」二八八頁参照）や比較率等が、或る地點の降水の性質を云ひ表はす要素であるが、至つて材料に乏しいので、これも後日の研究に譲り、たゞ一寸の暇に計算してみた、上高地と御岳（木曾）の降水確度を記して一と先づ降水量に關する筆を擱く。然し是等は左の材料によつたとは云へ、観測の期間が至つて短いものであるから、餘りに信をおいて、應用を過つては困る。

材料 上高地温泉場氣象報告（大正元年）

上高地温泉氣象 (大正二年)

御嶽山頂氣象報告 (明治四十四年)

☒ 上高地 (明治四十五年、大正元年)

降水確度	七月	八月
降水密度	三二八	一三・六

降水確度	五月	六月	七月	八月	九月
絕對降水確度	三	三	三	三	三
總降水時數	三六	三六	三六	三六	三六
平均降水時數	一七・三	一四・八	二九	一四・四	一四・九
平均降水日數	一九・六	一六・〇	九九	二四・九	二一・三
平均降水時量	一・〇六	一・〇九	〇・八二	一・七四	〇・七

☒ 木曾御嶽山頂 (明治四十四年)

降水確度	八月	九月
降水密度	四二・九	二二・九

(伊藤徳之助)

原口林學士の「赤石白峯山脈縱

横記」を讀む

題して赤石白峯山脈縱横記といふ、予は必ずや著者が此二大山脈を縱横に踏破してこの快著が成つたものと信じた、そして偉いことをやつたと思つた。著者は林學士である、山には深い縁があるにしても、此二大山脈を縱横に踏破した人は、數多い我日本山岳會の會員中にも未だ一人として知られて居ない今日、隠れたる登山家とも稱す可き著者は既に「赤石白峯山脈縱横記」を公にする程、此二大山脈を縱横に踏破してゐるのである、えらい事をやつたものだと先づ本書の表題を一見して驚嘆したもの、獨り予のみでは無かつたであらう。然るに其目次には、白峯山脈縱走記、赤石山脈縱走記、赤石岳登攀記、三峯川水源を探るの記、鹽見岳仙丈岳登攀記の四項を有するのみで、夫も謂はゞ此二大山脈の北半に限られてゐるのは、合點の行かぬ次第である。さりながら著者は其目序に於て「赤石山系を跋涉すること茲に四年」と書かれてゐる。

四年の歲月があれば、赤石山系如何に廣大なりとも、縱横に踏破することは敢て難事でない、これは著者が別に考ふる所あつての事かも知れぬが、それにしては表題が穩當でないと思つた。然るに高山と其植物なる項に「私が赤石山系を歩いたのは、嘗て白峯三山を縦した（走字脱歟）のに初まり、次に湯島より新澤峠を超えて井川を溯り、惡澤岳より縦走して赤石山腹に行つた事が一度、次に仙丈岳より池口岳附近に至る赤石山脈一帯の森林を調査した事が一度、都合前後三回に過ぎないのである」と書いてあるのを見て、上掲の目次が四年間跋涉のすべてを含むものであることを知つた。是に於てか予は縱横の二字に驚嘆した自己の迂愚を想ふて苦笑せざるを得なかつた。本書が白峯赤石兩山脈の一部を縦走し一部を横斷したる記事を載せたるの故を以て、「赤石白峯山脈縱横記」と題したものとすれば、縱横の二字が此場合斯る意味に解する能はざることば、學識ある著者が知らない筈はない事と思ふ。徒らに時好を趁ふ無責任なる出版物の嘲に倣ふことは、著者の爲に深く

惜む所である。

予は始め著者が白峯赤石兩山脈を縦横に踏破したことを信ずると共に、林學專攻の士であるから、其山岳觀は頗る傾聽す可きものがあるに相違ない、殊に赤石山系は森林に富んでゐる、この人にしてこの山系を探らば、所謂人と山と其所を得て、著者獨壇の舞臺と稱するのは少しく無理があるにしても、地理學者、地質學者と並び立つて、一方を引受けるに充分なる花形であることは疑ふ餘地がないから、其専門の科學的觀察は蓋し他人の追従を許さない獨特のものがあらうと信じた。著者の專攻が林學にあることを知る以上、これは決して理由なき期待ではなからうと思ふ。又著者に取っても此機會を利用して、未だ世に知られない大深林の林相や其景貌やを叙述するのが最も得策であることは言ふ迄もないことで、讀者の享くる利益は頗る大なるものがあらう。然るに著者は何故にか軽く筆を走らせて、素人の吾等にも氣の注ぐ程度のことしか書かれないので、描寫のゆたかな然し普通の紀行文と化したのみならず、登攀

の參考としては、時間や踏查地點及地形等の明示が極めて不充分である。縦横の二字に欺された予の失望は、之が爲に更に甚大を加へた。予は著者が一月半に亘つて林内或は山嶺を跋涉して、仙丈岳より池口岳附近に至る赤石山脈一帶の森林を調査し、而も夫が大正六年度であつて、尙ほ記憶に新であるを稱するに拘らず、この大紀行を本書より除外したことをかへすゝも遺憾とする。然し斯様な期待や希望は、他人の入らぬお世話であらう。

著者は本文に入るに先立つて、「赤石山系の地理的關係」及「高山と其植物」なる二項を設けて、赤石山系の地理地質を説き、其高山植物に就て記載してゐる。周到なる用意と稱したのであるが、これは勿論初學の人を教ゆる爲であつて見れば、其爲にはも少し廣く諸書を涉獵する必要がないであらうか、さもなければ反て初學の人を誤る恐がある。「赤石山系の地理的關係」を見ても、九頁の赤石山系構成説の如き、三疊紀説と白堊紀以後或は第三紀の初期説とを掲げたのみでは、充分とは

いへない。尙ほ他に原成構造と其成生後の後成變形とに區別して論ずる學者もある、即ち古生層の褶曲に伴ひて古期花崗石及片麻岩の噴出ありしものと、此時期を以て原成構造成生の時期と看做し、恐らく三疊紀より後ならざる可しといふのである。そして小黒川の白堊紀水成岩や赤石山系の東及東南麓に露出する第三紀層は、この原成構造

の成生後、白堊紀の末葉より第三紀に亘りて起れる造山壓力の爲に褶曲したものであるといふ。予は寧ろ此說に賛成したい。十頁の「再說赤石山系は殆んど全部水成岩より成り、局部に花崗岩の噴出がある。而して地質學の所謂火成岩は毫も含んでゐない事を」といふも、早川に露出する玢岩輝綠岩の岩床は、無論火成岩であるし、伊那山脈の片麻岩も、此岩が片狀を呈する古期噴出の花崗岩であるといふ說の成立する限りは、赤石山系に毫も火成岩を含んで居らぬといふには、古期火成岩と區別する爲に、新火成岩とでもしなければなるまいと思ふ。十五頁に北澤峠から野呂川に沿うて下れば、左手の駒ヶ岳山脈から出る幾多の清流は、

花崗岩の白砂の上を流れて來るやうに書いてあるが、駒津嶺からゴロ澤の頭（高嶺）に至る間の山脈は、古生層から成つてゐる、花崗岩ではない。同頁に「同じ花崗岩から成る鋸岳を作り」とあるも、鋸岳は矢張古生層の山である。而も是等は殆んど周知の事實であつて見れば、著者の不注意なることは免かれない。

花崗岩の山からは美しい水が出るに反し、古生層の山は一雨一雪毎に崩壊し、爲に河水が混濁すると説く著者は、二百五十頁に於て、三峯川の水が常に濁りを持つのは、其の一支流なる黒川の上流に於て、風化作用に依る花崗岩の崩壊が原因であると主張するのは、何やら自家撞着の様に思はれる。三峯川もこれで宛を雪がれたと思つて安心するであらうか。但し予は「三峯川の水が常に玻璃の如き透明を保つ事が出来ないで多少の濁りを持つ」といふことを裏書するに躊躇せざるを得ない。

「高山と其植物」に至つては、其引用の所論多くは舊說にあらざれば謬論であつて、著者に比すれ

ば更に一層の薄學淺識なる予の如きすら、これは餘りにひどいと思ふことが少なからずある。今一々之を例示することは其煩に堪へないから、予は武田博士の著「高山植物」を抜いて予の言の證左としたい。要するに此二項は或は初學者を誤るもの大ならんことを恐るゝものである、寧ろ無くもがなと思ふ。

著者は赤石山系の御花畑の美を賞揚して、其山容の怪偉と共に「確に如く者ぞなき」と謂ふてゐる（四十一頁）。單に山容の怪偉といふ點からいへば、白峯赤石兩山脈の如何なる山も、到底槍穂高の敵ではない。御花畑の美觀も、紅い花——殊に大櫻草や白山小櫻のやうに大群落をなす——の種類に乏しい白根赤石の諸山は、飛驒山脈の北部に於ける御花畑に比して優つて居るとは思へぬ。赤石山系の特色は、飛驒山脈并に此山系のどの山にも共通する所のある、つまり高山には普遍なる山容の怪偉とか、御花畑の美觀とかいふもの以外に儼存してゐることは、此兩山脈を跋涉した人の容易に合點し得る所であらう。

白樺は普通二千尺から六千尺前後の高所にしか生じてゐないやうである。著者は偃松帯の直下に生じ若しくは夫と混生してゐる天狗樺（田代方面の稱呼）を白樺と見做してゐるらしい（三十四頁、八十九頁、百三十頁其他）。天狗樺は樹幹概ね屈曲して枝葉共に強硬であるから、樹皮の色を見る迄もなく、優美なる白樺と相違してゐることが判る。

尤も百八十七頁には「偃ふ様な白樺の幹に腰を下した。此の邊に群生する樺は正確に謂へば、たけかんばんといふので」と註釋してあるが、予の見た所では、此木は獨り惡澤岳の近傍のみならず、白峯赤石の兩山脈に亘りて廣く群生し、光岳の南方にまで及んでゐることは、池口岳附近まで踏査した著者の知らぬことはなからうと思はれる。惡澤岳のものゝみがたけかんばんであつて、他は白樺であるのか、植物學に就て知ること少なき予には判定し難い。又ヒメシヤクナゲを農鳥山の南の鞍部に發見した（九十一頁）やうに書いてあるが、ヒメシヤクナゲがキバナシヤクナゲやイハウメと共に密生してゐるであらうか、コメバツガザクラやミ

ネズハウならば知らず、ヒメシヤクナゲに至つては予は遂に斯かる地點に生ずるを見たことも聞いたこともない。序に希臘神話のアンドロメダは、其美を誇つた爲に母の怒に觸れて岩に括られたのではない。母のカシオペーヤが自分の美に誇つて、海のニムフ達よりも美しいと自慢した爲に、海神ネプチューンがニムフに同情し、高浪と怪物とを送つてエシオピヤ國を荒らした、神託に依るとアンドロメダを怪物の犠牲に供しなければ此難を救ふことは出来ないといふので、臣民の強請抑え難きまゝに、力なくもアンドロメダを岩に縛したのである。然しヒメシヤクナゲ即ち日光シヤクナゲは可憐であるともいへるが、あのさして見所もない而も悪臭を放つ黒百合に對して、著者が満腔の同情を寄せ、「汝を讚美する者は年と共に増加するであらう」(九十五頁)とあるのは、著者に倣つて「人間は諸種の事物を相對的に觀察する能力ある事を説く」心理學を少々拜借しても、ちと腑に落ちかねる。然し是は趣味の問題である、其所まで立ち入つて無駄口を叩くのは失禮であらう。

聖岳の標高は三千十一米突と明瞭に記載してあるに拘らず。夫よりも低い位置にある三角點の標高を擧げ(五頁)たのは、立山黒岳奥穂高などのやうに絶嶺の標高不明なる場合と違つて、當々たものといへぬ。農鳥山の標高一萬二百尺(九十六頁)も誤つてゐる。對五十二頁のスケッチに「鹽見岳より見たる蝙蝠岳と農鳥岳」とあるのは、スケッチの左半部を截斷して載せたものとすれば、農鳥岳の三字も當然削除す可きものである。百八頁に「西に山稜を迂廻する處に一峯あり、其名を荒川岳と呼ぶ。陸地測量部の地形圖には農鳥岳の名はなくて荒川岳と現はれてゐる。」と書かれたのは、恐らく日本の測量部の地形圖を指したものであるまい、同部發行の五萬分一大河原圖幅にも、二十萬分一帝國圖甲府號にも、農鳥岳は立派に記入されて、荒川岳なる名は決して現はれてゐないのである。或は著者の意は、三角點には農鳥岳の名があつても、此峯には農鳥岳の名はなくて、世間には荒川岳の名で現はれてゐるといふにあるかも知れぬが(これは予が好い加減に推量したので

ある、地形圖を前にして此文の意味を解し得る人は一人もあるまい)、聖岳が頂上より遙か下の三角點に其名を與へられても、三千一米突の地點が其最高峯である事實に變りなきと同じく、此峯より少し低いと思はれる三角點に農鳥岳の名が與へられても、其最高峯たるに變りはない筈である。白峯附近を再三跋涉して、山名の考定に苦心された高頭君は、地圖に大唐松山とある者が古くからの荒川岳であることを示された。農鳥荒川共に別個體の山名であつて、古來から存在する以上、著者が荒川岳の方が本名であつて、農鳥は例の殘雪に依て後に呼ばれた名であるかも知れない、夫が誠に洒落な感を與へるが爲に、今では其方を多く用ゐられるのであらうとの推測は、全然見當違ひである。著者は赤石山脈を歩いた時、携帶したバロメーターが不正確であつて、高距を斷定することの不可能なることを後に發見した際、其狂ひの程度を考察し、自己の推定を併せて大體の高距を臆測するの煩はしさを厭はぬ程、測量部發行の五萬分一圖に劃された毎二十米突の等高線に信頼し

ないのであるから、前記測量部の地形圖といふも、自己の臆測から作り上げたものと混同して、うっかり測量部云々と書いたのかも知れぬ。臆れぬ都留澤となり、北荒川岳と異名同山なる伊那荒倉岳が北荒川岳の南なる平らな山稜の上に新しく一座を構へ、白河内岳は廣河内岳に、廣河内岳は黒河内岳或は黒河内の北俣岳と改む可きを、依然として誤稱を存するなど、これが臆測圖たる所以であらう。唯可なり正確なる地圖の存する今日、何の必要に迫られて臆測圖を掲げたのであるかは、予の臆測す可き限りでない。

古歌に現れたる甲斐ヶ根の考證に兩三頁を費す程歴史に興味を有つ著書が、一時熱心な山岳研究者の間に重大視された、野呂田代川分水嶺問題を、宛然兒戲か、左なくば机上の空論でともあつたかの如く蔑視したのもあるか、事實の詮議もしないで、此の分水嶺が北岳から出て仙丈岳に續く様に論議された云々(百十六頁)と書いて居るのは、

「山岳」第五年、第六年頃の分を讀んだ。「者の眼からはむしろ滑稽に感ぜられる」。恐らく此の記事は地質調査所のか測量部の二十萬分一輯製圖を參考して、うる覚えの記憶から捏ち上げたものであらう。

百五十五頁の「近年行はるゝ登山の多くは、所謂日本アルプスを目的とするものであつて、殊に北日本アルプス即ち白馬岳槍ヶ嶽の連脈が、盛りの中心となつて居る様である。實際此方面は雪線以上の大分高い山々が連立して居る上に、景色も餘程變つて居て面白味も多い」とある記事中、實際此方面は雪線以上の大分高い山々が連立してゐることは、何を根據として書かれたものであらう。予は不幸にして著者以外の何人からも未だ曾て日本北アルプスに雪線を突破せる山の一座すら存在することを聞かぬ。若し果して著者の言ふ通りであるならば、それこそ景色も餘程變つて居て、面白味も多いに相違ないのであるが。

以上は本書を一讀したる際、予の目に止まりし誤謬の重なる者を擧げたるに過ぎない。是等の誤

は事實の曖昧である爲とか、著者の力の足らざるが爲といふやうなことが原因をなしてゐるのではない。本でも著はさうとする程の人に取つては、少しの注意と親切とさへあれば、所詮は眞面目でさへあれば、當然避け得らる可き性質のものである。近時登山の流行に連れて、山に關する書物が頻りに出版される、其多數は何等の抱負も何等の定見も何等の自信もない極めて不眞面目なものである、甚しきは全く營利的な一時の當て込み物さへ少なくない、而も皆羊頭を掲げて狗肉を賣らうとしてゐる。予は敢て本書を以て是等と同一視するものではないが、假りに本書を公にするに至りし心理状態にまで立ち人つて忖度するの自由が許されるならば、人格ある著者としての態度に就て少なからず疑惑を抱くものであることを忌憚なく告白する。紀行文と雖も世に公にする以上、慰み半分に書くが如きは排す可き惡徳である。

予は本書に對して初より文章の巧拙や、美的觀察の如何を穿鑿することを主眼としなかつた、随つて本書の長所に言及する能はざるの憾はある

が、是等は予の首肯し難き他の幾つかの疑問と共に暫く保留することにする。著者の諒恕を得ば幸である。

願みて予の言は恐らく矯激に失した嫌があらう、予はもとより著者と面識なく、又思もなければ仇もない、予を以て徒に著者を目の敵として喰つて掛るものと誤解されては困る、これ予の罪ではない、又著者の罪でもない、一に時弊の然らしむる所である。

終りに野人禮に嫻はざるの譏は、予の甘んじて受くる所である。妄評多罪。(木暮)

高山植物雜記 (一)

武田久吉

前々號にアガモノについて小記し、其の前の號にはシラタマノキに關して略記したが、斯様な亞高山帯に産する植物を初め、更に高度の低い所に生ずるものも除外しないで、嚴格に高山植物といふ意味でなく、高山に生ずる植物を廣く材料とし、

あれこれと思ひつき次第筆のまはり次第に、必しも名稱考定とか種類の區別とかに限らず、生態、構造、分布等種々な方面に關することを、順序なく一定の形式にも捉はれず、極めて雜然と記して見る心算である。誤謬や不確な點は遠慮なく御教示を賜らんことを希望すると同時に、多少なりとも同好の方々の参考ともならば幸甚である。

一 シラタマノキの學名。一千八百六十三年(我が文久三年)にミケル(Miquel)といふ和蘭の植物學者が、シラタマノキを檢査して、之を印度に産する *Gauletheria pyrolifolia*, Hook. fl. et Thoms. (此の名は後に *G. pyrolifolia*, Hook. fl. として發表された)といふ植物と同一種と考へて發表して以來、熱心に東亞の植物を研究した露國のマクスィモウウィッチ(Maximowicz)といふ學者が、一千八百七十二年に出版した論文にも之を採用し、其の他我が國一流の植物學者も從來一向無詮議でそれを用ひて居たが、一昨年シラタマノキについて本誌に記すときに、印度のものゝ記載を讀んで見ると、此の兩者は全く別種であることがわかつた。

即ち印度の種類は雄蘂の葯に二本の刺毛があると云ふから、四本の刺のあるシラタマノキとは違ふし、そのみならず、果實即ち肥厚した萼は *black* だといふからには、白玉どころでなくてクロタマノキである。さて然らば此の外従來記載された種類中、我がシラタマノキに當るものがあるかといふに、一寸見當らないから、予は之を新種と認めて、*Gaultheria Miyueliana*, *Fak.* として、ミケル氏の名を記念することとした。本種は本島中部北と北海道本島の山岳の亞高山帯に産する外には、未だ海外に生ずることが知られて居ない。

シラタマノキとアカモノとは共に同一屬に屬することは論を俟たないが、此の二種はあまり近縁のものではない。已に本誌上に圖説した通り、葉の形、花序の様子、果實の方向、體上の毛の性質は、此の兩者に於て著しく異つて居る。

二 ミヤマウスユキサウ果して白峯山脈に産するか。一昨年發行の矢澤米三郎・河野齡藏兩氏著の日本アルプス登山案内第一版一二八頁に、「本邦中此珍種（即ちミヤマウスユキサウ）を藏する寶庫六

あり、曰く西駒ヶ岳、曰く早池峯、曰く黒岳、曰く月山、曰く鳥海山、曰く白峯之なり。而して他の日本アルプスの諸山之を産するなし。」と記してある。さて其の中早池峯のものは予がハヤチネウスユキサウと呼ぶ別種で、黒岳のものは常のウスユキサウの小形のものらしい故、本會第十回大會の席上で講演した折はその二つを省いて、更に予が標品を所有して居る（此標本は第十回大會に出品して置いた）飯豊山と駒形山とを加へ、都合六つの産地を擧げて置いた（本誌第十二年第一號一〇二頁、尙拙著高山植物第一版三二頁、第二版四八頁參照）。處で右六箇所の内白峯は全く自身確信がなく、只他人の説をそのまま受賣りにすぎなかつた故、本年白峯山脈や赤石山脈の北部を歩いた時、充分注意してそれを索めたが、遂に真正のミヤマウスユキサウは一本も發見することが出来ず、只、折々ウスユキサウの小形のものを見掛けたにすぎなかつた。若し推測が許されるならば、ミヤマウスユキサウが白峯に産するといふ報告は、恐らく黒岳の場合と同様にウスユキサウの小

形のものを誤認してなされたもので、予は確證あるまで、之を自著から取除くこととする。随て拙著高山植物第二版八三頁に、ミヤマウスユキサウが砂岩の上にも生ずる様にしたことは抹殺することにする。尙ミヤマウスユキサウは羽前の朝日岳にも産するといふことである。

三 アラカハワウギはシロウマワウギと同種なり。去る大正二年八月初め、三峯川を溯つて荒川岳(鹽見岳)に登る途中、一種のマメ科植物を採集し、後これを已知の種類中一番近いシロウマワウギと比較して、種々の異點を認め、一新種として之にアラカハワウギと呼んだ。本年再度鹽見に登つた際、これが北荒川岳の方へ續く尾根の上に多量に生じて居るのや、尙仙丈岳、北岳、間ノ岳等で發見したものを採集して、前年採つた標品と比較したところが、所謂アラカハワウギの原標品は、只シロウマワウギがある特別の状態の下で變形したもので、予が該種の區別の要點として挙げた特徴の一部は、アンステイブルな性質であつたことと、又最も重要な點は牧野富太郎氏のシロウマ

ワウギの原記載に漏れたり又は誤記してあつたが爲にアラカハワウギは特立種と考へられたのであることが知れたので、最早アラカハワウギなる名稱は不用に歸してしまつたことになるから、速に之を訂正して、單に一のシロウマワウギを残して置くこととする。

シロウマワウギは初めて白馬ヶ岳で發見されたものではあるが、其の本據は赤石山系にあるので、南は魚無河内に迄及んで居ること、先年八木道三氏が採集して惠送されたことによつてもわかるのである(拙著高山植物第二版三〇頁にアラカハワウギとして記してあるもの亦シロウマワウギに外ならない)。赤石山系の是等の山と、白馬ヶ岳や鑓ヶ岳の間に他にも多くの高山があるに係らず、此の植物が未だ中間の地帯で採集されたのを聞かないのは寧ろ奇妙である。

登山案内者 (一)

會員及び同好諸君の雇傭ありし、登山案内者、人夫等に就て、其性情、登山の上手下手、強弱、熟路、賃金及び登山案内者、人夫としての感想等の詳報を賜りたし、適當にして必要の事項は此欄に録して後人の参考に資したく、一は彼等の進歩改善を促すの資としたし、昨今登山案内者の拂底、賃金の暴騰は、随分怪しげなる所謂「かけたし」の案内者ありと聞けり、善良なる案内者を賞揚し、不良なる彼等を驅逐するは吾人の勉めざるべからざる所なり、本欄は「登山案内者手帖」を交附するの前提として設けたり、識者の一考を得たし。

本欄掲載に就ては匿名にても可なりと雖も、本會へは必ず住所姓名を詳報されたし、後の調査に資したければなり。

◆大町登山案内者組合

大町登山案内者組合に就ては嘗て本誌に掲載したる事あり本篇は其設立主唱者百瀬慎太郎氏より高野幹事に寄せたる私信なりと雖も、其設立當時の事情等を録するは後人の参考となるべしと、此欄の初頭に出せり、同組合の發展は一に百瀬氏に負ふ所多く、吾國唯一の「登山案内者組合」として其發達に期待する所多し、吾人は同志諸君の同情と助長を同組合の爲め望む。

本夏初めて試みました、案内者組合については、前にも御注意其他の御教示をお願しておきました、が、何分にもあつした労働者の多勢を相手の仕事ですから、小生などが考へる理想的には參らず、規約だの心得だのは、ほんの形式に流れてしまひ、閉口いたしました。勿論規約など、改まつた形式はそのまゝに内容は從來の通りの同じ道を歩む譯ですから、今急に、規律的の行動もとれないも無理がないと存じます。

試みに
別紙規約について私の考へを申上ようと思ひます
(一)は單に大町在住の人夫丈でなく、平村(野口、大出等)も常盤村も其他(若し有とすれば他國の人でも)の土地のものでも大町を出發する登山者に附隨する人夫總てに當符めたいのであります。

これに付いては名目が大町登山案内組合といふので、野口邊のある一部の者から部落的感情を以て誤解されましたが、自ら分明する事と思ひます。

(四)主任相談役なども、秩序的な厳しいものではありませんが、主任として僭越乍ら今までの仕事の續きとして小生を自選した次第です、相談役としては案内者中の年功者から、大西又吉、伊藤菊十、勝野玉作、傳刀林藏の四名を選びました、四人共大町在任の者ですが、一人野口村から一人を擧げた方がいゝと思つてをります。

(五)の事務所を對山館としたのは餘りに自分の營業に結びつけすぎた様に思はれて變ですけれど此場合旅館としての對山館で無く小生の宅としての家名を印したものと理窟をつけねばなりません。之れは何とか變つた表はし方をしなければならぬと思ひます。

(八)は此三四年來の經驗から加へなければならぬと思つたもので、登山期中はいつも大町に人夫拂底して参りますので日々の旅客に割當てゝやる案内人夫に人知れぬ苦しみを嘗めます。所が往々

去年からの約束とか、手紙で金を送られたからといふ様な事情で嫌應なしに上高地や中房などに引張られて、その爲に登山客に對して面目のない事がありますからです。是は多くの登山者の方々からも同情して頂かねばならぬ事と思ひます。

(十二)はありふれた貯金思想の鼓吹といふ様な事をこゝに持つて來たまで、精々一年に壹圓五拾錢から貳圓位ではありますが、山に働く事によつて僅かでも積まれたといふ意識を彼等に與へたいと思つたのでした、これには約束通に履行しないものもありますし、その貯金帳に從來やつて來た貯金を加へた者などありますが、直接に此規約にとつては重要な項目ではないと思ひます。

(十五)の賃金が一番案内者自身にとつても、旅客にとつても、大事な事なので標準の定め方は餘程六ヶ敷しく考へられました、昨年までは、總て、均一だつたのですが、初めて山に入る人夫も、數年來の案内者も同一の報酬では、無理な所がある様に思はれましたので、一般の夏期養蠶家の雇人日當から比較して相當と認めた九拾錢を人夫に、

貳拾錢の差を付けて之を案内者にと定めました。明年も此通りに行はれるものと思ひます。此の外に例に因つて人夫の草鞋、食料、煙草(はぎ)の手當を頂く事になつてゐます。

こゝに困る事は一行の中に先達は一人丈であるべきなのが、其時の廻合せの都合で先達資格を具へると見做される者が二名以上附く場合に、何れが一行の先達たるべきかといふ事です、も一つは案内者の出拂つた後に、單に立山までの経験がある位の程度で、荷擔人夫が一躍して先達の任に當つた場合も規約通りにすると、高給を要求する様になる時等に起る、弊害を此夏経験いたしました。若しこれが個人々々に一定の資格が判然と區別されてをるものならば都合が良いのですが、現在ではお互ひの感情の上から行ひにくい事でありま

す。これには、案内者手帳の所持者が右の資格を與へられたものと見做す事の此上もない好都合を感じるのであります。

(十五)の(1)(2)は客と別れた後の場合です。

此外富山、三日市等から北陸線を直江津に迂廻して歸宅せしめる場合は日數に應じた賃金の外に汽車賃を惠まれてゐます。

(十八)の項目は嚴かしい文句ですが、加入者に何等かの特點といふ様なものが與へられてゐない限り、左程に痛痒を感ぜられない事かと思ひます、矢張り相當の名譽觀念に俟つより仕方がありません。

以上組合の規約としての各項について、御高教を賜りたく存じます。抹殺すべきもの、訂正すべきもの、追補すべき事等御閑の折、何卒御教示願ひます。

加入者の數は多きを望まず善良な集りにしたいと思ひます、本年の成績から名簿から削除しなければならぬものや、加入の勧誘をしなければならぬものがありますが、現在での加入者は左記の二十二名です。

伊藤 菊十	大西 又吉	勝野 玉作
傳刀 林藏	黒岩 直吉	松澤 由藏
佐藤 靜馬	松田 茂一	吉澤永次郎

心得としては

北澤 清志	北澤 儀一	宮坂 廣次
北澤 定治	西澤 淺一	神社榮太郎
宮坂 義衛	柳澤 國夫	福島今朝吉
西澤 彰	平林 廣惠	鎌倉 澄治
宮坂 良助		

一、案内者強力は純朴にして善良なる山人の氣風を重んじ、不徳義の行爲あるまじき事。

一、登山者に對しては出來得る限り親切丁寧を旨として其意志に背かず、總ての勞務に忠實なるべき事。

一、規定の賃金以上の暴利を貪らざる事。

一、山中に於ては家族的和樂をなし各ひか争ひ事口論等起さざる事。

一、先達は責任を自覺し、細心にして過失なき様注意を怠らざる事。

一、先達は經驗淺き強力の爲に、懇切に指導をなし、將來の後繼者として、良案内者の養成に勉務むべき事。

一、宿泊地はいづれも清潔を保ち汚穢を止めざる

様心懸け、後より來る登山者に不快の念を起さしめざる事。

一、迷ひ易き通路、或は叢茂き場所等には臨機の方法を以て目標、切開けを作り置く事。

一、濃霧或は暴風雨の歩行には絶えず旅客の傍を離れざる様互に呼應しつゝ行動をとる事。

一、山中にて偶然、邂逅せる他の登山組に對しては相當の敬意を以て之に挨拶を爲し、若し質問等ありし場合には、懇切に回答を爲すべき事。

一、仲間の中に負傷者、病人等生じたる場合には登山客に計ひ出來得る限りの方法を以て看護をなし、慰安を與ふる事。

一、濫りに樹木を伐採し、鳥獸を害し、故意に岩石を崩落せしめざる事。

一、善良なる大町案内者の名實を擧ぐる様心懸くべき事。

以上の様なものを會合した機會に注意して置きましたが、公表すべきものではなく、たゞ我々同志の誠めです。

九月三日に初めての會合を催しましたが、十五名ばかり集まつて、僅かばかりの、酒宴を開いて、盛んに山案内者氣分を發揮しました。案内にまごまごのいゝ會合でありました。私の要求は、夏期のみに限られずに平常も友誼的連絡が望ましいと思ふのです。が、夏の僅か一月ばかりの仕事ですから、常に顔を合せる機會が尠いのを遺憾に思つてゐます。彼等を結合させる方法としては唯物質的な手段をこらなければなりません、それ以上に精神的の連結を得たいと望むは仲々に至難な事であると思ひます、が、もしさうした事が幾分宛なりとも表はれてくれば、此上もない尊い仕事の様に思ひます。

十年記念號に於て御發表の、案内者手帳交附については、何人も、兩手を舉げて、賛成する事であり乍ら、儲實行の段になると、現在の各登山地案内者の情況や種々な事に、登山者の期待にそぐはない事情があつて、面倒な仕事になるではないかと考へられます。

『一般登山家が本手帳所持者に非れば、如何なる

場合にも、雇傭せざる時は……』などといふ制限は現在では絶對に行ひ難い事ではないかと思ひます。多數の登山者（それは限り無く）が少數のガイドを得べく制限的な註文は到底出来ないと思ひます。しかし之が白馬方面の様に、二日三日で交代し得る案内ならば例外と思ひます。大町地方の案内者は従來一と夏に一人の案内者が、三組若しくは四組を案内し得るにすぎません。

大町で今右手帳の交附をお願ひするとすれば大西又吉、伊藏菊十、傳刀林藏、勝野玉作の四名を先づ最初に近き將來に於ての第二候補者を黒岩直吉、佐藏靜馬、松澤由造、福島公朝吉等です、兎に角一二年は試みとして行つて頂き度く存じます、

暫て、手帳の價値について各自が有難味を感じる様になれば、その交附を自ら希望する様にもなり、案内者改善の手段として至上的な事が具體的に分つて来る事を思ひます、出来るならばも一つ、一般の案内者に會の方の名目の附いた、何品か（徽章若しくは代用のもの）が頂けたらそれを案内者志願の者に與へて、相當の能力を體得し得た曉に之

を手帳の所持者に推薦する様にしたいと思ひますが、御高意を承はり度く思ひます。昨日から雪が降りましたので、手洗鉢が凍つたり硯がしみたりして閉口します。

(六、一一、廿九 百瀬慎太郎)

◇越中立山村芦峯寺の登山

案内者(立山登山口)

會員雄山通季氏の報によれば、芦峯寺在任の登山案内者は大略左記の如くにして、併記の登路は嘗て通過したる事ある由なり、本年の賃金は「平藏」一日金二圓五十錢「春藏」金二圓二十錢他は二圓宛なりし由、然し平藏は昨年一圓五十錢なりしと。

佐伯平藏(四一歳)——小窓より薬師、鎗迄。穂高。

鷲羽より烏帽子。甲斐駒。針木より大黒。

酒井範一(二六歳)——大日より雄山迄。針ノ木より

り大町。

三川兼次郎(二十歳)——劔より薬師。赤牛より鎗

穂高。針木越え。白馬。

佐伯九郎兵衛(四四歳)——劔より薬師。赤牛鷲羽

針木越。

佐伯藤吉(三三歳)——大日より立山。針木越。

志鷹清之(三一歳)——劔岳より立山薬師。針木越。

志鷹安之丞(二二歳)——劔より立山。針木越。

佐伯傳吉(三四歳)——劔より雄山、薬師。針木越。

志鷹太治郎(二一歳)——針ノ木越。白馬岳。

佐伯春藏(三六歳)——劔岳より黒部五郎、薬師。

針木越。

佐伯八郎(三六歳)——劔、薬師、白馬岳、針木越。

佐伯伊太郎(三八歳)——雄山より五色原。針木越。

佐伯義雄(四二歳)——劔より雄山、五色原。針木

越。

佐伯國花(四一歳)——劔、雄山、五色原、薬師。

針木越。

佐伯理三(二八歳)——劔、雄山、五色原、薬師、

針ノ木より祖父、鹿島鎗迄。

佐伯善一(三〇歳)——劔、雄山、五色原、薬師。

針木より赤澤、鳴澤、祖父、鹿島鎗迄。

佐伯三九郎(四二歳)——劔より針木越。

佐伯經治(三〇歳)——劔より針木越。

佐伯福太郎(四四歳)——劔より赤牛、鎗迄。針木越。

佐伯軍花(三八歳)——劔より赤牛、鎗迄。針木越。

佐伯鐵次郎(四〇歳)——雄山より針木越。

講神孫七(三九歳)——劔より雄山。五色原、藥師。

三河兼次郎、酒井範一、共に年齢若く、將來平

藏、春藏等の後を受くべきとの事の由。

◇日光湯元と甲州丹波の案内者

◇日光湯元 大正五年九月調

長岡多一 三十九歳(大正五年)

温順、着實、頑強と云ふ程にあらざるも相當の重荷を負ふに耐ゆ、又木攀りに巧なり。熟路は白根、太郎、男體、其他湯元を中心として登山、舟行等をなし得る地は喜んで隨行す。料金(大正五年)は前白根一圓、奥白根一圓二十錢、太郎山一圓七十錢、男體山志津廻り中宮祠降り二日路にて二圓。普通の登路以外の徑路又は全然路なき尾根溪谷に入るを辭せず。湯元旅舎板屋等にて容易に雇入することを得。

池田勝次(俗稱宮川ノ「勝」) 年齢不明 奸詐、詭辯、誇言性。白根其の他の地理に通じ、且つ植物の名を暗んず。料金不明。旅舎にて雇ひ得。

得。

◇甲州 丹波 (大正七年五月調)

白木彦右衛門 七十二歳

温順、頑強に非れども多少の荷を負ふを辭せず、且つ歩調確實に急坂を登降す。元獵夫なれば丹波附近の山岳、殊に甲州方面の溪谷に通ず。日當一圓、丹波の旅舎野村屋にて雇ひ得。(武田)

火男火賣

大河内四磨

ときありて湖のごと静なり

又火の山と燃ゆる心を

ひとり笑む淋しきわれの性に似て

赤城躑躅の咲くはかなしき

静かなる山懐にひとりゐて

秘に胸の寶まもらん

かの山の彼方にぞ住め美しき

信濃乙女のつややけき髪

旅戀ふる夢にも通ふ初夏の

青紫の山の日光かも

君とわけ黒檜の山の峯によち

金色の御手うちもながむる

みはるかす信濃境の山脈なみの

うす紫にかすむ夕暮

雨はれて檜の葉おつる武藏野の

朝かゞやく秩父嶺の雪

たれこめし闇一きはに黒ずみて

黙もくし寝ねたる大淺間山

雪にうづむ飛驒の深山の岳鳥

雷鳥などをおもふ夕暮

精進湖の岸の夕に語らひし

懷おもひ舊はよし君二十にて

雨雲は低くたれこめ蓼科の

頂見えず信濃にいりぬ

東山西山えこと見えわかぬ

雨雲ひくき京につきぬる

近江國山岳登路表

海 抜

登山口より
頂上迄

登山口

伊吹山	四五四五尺	一里二十町	阪田郡伊吹村	上野
御池山	四〇九〇尺	二里一八町	愛知郡東小椋村	君ヶ畑
綿向山	三六六三尺	一里〇〇町	蒲生郡西大路村	北畑
鈴ヶ嶽	三六三八尺	一里一五町	犬上郡大瀧村	君ヶ畑
釋迦ヶ嶽	三六〇四尺	二里三五町	神崎郡山上村	杜葉尾
靈仙ヶ嶽	三五七七尺	一里〇〇町	犬上郡芹谷村	靈仙
比良山	三五〇〇尺	一里一九町	滋賀郡木戸村	木戸
巳高山	三〇四六尺	一里〇九町	伊香郡高時村	古橋
乗鞍ヶ嶽	二八五六尺	一里〇八町	高島郡劍能村	在原
比枝山	二七九九尺	一里〇八町	滋賀郡阪本村	阪本
七尾山	二二八二尺	〇里二三町	東淺井郡小尾村	相模庭
油日嶽	二〇九三尺	一里〇三町	甲賀郡油日村	油日
大神山	一九七九尺	一里二四町	栗太郡下田上村	森
金勝山	一八七〇尺	〇里二〇町	同 金勝村	荒張
小谷山	一六三四尺	〇里二六町	東淺井郡小谷村	伊部
笹間ヶ嶽	一四二九尺	〇里一八町	栗太郡下田上村	關ノ津
三上山	一四一〇尺	〇里一〇町	野州郡三上村	三上
賤ヶ嶽	一三九四尺	〇里〇八町	伊香郡伊香長村	大音
長等山	一一四五尺	〇里一四町	千石岩	
観音寺山	一〇九九尺		大津市別所	常樂寺

◎雜 錄 落合海軍屬死體發見の顛末

虎御前山 七二三尺 ○里一八町 東淺井郡虎姫村 中野
安土山 六五七尺 蒲生郡安土村 常樂寺
右の内比良山は一帶の總稱にして内には檜ヶ嶽、櫻ヶ嶽、堂滿ヶ
嶽、蓬萊山、銀杏ヶ嶽、打見山等有り。
(近江 馬場孫七)

落合海軍屬死體發見の顛末

一昨年七月下旬甲州破風山中に起りし大學生の
遭難と前後して、海軍屬落合道徳氏が甲信國境方
面の山中に入りしまゝ行衛不明となれることは、
尙吾人の記憶に新なる處なるが、其の遺骸は偶然
本年八月初旬、滿二年餘の風雨に晒されたる後、
前岳(仙丈岳)の頂上附近に於て發見されたり。次
に記す處の記事は、主として死體發見者なる寶閣
信考、小島一政、小寺駿吉三氏の報告を基とし、
それに他より得たる材料を加味して、其の當時の
模様の大略を記すこととせり。

寶閣、小島、小寺の三氏は、信州市ノ瀬に於て、
小松辰吉、小松久治、宮下修二の三名を伴ひ、八
月五日市ノ瀬を出發し、松島、岩入、桃ノ木を過
ぎて鹽澤(シホザ)に入り、密林を穿ち、やがて美和村、伊

那里村の界をなせる長大なる尾根上の、二〇八四
米突の獨立標高點に達したるは、午後二時過なり
しといふ。一行は尾根を傳つて、前地藏、中地藏、
奥地藏(二三七〇米突)を経、五時頃、三峯川の三
軒小屋の上に當れる大平の上に達して窪地に露營
されしが、其の夜は快晴にて、星斗爛熳、翌日の
晴天なるを示すが如かりしと。

八月六日朝六時露營地を出發して、前岳の頂上
を目掛けて攀ち上るや、西方伊那の平原を閉せる
雲は朝風と共に動搖し、天龍の流れは白銀の如く
に現れ、西駒は曙光を受けて青藍の色美しかりし
も、東北鋸岳、駒ヶ岳の邊は濃霧甚だ深く、降雨
の模様さへありしを以て、或は岳樺、深山榛を排
し、或は藪、羊齒を踏にじりて、只管頂上に向ひ
て突進する中、怪霧は早くも襲ひ來りて、尾勝谷
を埋め、三峯川谷さへ渾沌たる有様に變じたれば、
巨岩を乗り越え、偃松に足を奪はれつゝも猛進を
續行せしに、濃霧は全く眼界を鎖し、雨さへ降り
出すに至り、風は刻々劇烈の度を増し、正に暴風
雨に變じ終れり。

絶頂附近に在る釜と呼ばれたる岩小屋に達したる頃は、一行何れも全身盡く雨水に浸されて、手足の感覺殆んどなく、加ふるに強烈なる風は登山の不可能を思はしめたれば、絶巔を去る僅々二十間の地點に到達せしに係はらず、急遽鮫川の源をなせる所謂御鉢——前岳三大サーカスの最北のもの——に遁入し、偃松の海を泳ぎ切り、御鉢の底にて清水の湧出する凹地を横断せんとせる刹那、辰吉の注意に一行走りよつて見れば、かゝる無人の境に思ひもかけぬ學生靴と一振の剣と、尙其の傍には白き包と三足の草鞋の置かれたるなりき。位地は馬責場の東下、尾根より二三十町も下りたらん所にて、嘗て陸地測量部員の露營したることありといふ二坪許の平地なりき。

此處より數間下流にあたり、偃松の枝に引懸りたる黒き物體あるに、近づき見れば彼の刀劍の持主の死體にて、黒き洋服を着し、上に黄色の防水外套と思しきものを纏ひたるが仰向に打臥し、頭骸は落ちて脚下に横はり、肩よりは肩胛骨衣を破つて突出し、指は全く脱れ去りて、白骨の掌のみ

洋服の袖より出でたる、悲惨極まりなき光景なりき。體の大部分は衣にて蔽はれ、脚は膝立てるままにて脚胛を着け、中は白骨なれども、大腿の邊には枯肉尙残れるものあつて異臭を放てり。

腐爛に近き洋服の内隠しを検するに、革製の蝦蟇口にありて中には貨幣八十七錢九厘と、落合と刻める水晶の認印あり、よりて直にその落合海軍屬なるを確認するを得たり、靴の中には五萬分一地圖數葉ありて、之を開けば文字等歴然讀むを得可く、又外に曆一冊と針、糸あり。包の中には足袋一足とシャツ一枚を發見したり。刀は全長約二尺五寸、細身の直刀にして、金屬の部分は盡く赤錆となり居たりしが、鞘は糸を以て巻きこれに漆を塗り、柄には大雷神、熱田神宮、其他軍神の名と、爲軍人落合道徳君大正元年八月八十三翁謹作と銘ありて、明に落合氏の護刀なりしを思はしめたり。

斯かる内も暴風は少しも勢をゆるめず、雨は益降りしきりて、寒氣極めて激しくして、一行は落合氏の遺物全部を携ふるに由なければ、只刀劍、

認印及び貨幣のみを收め、遺骸はそのまゝに残して、峽流を走り下り、不動瀑の附近より再び陰鬱なる木立に入り、或は蘆を横断して、遂に北澤峠道に合し、赤川原に出で、六時頃戸臺に辿り着きて、同地第一の齋家といふ小松傳彌方に宿泊を許されて、同家に一泊し、翌日高遠を経て歸京の途につけり。

戸臺小松氏方にて傳聞せるものを綜合するに、落合海軍屬は一昨大正五年七月廿日頃諏訪を出發し、釜無山、鋸岳を越え、兩三日山中に迷ひたる後横岳峠をこえて戸臺に出で、小松傳彌方に一泊し、翌日同家にて求めたる蕎麥粉約二升、乾豌豆一升許を携へ、草鞋八足足袋三足を用意し、先づ東駒ヶ岳に向ひ、それより前岳に登り、白峯、荒川岳、赤石山を跋涉して、静岡に出づる豫定なりしと。同氏戸臺出發の際は甚しく疲勞せる模様にて、數十歩毎に水を飲みつゝ山に向ひたりといふ、戸臺にて尙一兩夜宿泊して休養せんことをすゝめたるも、強て其の好意を排して單身山に入りしものなりといふ。又かの護刀を愛すること甚しく、

常に座右に置きて瞬時もこれを手放たざりしと。同氏は尙北澤の小屋に眞柏探りと同宿したる形跡ある由なるが、それは恐らく前岳登山の前夜なる可し、而してこゝより國境を傳ふて登山し、數川の源に入り、彼の暴風に遭ひて終に不歸の客となりしものならんか。

本年八月九日頃落合氏親父は遺骸收容の爲め戸臺に來り、北澤峠に上りしもそれ以上に達すること能はず、死體は人夫をして山上にて茶毘に附せしめたりと聞く。

◇朝融王白馬へ 久瀨宮朝融王殿下には小檜山海軍少佐外一名の隨員と共に、日午後四時半松本市に御到着直に松本ホテルに御投宿ありたるが、二日朝八時二十分松本發同十時十分大町着夫れより自動車にて北安曇郡北城村四屋白馬館に御投宿、三日早朝白馬に御登山、峯の小屋にて御假泊、四日早曉絶頂を極めて御下山白馬館に御寄泊、五日午前十時三十七分松本市に御歸着の御豫定なるが白馬登山の案内は松本女子師範學校長矢澤米三郎氏承はる由(松本電話)(七、八、二、東、朝)

久瀨若宮殿下には三日午前五時御起床諸般の準備を整へ同七時に至るや北安曇北條村なる御旅館を御出發遊ばされたり御服装は純白に金ボタンの兵學校制服に紺の脚絆草鞋といふ凜々しき登山姿ならせられ勇躍して白馬嶽に向はせらる、天候頗る良好快晴の碧空にアルプス連峯總て其雄姿を現し殿下にも御機謙麗はし山麓の吉原小屋にて御小憩あり白馬尻小屋にて御畫餐を召させられ愈大雪谿にかゝらせらるれば銀カンヅキを着けて登らせられ夜は頂上の小屋に御泊りの筈、尙峰の御花畑は今や高山植物の満開期なれば殿下には非常の御満足にて矢澤松本女子師範學校長の御説明を御聞召され尙既に高山御研究もありし事なれば目前の壯觀にはいたく興味を覺えられし様拜したり(松本特電)(七、八、四、

東、朝)

久瀨宮朝融王殿下には三日午前六時無事白馬山頂上の小屋に御着相成り隨員一同にコーヒを賜はりたり斯て殿下には四日朝四時半御出發絶頂に御登攀の上太陽昇天の光景を御覽天皇陛下萬歳を三唱遊ばされ隨員亦殿下のために萬歳を唱へ夫れより再び小屋に戻られ朝飯を召し折柄風強くなりたれば鐘ヶ嶽への御登りは御見合せとなり比較的危険少き杓子嶽へ御登山四方の景色を飽かず眺められつゝ御下山大雪谿も無事に御下り頗る御元氣にて午後六時過四ツ屋の御旅館に御着に相成りたり五日朝早く同所御發直に中央線にて御歸京遊ばさるゝ筈なりと(松本特電)(七、八、五、東、朝)

◇白馬山今年の初登山 去る六月八日午前七時、四屋を出發し同勢六名、北條小學校長有賀氏同訓導馬場華洲氏、機具寫眞師及び橋詰氏と、余並に入夫丸山岩治、それと「コソ」といふ犬とに御座候、到る處殘雪の景色を撮影して午後一時白馬尻に着、瀬戸岩迄達したるに殘雪未だ深く、長走澤も長洞澤も雪のため埋められ、澤の上は東西南北自由自在に渡渉出來、常に登る事の出來ざる點に迄昇降することを得實に愉快に御座候、白馬尻小屋は雪に埋没して大巨巖の頭一坪許露出せし位に候平年八月上旬の雪

量より約四丈は有之候と存せられ候(多き處)少き箇所にては一丈は十分有之大雪溪の波紋更になく恰も白色のカーテンを延べたるが如く傾斜角も鋭く平均三十三度普通二十七度にして急なるは三十八九度緩やかなるは二十五六度越ビラ僅に十五六坪露出、天候は寫眞日和とも可申なれども技術拙なるため好成績を得ず、残念に御座候、越ビラよりは一面の雪にして、頂上小屋附近に雪なく、九十九草、雪割草開花致し居り、五月四日に降雪あり、其際打ち落されしものか青鳩、野駒の各一羽宛雪溪に墜れたるを拾ひ今高山館に納めたり(これは先月小屋材伐出のため登山せし人夫の持參せしものなり)何分遊びつゝ登攀せしことなれば頂上に達せしは午後四時に候、約三十分許小屋の損所を調べなごして下山に向ひ午後八時一同無事歸宅致候(北條村松澤貞逸氏報)

一、道路の修復は年々遂行し、路幅を擴め、諸所に道標を立て、案内者なくとも登山出來得るやう致居候。

一、小屋の増設は頂上へ昨年建設致候廣さと同じものを一棟増設の計畫に候(七月十五日迄に竣功)唯今工事中、ますれば頂上に七八十名は收容出來、白馬尻に三四十名は宿泊出來得るも存候。

一、兩所の小屋には常に番人を置き總ての食料品を備へ置き炊事萬端の賄をなし宿泊料及小屋料を徴收す。

一、人夫賃銀は他地方より非常に安しと旅舍より申され居り、さればきて一足飛に値上げもごうか存じ物價騰貴の今日なれば多少(十錢乃至二十錢)の値上げは不得事と存候食料品は二箇所の小屋に備へ置けば多数の人夫も必要なく、團體登

山等多くありたればきて不足を感ずるとあるまじと信じ候。

一、雪量は昨年より非常に多候。

一、本年登山隊の申込は、本郡地質調査會(七月廿日より)長野縣讀書會團體(七八十名七月下旬)横濱鐵工所團體(七月下旬)本日(六月十六日)迄のものに御座候。

一、昨年の登山名は約千三百名にして、本年は多少、増加致さんかと存候(北條村松澤貞逸氏報)

◇加資の白山山麓より 白峰から市ノ瀬温泉迄三里半の間は山道と云ひてふ、近來大に改善されて全く平地を行く如くになった。

白山頂上の宿泊小屋即ち室堂は平家作り間口二間半、奥行七間の建物で、番人及び案内者が居て萬事の周旋をするが目下まだ寢具の設備はない、旅客は皆市ノ瀬温泉で借りる。

案内人夫は大體左の通り

金一圓五十錢以上二圓迄 日歸人夫賃朝市ノ瀬温泉を發し白山を一周し即日市の瀬に歸着するもの、此人夫一人に付荷物四貫目迄携帯す、以上一貫目を増す毎に二十錢。

金二圓以上二圓五十錢 室堂泊り室堂に一泊し翌日市ノ瀬に歸着す即ち二日がりのもの。

金二圓五十錢以上三圓 室堂泊り別山泊り室堂一泊、白山及び別山を一周するもの。

並十五錢 入山料

室堂における休憩料は一人に付約五錢位宿泊料は一人に付金三十錢。

毎年石川、福井兩師範學校の團體登山の外、毎年博物に關する學者連が多く登山する、本年の冬季は市ノ瀨溫泉附近にて約二丈の積雪あり目下の氣温は白峰にて華氏七十四度、市ノ瀨地方では六十七八度位、雪は四月下旬には全部融解する、大正六年度の登山人員は約二千人にして宿泊人員は

市ノ瀨溫泉場

六十人

白峰村

二千三百人

登山者の重なる徑路は

1 白峰口 字白峰から市ノ瀨溫泉場社務所出張所を経て登山するもの

2 尾添口 能美郡尾口村字尾添を経て登山（尾添より白山頂上迄約九里）

3 石徹白口 福井縣大野郡五箇阪谷村字石徹白より登山別山を経て頂上に至る（嶮路なり大野郡勝山町より別山頂上迄約十九里別山より白山の頂上迄三里計二十二里、勝山―大野―勝原―下山―後辻―石徹白）

4 飛騨口 岐阜縣大野郡白川村字平瀨より約九里にして白山頂上に達するもの、又同郡莊川村より約八里餘にして頂上に達するもの何れも難路

女子の登山者としては昨年石川縣女子師範學校生徒の團體を始め五十名程ありたり、山開きは毎年七月十八日、閉山祭は九月十八日ミズ（白峰村役場報）

◇上高地溫泉場より 本年當地に於ける槍、穂高等の案内人夫は物價騰貴の爲一日全二圓五十錢以上三圓位を唱へてゐま

◎雜報

す、高直ですから成可案内者にして登山の便を圖る考へてす。

目下の申込（六月中旬迄）には獨逸人カウフマン氏外六七名、日本人の團體としては東京高師附屬中學校などです、昨年當地方の宿泊人員は七百人、登山者は四百人位です、此内婦人の登山者は二十三名（内六名外人）昨年の初登山者は金澤の第四高等學校生徒でした、宿泊料は本年は上中下の三種とし上金二圓中一圓五十錢下一圓さいふこさになつてゐます（上高地加藤惣吉氏報）

◇今年の富士山の物價 七月一日組合で決定した今年の御殿場口の富士相場は左の如くである（御殿場通信）

宿泊料 並一泊八十錢、半泊六十錢、特別席料一圓二十錢、並一夜席料三十五錢（一坪以内、半坪毎に六十錢増）並中食料三

十五錢、蒲團一枚七錢

食品類 飯一杯五錢、汁一碗五錢、赤飯一碗六錢、甘酒一杯四錢、冷飴一杯四錢、大福餅一個二錢、安倍川餅一個二錢、牡丹餅一個二錢、うどん一杯六錢、葛湯一杯六錢、コーヒー一杯四錢、辨當茶料一人分五錢、鶏卵一個七錢、正宗二合入一壘三十三錢、ビール一本四十五錢、並酒一合十二錢、サイダ一本二十五錢、牛罐大四十五錢、福神漬大三十五錢、焼印一判二錢、スタンプ一判一錢、草鞋上一足五錢、麻草鞋上二十二錢、並廿錢、笠一個八錢

強力賃 二圓（御殿場驛より頂上御鉢巡り往復二日間又一日登山も同じ）大宮口下山二圓、吉田北口下山一圓二十五錢、須走口下山五十錢

乘馬賃 御殿場より馬返し迄馬丁附片道一圓（以下一合目毎に

大略二十錢増)七合目迄片道六圓三十錢

駕箸賃 御殿場より馬返し迄一圓八十五錢、太郎坊迄二圓六十錢、五合目迄六圓十錢、五合目以上一合目毎に三圓十錢(人足三人附)

◇大和大峰山の昨今 洞川村から啓上 吉野大峰山の登山道路は稍峻峻であるが大正四年から着手された洞川、高野間の道路開修が茲二三年間に竣功する可なり登山者のために便利なものになる、山中にも目下公設無料休憩所を計畫してゐる。

本年の登山者重なるもの左の如し。

- 一、六月五日三寶院門跡四百名の團體に送られて入峰
- 一、來八月十五日聖護院門跡入峰の豫定はて多數團體隨行の見込。

一、本年中には木田川奈良縣知事登山親く視察の筈。

宿泊料改正 山上にある龍泉寺喜藏院、梅本坊、竹林院、東南院の各參籠料は昨年は大抵一人前一夜七八十錢位であつたが、今年は一圓以下のものはない。

重なる大團體 百名以上のもの左の如し

峰福組、露山、大阪組、御膳講、日榮講、螺貝組、萬歲組、光大日、東杉山講、ワラヤ會、足輕會、青遊會、峰一組、天日榮、龍山(以上大阪) 出世組(西の宮)寺屋(住吉)山三井組(池田)寶峰講、港山、明立、八大講、日朝講、門松(神戸)和光組、一心講(和歌山)車組(遊)大岩組(攝津)小笹講(伏見)遠藤組(伯耆)龍玉講(姫路)餉飯講(奈良)

本年の初登山者 神戸の八大講中去る三月中旬六名が十數丈の

雪を越えて無事登山した、前鬼村へ抜ける奥駈の登山も年々五百を越える程に盛んになった(洞川村阪口熊一氏報)

◇伯耆の大山登り 大山村の物價は比較的安いつもりですが、此山中迄時局の影響を受けて先づ今年に宿賃を左の如く三割の値上げに改正しました。

▲(一般個人につき) 一泊三飯(辨當付)一圓二十錢、一圓、八十錢、一飯 四十錢、三十錢、廿五錢

▲團體につき(標準なく人員數に應じ増減の事ある事は勿論である) 一泊三飯(辨當付)五十錢、四十五錢、一飯 二十五錢、二十錢、十五錢、水賃 三十錢、二十五錢

晴天(朝)五十五度―六十度(晝)六十八度―七十四度(夕)六十度(夜)六十度―五十五度

昨年の登山人員 宿泊人員概算 約一萬八千人

登山人員 約一萬人

内學生(殊に小、中)約二千人、青年團約一千五百人

本年の初登山者は二月十一日午前七時鳥取第四十聯隊の奥田隊長以下三百七十餘名の雪中登山で、當時山下の積雪約一丈、山上一丈三四尺、谷間には約二丈の積雪あり、雪は上の方一尺位は軟であつたが、以下は固く硬つて十字線にて階段を作りつゝ登り、晴天であつたが、水筒の水が凍つて用立たなかつたさうです續いて、五月十八日午前二時より鳥取師範の職員生徒等四十五名が登つたが、是も、雪のため下山道は大迂回をしたと云ひます。

大山登山の主要道路である大山驛から尾高、赤松を経て大山村に達する四里の中、從來粗悪な道であつた赤松、大山間は近年改修し

て約三間幅(處に依り五間又は四間)とし、傾斜も緩やかになり此處一箇月ばかりで竣功する筈であるさうするに、大山寺迄自動車運轉の計畫がある、それが出来ぬとしても馬車、人力車の通ずることになるでせう、横手から通ずる三備、作州街道、御來屋からずる汗入街道などはまだ改修されません、作州街道は最も悪く、唯汗入街道は御來屋に名和神社があるので往復が稍煩繁ですが、宇坊領から上は徒歩又は乗馬の外交通の便がありません、大山登りの案内賃は昨年七十錢を今年は一圓に値上げしました、案内の事業者は五六人、臨時に十名は大丈夫です、唯今のところ、村の常設旅館は十戸、其他大山寺九箇寺を開放しますから、可なり的人数は收容が出来ます、旅舎の總数は千二百程敷けます。

序に山中には賣店が四五軒出来て
 名物獨活(二十錢位)登山記念杖壘木製(五錢より各種)各種の木

地、箸、繪葉書、寫真帖、繪團扇類

を賣つてゐます、又當寺では夏季中所藏寶物を一般の縦覽に供することになって居ります、本年は昨年も施行せられた島根縣下各郡市に亘る青年團幹部講習會を八月上旬から再び開催されるのでせう人員は約四百人位の筈です(大山寺談)

◇日本アルプス北部の登山道 日本北アルプスの信州側からの登山出發點は大體に於て

- (一)上高地温泉(槍ヶ岳、穂高山、焼ヶ岳、乗鞍岳等)
- (二)中房温泉(燕、常念岳、天井岳、槍ヶ岳等)
- (三)北條村四ツ谷(白馬岳)
- (四)大町

◎雜 報

の四つに依らねばならぬ、就中、大町方面に於ける今年の登山者の雲集は全く凄じきばかりの光景で案内人夫で顔の賣れたものなどは皆冬の内から一時も約束済みといふ有様です年々開けて行く日本アルプスの登山道に就て目下どのやうな方面に迄一般登山者の足跡が伸びてゐるかといふことに就て大町を出發點としての目下の登山道のアルプス通りを作つて見ませう。

孤立せる火山型の山、若くは其他特別の場合を除く外、日本北アルプスにあつては、普く當筈めらるべき第一定義として「山へ登る」その第一徑路は「谿を溯る」のであるといふ點から、鹿島谷、龍川谷、高瀬谷の三大谿谷が等しく信州の北部安曇野に開口する、其關門に位する大町が登山に好適な出發點なりと斷定することは強ち我田引水ばかりではないと思ひます。

今日(六月十一日)迄に小生の手許に申込のあつた重なる先鋒は七月七日大町發、一高旅行部第五班(烏帽子、藥師、槍方面)第四班(立山、白馬方面)を第一登山者として慶應山岳會第三隊、第四隊、第六隊、第七隊、第八隊、第九隊、學習院山岳部、神戸三菱造船所有志一高(東京)二高(仙臺)三高(名古屋)四高(金澤)三高(京都)各山岳會、ザアーキユムオイルコンパニーのドント氏、エーステン氏等です、順序としては等の溪谷が導く各方面の山旅行、日本アルプス北部の登山道に就いて述べます。

(1)鹿島谷 爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、後立岳等より後立山嶺の縦走軌道に入るべきもの

(2)龍川谷 爺ヶ岳、針之木峠を越え立山山脈方面へ、蓮華岳より烏帽子方面國境主脈の縦走軌道に入るもの

(3)高瀬谷 烏帽子岳、五郎、赤岳より黒岳山脈へ或は鷲羽岳、槍岳、笠岳、薬師岳方面へ

右の徑路によつて入るべき旅行日程の主なるものを計畫して作つて見ます。

A 後立山嶺縦走

(一日)大町發鹿島川矢澤を溯り爺ヶ岳に到り(二日)爺ヶ岳を極め鹿島槍に至る(三日)鹿島槍北槍の懸崖を降り八峰の大裂罅を過ぎ五龍岳南腰に達す(四日)後立山に登り大黒嶺山一泊(五日)大黒發、唐松岳を経て不歸泊(六日)天狗、鐘ヶ岳を経て白馬岳に到る(七日)白馬下山大町着

B 屏風連嶺の縦走

(一日)大町發籠川谷白澤若くは扇澤より爺ヶ岳に登る(二日)爺ヶ岳榑小屋澤乗越を経て新越乗越に泊(三日)鳴澤、赤澤岳、スバリ岳を経てマヤクホ泊(四日)針木岳、針木峠蓮華岳を極め、籠川を降り大町着

C 針木立山方面

(一日)大町發、籠川を溯り大澤小屋泊(二日)針木雪溪を登り針木峠を越え黒部川平の小屋泊(籠渡し)(三日)温谷及び御山澤を溯り立山一ノ越に出て野營若くは室堂に降りて泊(四日)雄山、別山、淨土を廻りて立山温泉に降る

(イ)(三日)温谷より五色ヶ原に至り露營(四日)鬼ヶ岳、龍玉、淨土を経て立山室堂に到り泊

(ロ)(四日)雄山、別山を経て劍澤野營(五日)劍岳登山(長次郎谷に寄り)再び劍澤を降り池の平嶺山泊(六日)小黒部溪谷を

降り再び黒部本流に會し祖母谷温泉跡泊(七日)大黒嶺山に到り泊(八日)平川雪溪を降りて神城村飯田に出て、糸魚川街道を大町に歸る

(補)(六日)鐘釣温泉に至り泊(七日)黒部川に沿ひて愛本橋に出で三日市驛(北陸線)に到るを得

(ハ)五色、薬師岳方面(三日)平の小屋より温谷を登り五色ヶ原野營(四日)越中澤岳を経て數河乗越附近野營(五日)薬師岳頂を極め、太郎兵衛平泊(是より約三里越中有峰に到る)(六日)上の岳を経て黒部五郎に到る(七日)三俣岳を経て双六岳に野營(八日)槍ヶ岳坊主小屋泊(九日)上高地温泉着

D 蓮華烏帽子方面

(一日)大町發、大澤小屋泊(二日)針木峠を経て蓮華岳泊(三日)北高岳、七倉を経て東澤岳泊(四日)舟窪岳泊(五日)南澤岳を経て烏帽子岳に到る

E 烏帽子、槍の縦走

(一日)大町發、高瀬川を溯り葛温泉を経て湯澤泊(二日)アナ立尾根を攀ち烏帽子岳南腰部の野陣場泊(三日)三ッ岳、野口五郎岳を経て硫黄澤乗越野營(四日)鷲羽岳、蓮華(三溪)双六岳を経て硫黄澤乗越野營(五日)西鎌尾根を傳ひ槍ヶ岳絶頂を極め、梓川方面に降りてパッ平小屋若くは赤澤小屋に泊(六日)正午頃上高地温泉着

槍ヶ岳、穂高岳間の縦走は、北方立山劍ヶ岳の山稜縦走と並びて其惡絶なるを以て鳴つてゐるものですが、昨年の夏坊主小屋を出發して、穂高の諸峰を一日で上高地に着した大町案内者のレコード

があります。

下高瀬川各方面

(1) 高瀬川本流に沿つて湯股、水股の落合地獄の噴湯に到り水股より槍ヶ岳に到るもの(大町上高地間約五日)

(2) 高瀬上流、東澤を溯り燕岳、大天井、常念、上高地に到るもの。

(3) 東澤乗越を経て中房温泉に到るもの(大町中房間約二日)

以上の各項第一日は大抵、林道、歩道共完全であります。

それから宿泊地における小屋の事ですが、前に申上げた経験の内籠川入、大澤附近には昨年の夏出来たものがあり、従来の黒部川平の小屋等に依つて、針木越、立山登山のみならば途中野營の必要はなく従つて、天幕を要しないが、他は概れ此方面の旅行には天幕若くは其代用品として桐油紙大型のものを用意しなければなりません、黒部川の籠渡しに六月中に信野鐵道の後援で修理せられました。

上高地方面には馬場平に今年新に宿泊所が設けられて罐詰其他食料品の販賣計畫があり、白馬嶽は絶頂および白馬尻、大池等に昨年の夏新設された小屋があります、何分當地を出發する旅行は、前記の如く大抵五日以上の日数を要するものですからそれに應じて多數の案内者人夫を要するので、限りあるガイドの供給には全く困難してゐる始末であります。(信州大町對山館百瀬愼太郎氏報)

◇今夏の霧島

一、牧園驛から霧島温泉迄四里、數年前に開けた縣道に定期馬車

が通ふやうになつてから、温泉より霧島山の高千穂岳、唐國岳への登山者は可なり多くなりました、案内賃銀は一日八十錢から一圓迄、里程の近い處は五十錢以下としてゐる。

一、旅館は霧島温泉に三箇所(霧島館、高千穂館、榮の尾館等)數百人の宿泊が出来るやうな設備があります。

一、高千穂峰(噴火孔のある處)は霧島温泉から東に方り頂上迄三里それから南の下方二里半の處に霧島神宮それから、千里の瀑布を見て、大浪池から唐國岳に登り南に進んで、岳の北に方る山腹の白鳥硫黄採集所、賽の河原、六觀音等を見て温泉に歸る迄往復六里、一日行程に都合もよろしい、昨年は學校團體を除いて四百名の登山者がありました、三井家の令嬢なども其中にありました。

一、温泉の氣候は目下最高六十五度位極暑八十度内外です、雪はもうありません。(霧島温泉事務所報)

◇中房温泉より

實際を云へば一萬尺を出入せんさつある高山に對して路を平易につけやうといふのは誤りです、人力を以てしては唯迷はぬやう、危険でないやう修理する位が關の山で、實際は道路の改修さいふ程のものではありません。主として中房温泉で、昨年八月から始めて十月迄に作り上げた、今の程度の道があります、之を暫くアルプス巡回路と命名して置ませう、中房から燕岳、大天井、常念、二ノ股、槍澤等を経て上高地に到る所謂常念山脈の縦走路です。山中の小屋は登山者のために天國であるが、此樂しい小屋の開祖は信濃教育會、南安曇郡會などの團體で即ち前記の常念山脈中、二の股、槍の二峰に營まれつゝあ

る、此二箇所的小屋は極めて完全なもので、其營造費も可なり額に達してゐるが是には篤志家があるのです。その篤志家といふのは神戸の紳商である丸山盛一氏（南安曇郡豊科町出身）のことで、氏は世間の成金は一寸毛色の變つた此山中の樂園を作るべく建築費の一切を寄附したのです。そこで此小屋は既に見事に出来上つて、二の股小屋は小房温泉の持主である百瀬玄三松氏、槍の小屋は上高地温泉主が管理する事になつてゐます。二の股の小屋は百瀬氏が米、味噌、食器を常備して公德販賣法を採り登山者のために自由使用に任せる事とした、之は誠に面白い試みで、僕等は雙手を擧げて盡力した譯である、槍の方でも、是非始めて貰ひたいと思つてゐる、現在のところ、日本アルプスの登山者は、殆んど悉くが知識階級であり、紳士たり又將來紳士たる素質の人が多いのであるから必ず不正行爲や誤算などはあるまいと信ずる。アルプス巡回路、常念山脈の道路の完成と、宿泊設備の完整した結果、荷負人夫や、案内者を要する程度も非常に減じた譯で、先づ從來の三分の一を以て十分に事足らうと思ひます。併し、登山團體が時を同じうして澤山落合ふやうな事になればとても足りない、現在當温泉の常備的人夫は廿人位のもので、前以て申込みがあれば五十人位迄供給は出来ませう。人夫の賃銀は昨年の一割増（二人一圓五十錢）で一人の負擔重量は約八貫目として居ります。山の事は下界では、とても想像もつかぬものですが、今年五月に入つてから雪がちら／＼しました、山開きは例年七月上旬ですが、東京、神戸、仙臺、横濱、京都、大阪、名古屋等を主として各地からの申込は毎日必ず二三通は來ます（中房温泉百瀬

彦一（郎氏報）

◆槍ヶ岳を中心とせる登山路

中房口 中央線松本驛にて信濃鐵道に乗換へ、有明驛に下車して中房温泉迄五里、同所にて登山準備を爲し、第一日は燕岳、蛙岩、大天井岳を越えて東天井岳、二の俣の石小屋に一泊、第二日常念岳に登り一の俣の溪流より中山鞍部を越えて二の俣に下り、槍澤を溯りて、新設のバヤ平アルプス旅館に到るもの中房からバヤ平迄六里強 島々口松本驛にて下車、野麥街道を五里西進、馬車、自動車の便に依つて安曇村島々に達しそこより北澤林道に入り三里にして岩魚止の茶屋直に徳本峠を越えて上高地に入る、温泉場よりバヤ平のアルプス旅館迄山道三里、早朝島々を發すれば峠越しにバヤ平迄一日行程たり、バヤ平より槍ヶ岳頂上迄一里半 烏川口 信濃鐵道豊科驛若くは柏矢町に下車、一里にして西穂高村牧に出で此地で必ず案内者を雇ひ烏川の一の澤より登攀、牧より三里にして常念岳横尾通りの鞍部に出でそれより西尾通りを西に行き事一里弱にして東天井岳の二俣石小屋に達す、尙横尾通りの鞍部より直に梓川の上流一の俣に下り中山の鞍部を越えて二の俣に下るを最も近き槍ヶ岳登山口とす。

里 程 表

- 島 々 二 股 (一 里 半)
- 二 々 股 岩 魚 止 (一 里 半)
- 岩 魚 止 徳 本 峠 (一 里)
- 徳 本 峠 白 澤 渡 (一 里)
- 白 澤 渡 上 高 地 (一 里 十 丁)

山

岳

白澤渡——徳佐澤(一里)

徳佐澤——二ノ俣(一里半)

二ノ俣——バノ平(三十丁)

バノ平——槍ヶ岳(一里半)

バノ平——東天井(二里半)

東天井——大天井(半里)

大天井——中房(三里半)

東天井——常念岳(二十五丁)

上高地——明神岳(一里半)

阿房峠——白骨温泉(三里)

上高地——阿房峠(二里)

上高地——蒲田温泉(三里強)

阿房峠——平湯(一里十丁)

上高地——霞澤岳(一里)

團體としては矢張例年の通り高等學校、中學校等の山岳部が多いが本年は池上秀敏、満谷國四郎兩藩伯を始め、神戸の松昌洋行の一行が奇抜な登山をする筈です。昨年の登山者中には、阿部子、酒井伯、福島大將令息、福田眉仙氏などを始め婦人側では東京の西岡工學士夫人を始め、各國婦人女學生等十數名で、兎に角此アルプス巡回路が比較的登攀に容易である事を説明してゐます。常念山脈地方は昨年は降雪量が少かつたけれど、本年に入つてから氣温も例年より餘程低く、ために融雪量が少くて目下の積雪も昨年と畧同様であらうと思ひます、中房温泉朝夕の氣温は目下四十四五度を示してゐます。昨年の登山者は約七百名程ありました。

八月に入つてからの登山者が多い方でしたが、本年の申込を見て考へると、昨年よりは確に非常な増加だらうと思はれます(中房温泉百瀬彦一郎氏報(以上十項、大正七、八、一三〇、大、毎「旅」欄より)

◆海拔八千尺の冠帽峰

日本山岳會幹事 城覆審法院長談

此の程五十五歳の老軀を提げて海拔八千尺の冠帽峰に登つた城京城覆審法院長を旅館に訪問し登山の模様を聴くと、流石は山岳會の幹事である丈に冠帽峰に對する觀察も仲々深刻で一々見取圖を指し乍ら左の如く語る、冠帽峰に登る徑は朱乙温場から城町に出て更に天坪より熊谷嶺の麓に沿つて北下瑞に到り北下瑞から徑を左に採つて最終部落たる南下瑞に出るのであるが天坪より南下瑞迄は人間の通れる徑はあるけれど溪川を渡る處が多く折柄の降雨續きて多少困難を感じた然し彼の様な濁流岩を嘯む溪流や、險惡な徑も周到なる注意を拂ひつゝ辿つて行けば危險も少く且づ北河瑞河原から巔然として雲表に聳ゆる冠帽峰の姿の眺めては歩行の苦痛も忘れ一時も速く目的の山嶺へ登りたいと思ふのである、南下瑞より六つの丸木橋を渡れば愈々登山路となつてその附近は潤葉樹林を爲し漸次攀るに従つて植物の垂直分布が變はり潤葉樹林帯から潤葉樹針葉樹の混合林次に純針葉が林帯となつて林の中は石と苔許り、平地の如く雜草や雜木が生えないから樹の幹が苔むす石の間よりスクスク延び何とも云はれない清爽な氣分が追つて来る更に上れば針葉樹林が白樺を交へ終には純白樺帯となつて高嶺の風にいちぢくれた樹幹が一種の風致をそへて居る、而して其の

白樺の盡きる處は青い偃松帯であるが、他の高山に比較の偃松の少しいのは全く案外であつた、此の邊から所謂御花畑となつて樹木らしい樹木は一本も無く見渡す限り一面の花園である、私の露營したのには白樺を燃料にする關係から頂上より約二十三、四町下の白樺帯で日中は寫眞を撮つたり植物や岩石の標本を採集したり、夜は沖天に懸つた月魄を賞し莊嚴なる高山の月夜氣分を味はつたが、元來私の登山目的は植物採集や何かの學術的研究を爲す爲でなく山に登るごも其れ自身も唯一の目的であるから山に對する觀察も自然他の登山者と異なる次第である、冠帽山は鏡城乃至北下瑞方面より眺めるミナポレオンの冠つた様な帽子狀の峰が天空に聳立し其の左右に少し低い峰が宛然兩翼を張つた如て薄紫に霞んだ有様は莊大と云はうか、崇高と謂はうか全く形容の言葉が無い、然るに一日茂山方面へ廻つて冠帽峰を望むと至極平凡な山容で少なからず失望するが此れは附近の地勢が茂山の方が高く鏡城の方が低いからで隨つて冠帽峰の勾配は茂山側は緩傾斜、鏡城側が急傾斜になるのである。

斯の如く冠帽峰は高さに於ても姿に於ても亦植物の豊富なことに於ても他の高山に比較すれば敢て遜色を認めないが唯一つの缺點とも稱す可きは水質の悪いことで甚だしく風致を傷れて居る、普通の高山ならば溪間に下りるに清冽な水が涼々流れて居る、普通綺麗に濕はふて居るが冠帽峰の水は稍々滯濁し流に洗はるる岩石は尙跡色に染つて其れが天坪邊の下流にまで及ぼして居る此の原因は判然と解らないけれど多分水質に不純物を含有し其の不純物が岩石に附着して岳跡色を呈するのだからと思ふが何れにして

も山全體の風景を傷け且つ登山者は生水の儘飲用し得ぬ不便がある、夫れがら缺點と云ふより不便と謂つた方が適切かも知れないが冠帽峰は全くの處女山である丈けに登山の徑は殆んど無く纔に先年土地調査局の測量班や道廳員の登山した跡を探り乍ら攀るの處に依るご其れさへ判然解らない、搗て、加へて今年の如く降雨連日に亘つて溪と云ふ溪、川と謂ふ川が悉く増水し架けた丸木橋も流失して登山者の困難一方ならず、爲に或は激流を押渡り、或は徑無き山を峰傳ひに迂回する等登山の日程を變更しなければならぬことが往々にしてある、だから増水して危路を伴ふ部分例へば南下瑞から六本の丸木橋を渡つて登山路に入る附近は左方の山中に徑を開いて成る可く橋を渡らぬ工夫をしなければならぬ、今一つ不便なのは先達に適當した人間の少いこと、先達の服裝が登山的用意を缺いて居ることである、前者は種々な事情で少いのも已むを得ないが不適當の者も雖も登山者の指導如何に依つては或る程度迄有効に利用し得又後者は相手が貧困な朝鮮人である爲防突防水の準備をすることが能きない并て登山者は防寒用、毛巾、雨合羽の用意を爲し元氣を消沈せしめざる様注意しなければならぬ、此れは私の實驗から云ふので決して机上の空論ではない、論より證據私の登山中寒氣が増して先達がコンナ處に居つては死んで了ふから下山しやうではないかと危ふく先達に見棄てられる處だつたが毛布を一枚貸した許りで其の災難も免れた、先達は宜く指導し温情を以つて使用したから北下瑞に野宿した時には種々な便宜を計つて呉れた、處が徳孤ならず必ず隣ありで先達を可愛いがつたのが原因となり北下瑞一の物識り男が岩魚や鶏卵を持つて

ひ且つ其處から天坪へ引返す時、途中の危険な橋を私の體に綱を付けて渡して呉れた、斯ういふ男は登山者にとつて調法なものである故山岳會へ氏名を報告し尙ほ今後の登山者に便宜を與ふ可き様態々々頼んで来た、然し此處に注意す可きは先達の實銀を拂ふ際には以前の登山者の例に従つて決して多く遣つてはならぬ、如何きなれば朝鮮人は誠に付け上り易い人間で兎もすれば鳥目の多算に依つて登山者を善くも悪しくも待遇を變へる事が無いとも限らない、終りに一般登山者へ注意したいのは防寒防水の準備を遺憾なく整ふるは勿論食物は二倍に用意し天幕は燃料を自由に採取し得べき白樺帯に設け更に登山より下山迄は決して危険な行動を採らないことと之れさへ完全に守れば冠帽峰の登山は易々たるものである云々。(七八、三一四、北緯日報)

◇日本アルプスの露天學校 文學博士澤柳政太郎氏が主催にて來る廿一日から三週間日本アルプスの中腹へ日本アルプス露天學校と云ふのが創設される事になつた右に就て之れが主導たる長田文學士は語る『此の計畫は山の教育的利用を組織的に行ふと云ふので今度創める處は日本アルプスの中腹で海拔六千尺の中房温泉(南安曇郡有明村)を根據地として午前中は山間の林中或は閑靜な谿谷中で英語數學等を授業し、午後からは九千餘尺の巖其の他の諸峰へ隨時登山させ或は高山植物の採集や雄大な高山の寫生なさせる筈だが目下成城學校の生徒約四十名が参加する事になつて居る、元來此の種の計畫は一九〇七年獨逸伯林附近シヤロットンブルクで結核患者を收容して林間學校と云ふのが創始されたのが濫觴で其の成績頗る良好であつた詰果漸次歐米各國に流行し

露天學校として諸方で行はれ日本でも大阪邊で吉野山に行つた事があるが海拔六千尺の高山で行ふのは今度が最初の試みである。何しろ此の中房附近は殆ど羽織を要する位の土地で空氣が好い程度に乾燥して居る、由來空氣の濕度は身心を弛緩させるから教育の成績が擧がらない臨海學校などは此の點に缺陷がある信州人が比較的頭腦が明晰だと言はれるのも山が偉大な人格を作る言ふのも山の悠うした氣象的影響ではあるまいか、又山の光線は紫

外線が頗る強烈で體育上頗る有効だ、紫外線には非常な殺菌力があり近來淨水装置に紫外線を利用するのも全く此の殺菌力を利用するので日光消毒なども此の紫外線的作用に外ならない、都會人士の色が蒼いのは紫外線が少いからで山登りをした人が山焼けと云つて色の黒くなるのも此の紫外線の爲めだ、海へ海へと云ふ聲があるが海も船上生活で全く海上の生活ならまだしも今の海的生活と云ふのは實は海の岸の生活で、海岸生活と云ふのは享樂的で教育上宜しくない山の方は總てが高潔雄大で道德教育から考へても何程有効だか知れない、山へ山へさの教育が奨励したい』

(七、七、一五、東朝)

◇アルプス學會近く設立されん 日本にアルプス宗が宣傳されてから可成り久しいが、單に登山を主として一部の方面研究に過ぎない傾きがあつた、從來あの邊を中心とした高山植物の研究には松本女子師範學校長矢澤米三郎氏などが熱心であるが、今回更めてアルプスを一般教育的に利用の企てが有志の間に成り『日本アルプス學會』と名稱を附して會長には澤柳博士を推し、中央氣象臺の藤原咲平博士、長田文學士などが目下斡旋中で

ある、後藤外相も亦この有意義な計畫に賛して特に相當の援助を爲す筈である、詰り日本アルプスを有ゆる方面から研究して地質の研究調査、高山氣象の觀測等は勿論、特に學會として新しき方面の研究とも云ふべきは瞑想思索の高尙な方面に意を注ぎ特に世の藝術家にあつた雄大崇高山岳の氣分を十分に味あはせて、精神生活を助成させたいと云ふのが、目的の一、科學的に精神的に抽象と實在を双つながらに利用せんと爲るのが、今度の學會の大なる目的である、藤原理學博士などは登山の危険さいふ事も高山氣象を今少しく研究すれば大部分はそれらを豫防し得ると云つて居る『精神生活の眞諦を味はふにはどうしてもアルプス高原の如きは最も相應しい所である』とは澤柳博士の主張である、そして學會の事業は單に夏のアルプスのみでなく秋もよし、冬は冬の研究、春は春として四季を通じて研究に及ぼし追つて同會の研究發表として雜誌を發刊し、事務はアルプス宗の信者として有名な信州大町の平塚順一郎氏が執掌して孰れは具體的の成案を見るに至る等である。(七、八、五、東、朝)

◇上高地 北アルプスの槍、穂高、常念、燒の諸峰に登る人は松本から下車して上高地を根城として登山を試みる。此上高地は梓川が中央を貫流して居て、極めて氣持のいゝ谷であることは自分が登山記に書いた通りである。上高地には宿屋が二軒ある。一軒は清水屋一軒は養老館一名蕎かき宿と云ふ。清水屋には温泉がある。養老館は松本の方から行くに近き位置にあつて穂高に對する眺望が非常にいゝ。そこで競争が却々激甚である。人夫杯もほとんど清水屋づき養老館づきとちやんこままつてゐる。松本へ

下車して清水屋へ行かうと思つて、島々で曲中旅館に休まうものなら、旅客は色々不便な目にあふ。何と云へば曲中と養老館とは連絡があつて、一清水屋とは競争者であるからだ。清水屋へ行くならば島々でも清水屋本店へ休まなければ不便だ。恐らく松本にも上高地の二軒の宿が連絡を保つてゐる休憩所乃至は登山案内所があるに相違ない。此處の理由をよく知らない旅人は清水屋へ行かうと思つて養老館へ案内されたり、蕎かき宿へ行かうと思つて清水屋を勧められたりする。競争は自由だ。山中と云へども一夏毎に文明の風は入り込んで行く。槍ヶ嶽にも旅館が出来た。これにて世のなり行きで仕方がない。無暗に感傷的に嘆じて見たつて仕方がない。併し宿屋の間に友誼的な連絡に取つて客に不愉快な思ひをさせない様にするのが、兩旅館の爲ではないか。序に記して置くが、登山にはキヤラメルは口があれていゝわ。氷砂糖の方がいゝ、大きい油紙は是非忘れるな、案内者は必ず備へ。岩に攀る爲に手袋を持つて行け。(名倉生)(七、八、一、東、朝)

◇山を秘めよ 雪路を初めて見附けた時の感激——夫れは最も健康な青年のみが味ひ得る所のものだ。自分は數週前槍ヶ岳に登るべく赤澤を横つて、馬場平に出ようとする谷間で此の懐しい雪路に打付かつた。自分はもう飛上つて喜んで了つた。が次の瞬間に其反對の側で生々しい板圖の小屋を發見した。自分は其刹那の不愉快さを何と云つて説明すべきを知らぬ。此小屋の名をアルプス旅館と云ふのださうな、自分達は一瞬にして雪線から下界へ引き卸されて了つた。お人好しで鈍感な此の旅館の主人は臺所で晩飯の仕度に掛つた、彼は女中代りの若者に命じて味噌汁の種

に干瓢を入れると云つた。自分はどう助からぬと思つた。「オイ山の草にしてくれ」と怒鳴つた。主人は成る程、是は氣が附きませんで」と云つた。やがて今頃は熊が出るさいふ噂の内に夜が来た。主人は「ランブの用意が四五日中には出来るのです」が云つて謝つた。するに隅に壁てゐた學生が、「此處迄登つて来てランブを點されて堪るものか」と云つた。山岳會の木暮氏は飛騨山脈中自然境として彼等より残された場所三箇所を知つてゐる。其處は決して誰にも教へないと言つてゐるさうだ。勤くも富士山頂近くの岩石はペンキで醜惡な廣告を書き散らす者があり、夫を見ても別段咎め様さめせぬ無責任な役人が生存してゐる以上、木暮氏の秘密境は何時迄も秘密境でありたい。巴里郊外の野を散歩してゐた或る日本の紳士があつた。彼は日本人らしく菓子を喰つた後の紙袋を草原に捨て行き過ぎ様とした。折から恰度通りかゝりの佛蘭西人のお婆さんが無言の儘紳士の前に立ち塞がり、冷やかに異人種なる紳士を見下し乍ら右手を展べて該の紙屑を指した。紳士はハツと思つたがモツ追付かない、赤い顔をして紙屑を拾はなければならなかつた。日光も元はペンキ塗りの廣告板が散々跳梁して居た。夫は前英國大使マクドナルド氏の切なる注意で撤去させる事となり今日あるを得たのださうだ(登志男)(七、八五、東、朝)

◇山に行く心

むら生

杜鵑も老いて、眼さめるやうな新緑の影も漸く濃く色附けられて季節が初夏に入つて来るさ、空はどんより曇つて、重くらしい鉛色した雲が頭上から掩ひ冠つて来るやうな日が多くなつて参りま

す。併し時折雲が断れて其の絶間の奥に見ゆる美しい澄み切つた若い空を仰ぐと新鮮な感情が自然に湧いて來ます、そして何さな高い山の中で青空を見るのと同じ気分がします。亦我々山岳黨のシーズンになつて來ました。どうせ本年も山登りが流行して猫も杓子も日本アルプス目がけて飛び出すことせう。恰もそれに登らなければ恥辱でもあるかのやうに！登山の流行は種々の意味に於て誠に結構なことであります。——少年にとつてもはた又大人に取つても。前者はこれによつて自然の中の純の純なるものに接することができて、其の精神上の修養に資すること多大なるものがあります、後者は劇しい人生の競争場裡から一時でも遠退いて、其處に心意の安息を見出し得ます。平穩！現代人にさつてこれ程望ましい言葉はありません。そしてそれは只山——遠く人關を絶して白雲脚底に湧き起るやうな高山——の嶺に立つた時に始めて感得せられるのであります。何故ならば高山の絶頂に立つて煩瑣な人間界を遙か脚下に見下した刹那に一つのさざりが開けてこの心境に到達し得るのです。これは親しく登山をした人でなければ判りません。實に山は誰かが言つた如く我々の多数にとつては歡喜や、平和や健康や、果又生命の無盡の泉源であります。人生の争鬪に疲勞困憊して、意氣銷沈の極みを盡した人達も、一たび自由と幸福と清新の氣に満ちた山に登るさ健康、力、精力を回復して歸つて來ることが出来るのです。私は諸君に山上の巡禮をおすすめします。なるほど山中の嵐は強くあります、併し乍ら諸君はそこに新しい光と空氣とを見出し得るのです。諸君の血管は淨められます。又永遠性に接する事もできます。かくて諸

君は神靈に酔ひつゝ山を下りて來ます、そして平原の人々に心の靈の縁を頌ら與へるゝことができます」これはロメン、ローランが其の著ミイクロ、アンゲエロの序の中で云つた言葉の一節であつたと記憶します。日本アルプスに行かうとする數多い登山客の中でこんな醉な心で山の巡禮を心掛ける人は果して幾人あるでせう。美を鑑賞せる能力もない成金型が只金方にあつて美術品を買ひ集めるのは滑稽であり又苦々しい次第であります。同じやうに登山が流行するに云ふので、一種の見えを張るためにわれもわれも山に向ふのも考へものではありますまいか。何故ならば山はラスキンの言つた如く大自然の御手で造り給ふた貴い藝術品でありますから清くない心で持つてこれに近づくことは瀆聖罪であると言つても過言ではありません。登山期が近づいて來たので一寸心に浮むだことを述べて見た次第です。(七、六、三、名古屋)

◆山嶽美保護施設

日本アルプス中の上高地一帯は天下の山嶽美を以て稱せらるゝ内にも屈指の景勝地なるが上高地を中心とせる穂高、鎗、六百、常念、乗鞍、燒の諸山約一萬千歩に亘る區域を大正四年に於て御即位大典記念保護林に編入したる由は曾て報せしが右は數年前に山嶽研究家小島烏水氏等も年々上高地附近の山嶽美の破壊せらるゝを憂ひ曾て同氏が本紙上方でも其保護の必要を論じたることあり本社記者も亦前任の松本小林區署長小西氏に議る處あり同氏は農商務省山林局に向ひ之れを説く事頗りにて初めの内は山林美學より見たる此要求は當局も耳を傾けざりしが時代の要求は遂に保護林に編入さるゝに至り本紙は當時既に之れを詳報せしが其筋に於ても未だ其施設方法に就ては一

指をも染すにありし處今回愈々之れを講究する事となり東京帝國大學教授本多林學博士及び三枝林學博士は助手數名を隨へて十日午後松本市に來り同夜は淺部溫泉常盤の湯に一泊し十一日午前同一行に本縣温井技手松本小林區署長廣瀬氏等も加はりて視察の爲め登山の途に就きたり同夜は稻核一泊、梓川沿岸の砂防工事並に景勝地を視察しつゝ上りて十二日白骨溫泉一泊、夫れより上高地に出る新開鑿の林道を踏査しつゝ中の湯を通り上高地に出で十三日は同地に宿泊、十四日より十六日迄の間に於て鎗ヶ嶽、穂高嶽、燒ヶ嶽、大正池、其他の官行事業を實地に跋渉視察して十七日正午迄に松本に出で夫れより直に白馬嶽に登山すべく北安曇郡に向ふ筈なり。(大正七、七、一二信、毎)

◆種蒔爺

北安の山中へも春が來た。土手の露の塔がメツキり成人して什處も彼處も春の陽が一杯に惠んで居る、雪から脱した大町では槓唄を聞く事も出來なくなつて日本アルプスの裾野に啓けた幾筋かの路が黒土の肌を見せて居る。平村附近の定期馬車が日一日と範圍を廣めて行き權馬車との乗替停車場が次第に北へと進められて行くのも此地ならでは見られない圖である。アルプス連峰の内で一際目立つのは爺ヶ嶽であるが、其山面に例の種蒔爺が其姿を現し出した、此の種蒔爺と云ふのは爺ヶ岳の絕頂が春陽の加減で雪崩出し其處へ現れ出した黒岩が恰も爺の種蒔姿であるから……中綱、青木の兩湖も薄ら氷が少し深ふて居るばかり冬の名残も僅である。佐野坂を中心に北には雪も未だ多い、神城北城邊は三尺餘も積もつて居て此残雪の上には何百と云ふ種が走つて居り小谷村方面からは梅材が搬はれて居るが働く人は秋田人

で繪に見る様な美しい遠望である。雪の衣も厚い日本アルプスは陽の恵を受け入れぬ氣にそびえて居るが、今年の登山期には森區の金丁旅舎が一新道を開かうと目下計劃して居り、北安の人々は日一日と雪の薄れ行くのを待つて居る。(大正七、三、三〇、信、每)

◇登山には酸素袋 富士山嶺で學術上の研究をして歸京した寺師一等軍醫は語る「私達の今度富士へ行つた目的は愈激なる氣象の變化に伴ふ行軍力の生理的研究、山地行軍に於ける疲勞及び豫防法の研究、異常の場合に於ける行軍力増進に關する研究、高空に關する生理的研究、高空に於ける精神の疲勞其他であつた十三日から二十七日迄小泉軍醫正外五名で三合目と絶頂の二ヶ所で血液呼吸尿其他種々の研究をした一行が、今回の研究で得た表面上の研究としては、十三日から十八日迄は須走口の大猿嶽に滞在し二十三日は三合目の石室で空氣の研究を行つた事であるが、三合目邊りの空氣は頗る透明で月は毎晩出て居るし殊に満月の晩などは暗い山嶺を背景に山中湖や江ノ島等は手に取る様に見えるし淺間の煙が緩やかに流れて澄み切つた大氣は鹿でも鳴きさうな全然秋のやうな氣分を漂はせて外國で騒がれて居る高地療法の最適地だと思ふたそれに一行は酸素袋を持つて歸つたので聊も疲勞しなかつた、元來山嶽病と云ふものは酸素の不足から起るので酸素さへあらばして疲るものではない、山頂での試験は單食研究で四人が別に肉食砂糖握飯酒を分擔して飲食して見たが、其結果は矢張り握飯に少量の酒が最も有効と判明した夫れは澱粉及び含水炭素は酸素が無くとも體温の調節が宜いからで脂肪や肉類はヨリ多く酸素を要求して消化するものであるから稀薄な大氣中に於ては

歡迎されぬ譯である昔の人が富士は靈山であるから四足二足を喰べた人が登ると崇られると云ひ傳へたのも實は此原因に依るもので要するに山嶽病は酸素の不足から生ずるものと斷言して差支へあるまい、で八合目に酸素袋貸與所さいふものでも出來たら富士へ女子供でも容易に登る事が勇出來るだらうと思はれる。(七、八、三、新愛知)





本會々則一部變更

從來本會入會に就ては會員二名の推薦を要する規則なりしに今回特に會則二十二條の手續に由り左記の如く本會々則第十一條を變更し、入會希望者は會員三名の紹介者を要し、内一名は本會幹事たる事を要する事と爲れり、此規則は直ちに實行さるべきものなり。

第十一條、本會々員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名年齢職業及ビ會員ノ區別ヲ詳記シタル申込書ヲ添ヘ本會事務ニ送附スベシ。
但シ會員三名ノ紹介者中一名ハ必ず本會幹事タル事ヲ要ス。

第一回本會小集會

豫告の如く九月一日午後一時第一回小集會を開催せり、小暮幹事司會者として開會、同氏の今夏旅行談について講演ありたり。

第二回は來る十一月三日午後一時より開催の豫定にして便宜上小集會の定めを再録すべし。

日本山岳會小集會の定め

- ☑本小集會は一年四回二月六月九月十一月の第一日曜日午後一時より開く。但し時宜により臨時開催する事あるべし。
- ☑會場は當分の内東京市日本橋區本材木町二丁目二番地保々近藤合名會社(電、本四四九七)内とす。
- ☑會員外の同好者の入場は會員の同伴又は紹介を要す。
- ☑會費を要せず。

⊠本會幹事交互司會者として事務を處理す。

神奈川縣廳、横濱市役所主催

山岳講演會

七月廿五日午後六時半より横濱市記念會館に於て、神奈川縣廳、横濱市役所主催の許に山岳幻燈講演會開催せらる、本會より招に應じて、梅澤親光、高野鷹藏、辻村伊助の三名夫々講演をなせり。

上智大學山岳會講演會

十月五日午後六時より、東京、上智大學に於て同校山岳會の講演會あり本會幹事辻村伊助、名譽會員志賀重昂氏の講演ありたり。

會 員 通 信

△その後は御無沙汰に打過し失禮の至りに存じ候例によつて七月十六日の夜行にて十七日立山村芦崎寺へ着十八日十九日雨十九日

◎會

報

神奈川縣廳、横濱市役所主催講演會

上智大學山岳會講演會 會員通信 一二七

出發藤橋を渡らず硫黄道を六時間ばかり上り、大雨の爲途中の小舎に宿泊この夜より天候順調に相成り廿日阿彌陀ヶ原と谷一つ隔てたる大日平の高原に野營廿一日大日岳早乙女岳奥大日岳に登りに室堂泊り廿二日は浄土龍王に登つて一の越に出て同行の飯塚君に分れ小生は御山澤を直ちに黒部の大流に降り夜營致し候廿三日は一日黒部川に滞在平小舎方面及び御前澤方面を少々歩き岩魚釣をして暮し候黒部川は御山澤落口より上下流さも餘程好き風情にて出合の夜營地から立山本谷が深林の上に連亘して折しもの明月に反映したる雪谷の美觀は更にこの谷の幽深を加へ候兎角に黒部川は大いに氣に入り候(但し人夫三四人位で黒部朔行など小生には思いもよらず充分なる架橋材料を携帯し多數の熟練せる者を連れてとも行けば或は如何かと思はれ候然しその困苦は想像以上と存じ候)廿四日に御前澤を上る豫定に候ひしも初めての谿谷に可なり大いなる瀧の連続せるを豫想し且立山東面の藪の猛烈なのに尻込みして今年はやめ御山澤の北方にある無名の平を貫流するライテン谷(室堂社人の呼稱)を上り雄山續きの尾根に夜營廿五日は御前澤のカールへ降り様子を探りなごして雄山より別山乗越へ出て室堂に下り廿六日芦崎寺に出で廿八日歸京致し候何れ御面談の上草々(七、七、三一、冠 松次郎)

△本年は到る處近年に無き残雪豊富の由聞及候に付土用入を待たず七月十七日東京を出發して翌十八日大町に着、立山連峯縦走の途に上り申候。

然るに近年登山者増加の爲限りある大町の人夫は二三ヶ月前既に約定済と相成百瀬君の斡旋を以てして尙且つ一人をも得るこ

と能はず、遂に六里を駑馬に韃て昨年自分が備ひ申候屈強の八夫三名を細野より引率のため一日を費し、廿日早朝大町を出發し大澤川原に露泊、針ノ木峠より針ノ木岳を窮め針ノ木谷を下り黒部川に出で候處籠渡破損して只だ其痕跡を伺ふに足るのみ且つ黒部の水量も殊の外多く殆ど當惑仕候得共別に鉢案もなければ客二人入夫三人は用意の綱にて珠數繫きと相成淺瀬を選みて徒涉致候小生身長五尺五寸を超え居候得共深き處にては臍を濡らし申候連なる友人の如きは殆んど半泳の體にて有之候ひき、針ノ木峠の雪溪は峠の頂迄達し居候同様に温谷の雪溪は峠の下より佐真峠の二町許り下迄續き居候從て道は直線を辿るため殊の外涉り申候、五色ヶ原も雪田九分草原一分の有様にて、平年より寒氣も一層強き様

感申候、五色にて思出候は入夫拂底の慘禍てふ事に御座候本年の如く不慣なる登山者多く而かも入夫に大不足を告げ居候際には所謂案内入夫が力量もなく經驗もなき「でも入夫」を狩り集め候ため、客が夕刻日没に迫りて露營地に到着致候にも不拘、給養本部たる大行李未着のため、寒風身に沁み膚を刺すが如き高地に、三四時間も空腹薄着の儘ガク／＼と物も得言へぬ體にて、豫定もつかぬ入夫の來着を待ち乍ら、往に彼等の無情を詰りつゝ、弱きは倒れ猛きは最寄に横たへる豊松の枯木を探り集め居候様見るも物哀れに被感申候、某校山岳會登山隊の如きは三名の病者を出し其他の團體中にも一二名の輕病者を出し候次第小生も見るに見兼ね入夫を督勵して手狭なる我天幕に八九名を收容致し心許りなる響應と手當を獻じ申候之れが救濟策として差當り大町の入夫組合に一層優良なる入夫の養成を依頼するも同時に登山者に於ても携

帶品を節減して團體共用制を探り各自も三貫乃至四貫の荷に耐へ得るの力を養ひ極力入夫節約の計を立つるの急務なるを思はざる不能候。

幸ひ連日快晴に有之候間旅程を進めて五色より鬼、龍王、淨土、雄山、大汝を経て別山硯ヶ池に野營、それより劍ヶ岳に縦走長次郎谷を下り劍澤を上る際平藏に邂逅、次の日別山乗越を九頓直下して地獄谷より室堂に入申候處茲にて又も長次郎に遇申候一時に劍ヶ岳の二巨人に面談するはさてはさても／＼山縁深しとも申すべきか、殊に長次郎は昨年白馬山頂にて木暮氏に御面晤の折同氏人夫として面識の關係あり、一層奇縁の思をなし申候。

室堂より立山の所謂名所舊蹟を尋れつゝ、蘆崎寺に一泊五百石より汽車の客となり二十八日無事歸京仕候。(鈴木益三)

△拜啓仲秋之候愈々御清祥奉賀候 陳者小生三日の休暇を得申候に付豫て宿望に有之候日光奥白根山登攀を思立ち一昨日(九月二十五日) 早曉自宅出發馬返しより四里半の道を三時間半にて踏破、夕五時に湯元に到着、温泉客と相成申候。前日暴風雨の跡寔に凄愴を極め、直徑三尺にも餘る幾百年の樞、樺も憐れや中折し又は根こぎとなり、道路を遮斷すること幾十ヶ所に及び、殊に猛烈なるは中禪寺湖畔の古籬及び観音巖には近年稀有の「蘿出し」起り七尺以上の深さを以て道路を埋め其突端は湖水に及び申居候。白根登山は實は今回が三回目にも有之第一回は密雲のために眺望を封ぜられ第二回は吹雪に遭ひ前白根より引返し遂に其目的を達せず、一向秋空の快晴を待居候處偶々颯風の襲來あり、奇貨措くべしと存じ、著皇旅裝を整へ來湯致候次第に御座候。幸ひ豫見當

り廿六日は天高く氣澄み霜天の冷氣身に沁む秋晴と相成申候、六時半釜屋を出て永岡多一を東道として白根澤を入り前白根に着候は四時四十分の有之候ひき、此邊霜柱さくく音を立申候日光金山悉く双眸に入申候。五色沼は暴雨のため潤濁致居候て所謂五色の名を得し沼底の奇石見得べくも非ず候。

尾根を下り奥白根に到る澤は既に紅葉見るべきもの有之候。途すがら、ガンコウラン、コケモ、の熟果を賞味しつゝ頂上二等三角點に立申候時、時計は十時を指居候。

流石に年中の好天氣さも可申、乾坤一雲影の迷るものも無之、一眸百里、南太平洋より北日本海迄、水天鬚鬚青一髮、歡喜雀躍、不think哉を叫申候、殊に淺間を中心として右に種高、槍より白馬に到る北アルプスの雪峯（降雪の工合より見て初雪なること疑なし）左に白峯、赤石より八ヶ岳、金峰其他の秩父山系諸峯最後に宮岳巍然として天下を威壓致居候。之れより上州側に降るべく十時半頂上を辭し西側のカレを下り有名なる燗裂火口「御釜」の壯觀を拜し、熔岩流たる大廣河原の難路を過ぎ十二時四十分血の池ノ平地に出申候、此間路らしき道なく只たヤブに入らむ様成るべく上部に於て適宜通路を選む外無之候、血ノ池平よりは西北の進路を取り低地に沿ひ、漸時下り行けば百年斧鉞を加へざる針葉樹林參差として行路を遮り、其間各種の高山植物の隠見する所、随分難路に御座候、六地蔵より程なく不動坂の急斜面を轉ぶが如く降ればやがて鳥居に達し申候。此所湯元、東小川間の中央に位し西すれば東小川に、又東すれば三里にして湯元に達すべく候。時に二時半。白根の上州口は登山者極て寥々たるものにて小川方面

の人々が新蘭を白根權現に獻する時の外植物學者が小林區署の御役人が時々往來する位なる由、通路の荒廢は誠に無理ならぬ次第に御座候、乍去御釜の壯觀と大深林と高山植物と管沼以下の仙湖と清水の名水とを蓋し此山、此口に非んば得難き景物と存候。小沼のマウセンゴケに驚き、清水の聖泉に心曠を洗ひ、十五町の金精峠を乗越え、ひしくと迫る夕闇の下、疲れし足に縫ちつゝ、正六時と云ふに湯元の温泉宿に着申候。翌二十七日は太郎山を窮めんご存居候處雨模様空低く天候變調の徵有之候間登山を斷念し湯湖上に舟を浮め申候中ホツホツ雨降初申候。さるにても幸運なる吾よと白根權現の神靈に深く感謝の意を表しつゝ、二十八日湯元を辭し歸途に就き申候。以上（鈴木益三）

△陳者小生苦小牧の方へ住居致すこゝに相成りなつかしき樽前山下の人と相成り候。

平地に立ちて北より西に瞳をやれば紋別岳を右に裏庭岳、フウブシマブリ（大妙山）樽前岳、トクシユンベツマブリ、登別岳、來馬岳、クダラウシマブリの一線の火山堂々行列し獨り樽前岳は其の不斷の噴烟に人氣を集め居り候。

好晴の日遠く東望せんか夕張岳一帯は雄大な山線をヤチハンの疎林ヒに横ぶべく東には日高山脈波瀾の如く連亘するを望むべく候。

しかも我立てる平地は附近諸火山の活動によりて堆積形成せられたる厚き火山灰地に有之殆んど經濟的耕作を許さざる處に有之候も百花亂咲の美觀と一帯の荒涼たる氣分とをむしる保護すべき特色に候ふべく殊に海岸の極度の灰色は寂寥堪ふべからざるもの

有之北海道砂濱の標式的なるものゝ一に候。

猶漸次附近の諸火山は踏査致す豫定に有之又樽前の健康状態は時々御報致し得ることを期し居り候。

次に小生の七、八月間の登山消息申し上げ候。

七月三日札幌農大の工藤氏前川氏並川氏の三學士及石田氏と共に手稻山(九八六米)に登攀。

七月七日札幌を發し圓山神社より發寒川左股に入り中ノ澤を登りて人跡を全然斷てる密林中を單行して百松澤に下り豐平川本流に出て常山後温泉に一泊途中瀑布に落ち込み全身濡れ嵐と相成り候。

七月八日今にも降り出さうな空を氣にしながらか常山後を發し豐平川に沿うて行くこと半里分れて薄別川に沿ひて虻田道路を辿り候山腹を迂廻する峠路は極めて緩傾斜に上りかゝる山中の道路としては理想的のものに存じ乍ら歩き候も密林を兩側にして路一面に數尺のフキ、オホイタドリ、ハナウド等茂生し蚊多く全く靜止を許さざるもの有之路傍にノウゴウイチゴの紅葉累累たるもの一面に有之候も悠々摘食するを得ざりしを今だに残念に存じ居り候雨雲中時々殘雪鮮かなる余市岳、マイネシリ等を望み時々天狗岳の怪峯を認め候路豐平川側に移れば札幌岳中腹の大岩壁物凄く望まれ候それより約一里餘は丈數の根曲竹密生し、トウヒ(エゾマツ)、エゾノダケカンバ疎生せる地域を通過して中山峠驛選宿の只一軒ある小高原に出で候小屋は極めて完全なるものにて炊事道具は一通り有之夜具も具へあり候も無人に候ひき常山後より約七里午前七時に出發して正午到着致し候山路なるも平地通りの少

速にて登り得可く候夕方雲暗れ眞狩マブリ、岩内岳、札幌岳、奥札幌岳(新稱)漁岳、裏庭岳(山頂のみ)マイネシリ、キモーベツシリ等手に取る様望まれ候又四時頃常山後に居住する岩魚釣り島山翁(七十餘歲)登山し來り一時間許り山話を交換致し候脱俗的好好爺にて今少し若ければ理想的の案内者ならんに惜しく存じ候夜は風雨。

七月九日、雨のため無聊の一日をさびしく過し候。

七月十日、雨なほやまずしか糧食斷きたるため意を決して下山の途につき候、登路を戻ること約三里右方豐平坂の急坂を澤澤に苦しみ乍ら林中を下りて豐平川上流炭酸水湧出地に出て候炭酸水は河岸の岩隙より湧出するものに有之味極めて濃厚に候附近は懸崖千尺トウヒ、トドマツ、タカネハヒビカクシン及種々の潤葉樹等岩上に生じ河流は數尺の峽谷となり風景雄拔を極め候加之岩壁にはシマタンサウ、モイハナヅナ、ヤマハナサウ、ゲンナイフウロ、エゾスカシユリ(?)、イブキジャカウサウ、アサギリサウ等多數の高山植物を得べく候これより常山後温泉迄、密林を穿つて行くこと一里半ツブ濡れの身を温泉に浸つて心氣全く新た相成り候。

七月十一日雨止みしも雲低し今日は小樽内川を溯りて錢函に出づる豫定に候處約二里半許り密林を穿ち丈餘の雜草を分け腹部迄水に入りて數回川を渡渉し參り候も認め得る様聞き及びし細徑全く斷之何さなく心細く相成り又引返して札幌道路に出て石山の終馬車にて歸札致し候。

この旅行中最も苦しみ候は蚊の襲撃に有之眞黒の團集をなして

け候。(七、六、一四、札幌にて竹内 亮)

△七月廿三日より八日間慶應山岳會一行に加里地蔵——駒——仙丈岳——間ノ岳——北岳縦走仕り候廣河露營地にて折柄柳澤より御登山の小暮氏武田博士一行に御面會仕り候。

其節地藏佛登攀(約二丈のロープ二本使用仕り候)の話申上候處是非寫真をこの事に有之候も寫真屋現像の失敗の爲め頗る不出來にて御目に掛け申上可き品には無之候。(七、八、二八、青木軍二郎)へ扱小生去る八月十三日午後二時京都發車名古屋にて中央線に乗換へ翌十四日午前三時松本に着信濃鐵道に據り午前七時大町に到着仕候其日は登山準備にかゝり翌十五日午前八時對山館出發人夫松田茂一、佐藤靜馬の二名を伴ひ路を西北野にぞ採り鹿島川橋を渡り大出にて品右衛門方に小憩す更に蘆川の峡谷を進み針木峠に向ひ正午向澤のドゥにて晝食の上勇を起し右折して扇澤を溯り雪溪の下方數町の處にて出發第一日の幕營す此夜月冷闇として深濛を照す。

第二日(八月十六日)朝七時天幕をたゝみ出發扇澤河原のつきる處より雪溪を渡る附近大櫻草爛漫たり正午棒小屋澤乘越に出で尾根づたひに種池の傍にて晝食し夫より祖父岳を登る祖父岳を下る頃より立山連峰に密雲籠り兩脚次第に降る須臾にして雨沛然として降る急ぎ布引小屋場(冷地)に來り天幕を張る夕刻に至り霽れたれば燃火をして濡衣を干し夕食の準備をなす。

第三日(八月十七日)冷地は水質悪く又水量少なければ十分の炊事も出來難ければ匆匆々にして出發し信越國境の尾根を北進し布引岳を越へ又鹿島槍岳の岩石を上る正午三魚野に到着頂上石下埋

むる空罐に記念名刺を投入す知己の名刺數葉を見出す。

鹿島槍岳北側カール積雪上部の空地に幕營す。

第四日(八月十八日)昨日の天候は比較的良好なれば明朝は早々出發せんものと思ひしに前夜十二時頃より又々雨降り始め今朝に至るも霽間も見せず越中方面より吹き上る水蒸氣濃々として風聲轟々たり本日は雨中天幕内に滞在す。

第五日(八月十九日)空模様面白からざれども愈出發さ決し匆々にして人夫を督し準備を急ぎ靈營地を離る爛砂の上を横瀆みに尾根をつたひ愈八峰の切戸の少し前方迄來り是より切戸を横切らんこ櫻松の密生中を下る尾根より尾根も打つたひ喬木林中を只一筋に遂に空濛の上方に出でる頃より亦々雨となり切戸の下方を通過して反對の山稜を雨中を侵して登る人夫等寒氣に不堪として登攀大に艱む幾多の困難に打勝ち頂上に登れば又の如き尾根を五龍岳南方の露營地と急ぐ途中屢風雨來襲に犯され信州側の窪地に避難す遂に目的の地に辛ふじて到着したれば直に雨中に天幕を張る此地深水是元より積雪もなく一粒の炊爨もなし雖し他に適當の露營地なきを如何にせん。

第六日(八月廿日)午前七時半出發し昨日の雨も漸く一時霽れたれば又々尾根づたひに五龍岳向て前進す山容の怪異なるは近づくに従て登攀の困難を感す午後一時頂上を極め直に大黒嶺山方面へ下る途や多數の雷鳥見る後立山々脈の縦走も今日にて終をつぐる左折して越中方面に下る頃より雨脚しきりに來る願て山頂に辭し愈林中に入れば愈雨降り苔石幾度となく足を失す此度の登山は既に時季を後れたるの感ありて天候險惡にして日々雨を見ざるなく

爲に旅程の艱難と疲労の幾分を増したるを憾とす。登山の時は梅雨の明けたる直後の日を以て定むるを最も可とするを切實に感じたり午後四時過ぎ大黒嶺山事務所に着し一泊を求む。

第七日(八月廿一日) 芙蓉笠に已に雨中の準備を整へて嶺山事務所の人々に訣を告げ下山を始む晴天なれば嘸や眺望の可もあらんなど思ひつゝ南越の池の傍にて少憩し南越を下る路甚だ悪く祖母谷温泉の廢屋にて晝食を喫す此處にて越中人夫佐々木助七に遇ふやがて若し下山に就けば嶺山人夫の續く登山するに邂逅す黒部溪谷の絶景には嘆賞を斷す足を佇めて觀るに杖擧あらず殊に猿飛上流黒部小黒部合流點附近最も勝る午後五時鐘釣温泉に入れて泊る。

第八日(八月廿二日) 益黒部川に添て山懐を出て鐘釣より愛本に至る五里餘の道も今日となりては殊に長し途中一二の茶店の開くあり温泉浴客の住來する人追々其數を加ふ正午黒部川に架する大釣橋を渡り愛本温泉の前を過ぎ一時過ぎ愛本橋畔に來り晝食を喫し午後三時半馬車に賃して三日市に急ぎ驛前にて人夫と別れ午後五時四十分の列車にて富山に向ふ。

富山に一泊の上八月廿四日の拂曉歸京申候右登山旅程の概略御通時申上候。(七、八、三二、森 平藏)

△拜哲。武田君と同行、七月廿五日飯田町發の終列車にて出發。

廿六日日野春驛下車、柳澤に到り小池淺吉方に投宿。廿七日大武川に沿ひて赤羅澤合流點に達し、早川尾根を登り、山稜の南側水ある所に野營。廿八日廣河原泊り。廿九日大樽澤より北岳に登り、間ノ岳との鞍部に一泊。卅日間ノ岳を踰えて農島西峯直下の鞍部

に野營。卅一日農島山、廣河内岳、大籠を過ぎ、白河内岳に到り、更に黒河内の北俣岳に到る豫定を變更して、東俣に下るに決し、好い加減に澤を下り候處、旨くアエダレ澤の合流點に出で申候。

八月一日アヒダレ澤を上り、蝙蝠岳より引き返して荒川岳(龜見岳)を攀ち、タケ澤の上流に下りて野營。二日北荒川岳(伊那荒倉)安部荒倉を上下し、兼ねては黒檜山に到り見んこの野心ありしも、林莽の磅猛甚しきに避易して、更に北進を續け、三國岳を北に下る。こゝ四十五分にして山稜上一泊。三日横川岳荒倉岳其他無名の小隆起幾つかを踰え、仙丈岳に登り、北澤峠を経て北澤の小屋泊り。四日北澤を溯り、仙水峠より駒ヶ岳に到り、七丈小屋泊り。五日横手に下りて十二時柳澤に歸着、其日直に日野春より汽車に乗り、甲府にて武田君と別れ、久振りの氣持にて歸京致候。連日好晴なりしも、水口に苦しみ申候、谷間には相當の殘雪を見懸けたるも、白根二山及仙丈岳とも頂上附近にては極めて少量の殘雪あるのみにて、北岳には全然無之候。人夫不慣の爲朝の出發遅く、武田君も小生もふりく致し候も、今となりては快感の外何物も残り不申候。いづれ御目に懸りたる上にて詳しく可致御話候。(木暮理太郎)

△次に本年の山岳行報申上候。

小生は八月三日より我魚津中學校生徒十三名外職員二名と共に立山登山六日立山温泉にて解散それより小生外の同僚一名と共に真川を溯り有峰村に入り薬師岳に登り候十日水須村を経て岩崎寺村に出で五百石驛より汽車にて歸宅いたし候有峰より水須に通ふ路は荒廢極に達し殆ど交通困難にて降雨の際は絶対に交通不可能に

有之候序に名士の黒部入を御通知申上候八月十日より吉田博氏愛本より黒部に入り鑑釣温泉附近に數日滞在附近の溪流數點製作致され候夫れより小黒部を溯り仙人山鑛山事務所に留まりて「池ノ平より劔岳」を西南に望みたる大作を試みられたる筈に候今秋の文展出品は此池ノ平の池を前景としたる劔岳の雄姿たるべく候二十四日三日市驛前の松井旅館にて偶然邂逅面談二三十分間にして早朝出發歸京の途に就かれ候。

大阪英國副領事ホワイト氏(會員)は友人なる神戸商人英國人リポー氏と共に八月二十四日より黒部に入り黒雜温泉を策源地として次の旅行を試みられ候。

黒雜温泉にて人夫其他の準備をなし祖母谷温泉場に到り、祖母谷川溯り中ノ谷より白馬岳に登り祖母谷温泉場に歸り更に大黒鑛山に到り五龍岳に登り祖母谷温泉場に歸りそれより小黒部川を溯り劔澤を経て立山室堂に到り立山温泉に出で九月六日、五百石驛より大阪に歸られ申候案内者及運搬者は音澤村のものにて例の佐佐木助七、其他三名にて候人夫は小生及黒雜温泉場中人(會員)佐佐木孝次郎氏の推薦に因るものに候ホワイト氏「助マ」及其他の人夫共の好人物なりしを謝し居られ候。(七、九、十五、吉澤庄作)
 △夜行にて本日正午大町着申候案内拂底天候險惡にて泊り客約四十人、一高、八高の連中にてカヤク大騒ぎにて候人夫なきため目的通りにならずさうしようかと思ひ居候。(七、七、一八、大町にて加山龍之助)

△去る十九日大阪出發松本一泊翌日中房温泉一泊アルプス縦走準備をなし廿一日早朝より中房温泉出發燕岳に登り常念大天井岳を

過ぎて二ノ俣小屋泊天氣晴朗眺望雄大鎗ヶ岳極高は手に取る如く立山白馬白山遙かに富士山淺間山等も見渡され何とも云へぬ感に打れ候翌廿二日二ノ俣出發アルプス旅館泊、二十五日鎗ヶ岳登りの後上高地に泊る廿四日極高の險も無事遂行廿五日鷲岳を探り廿六日徳合を過ぎ廿七日歸宅仕候。(七、七、二九、直木重一郎)

△先月末自由の身成り東京を飛び出申候先づ久方ぶりにて「有名にして平凡」なる世界的名山なる大火山に登り夫れより静岡をへて田代に參り一週間滞在の後に仁田河内岳より北、惡澤岳まで縦走致候案内には平沼氏御同伴の瀧浪富士太郎を連れ候。(七、八、二二、沼井鐵太郎)

△目下滞在中に候朝夕は登山客にて大騒ぎに候晝中は靜かに晝寢などに耽り居候思ひの外に俗了せられざる白樺と森を愛し居候(七、七、二八、上高地、旅館五千尺にて 加山龍之助)

△醫者の云ふ事も聞かなきやならず、さりさてごこへも出ないでは帳面が消え不申山紫水明の此地へ七日の豫定に參り候時化模様にて本日は居内なれど明日よりは天幕。(七、八、六、上高地にて大迫武吉)

△金剛山内外一覽致し無難目的を果し申候。(七、八、一五、朝鮮金剛山にて今村巳之助)

△啞生六名をつれて昨日白馬岳登山頂上一泊今日白馬尻一泊明日下山。(七、七、二七、白馬尻にて横江春正)

△去月末出發針木より鬼、龍王、淨土を経て室堂に出で雄山大汝を通過して別山尾根縦走劔の頂上に到り長二郎谷を下りて又室堂に歸り越中を経て歸宅致し候近藤氏の名刺確に拜見致候。

立山にては山岳會の勢力實に大したもにて驚入候堂守が、「寫眞屋ぢやれえ、山岳會様だぞ」と申候如き少々くすぐったく候。(七、八、一〇、名古屋にて祖父江生)

△偶然桑港へ出て来て朝輝君にぶつつかつたのはアルプスの神のお引合せと西方から遙かに大日如來を仰んでゐる。(烏水老人)

レニヤ山に一寸登りました。タマルバイにも近々登る筈です。(アサヒ)

マウント、ホワイトニー。マウントレニヤ等米國の山も中々捨て難し當國の日本山岳會員も次第に盛に候何れ其内山々を征服すべく候。(國府)

桑港附近に高い山はないが、タマルバイ山へ廿六回登り候日本に歸る迄に五十回は登るべく候。(東 義一)(七、七、二七、桑港にて)

△大町より八峰、濁、烏帽子、赤岳、硫黄澤に野營、愈槍——穂高間の大キレットの中部に達し候處急峻なる雪溪の爲め進退谷まり候得共老練なる案内者又吉により雪溪に階段を刻きキレット底に着野營翌日北穂高、潤澤岳、奥穂高を極め上高地に着致候槍穂高間以上は豫想以上の難關に有之候。(七、七、二五、上高地にて加山龍之助、松代鍋種、三上捨三)

△沙市滞在中マウントレニヤへは自働車登山を試み申初めて氷河の壯觀に接し申候、丁度今夜四人が小川ホテルに落ち合ひ日本食をたべて日本の山の美を語り申候。(七、七、二七、桑港帝國ホテル朝輝記太留)

△公務巡視中一週間の私事旅行の認可を得て北鮮「アルプス」の

高峯冠帽嶺に登攀致し候、全然處女山と申候て差支へ無之候。(七、八、三、北鮮清津港客舍城敷馬)

△此クラブの入會費は百ドルです、日本山岳會等もモット徴收して今に會員を精撰したいものです。

山岳畫展覽會は如何です、米國には西北の方を除きては高山がないので私は失望ですそれで私はこの夏には White mountain 中の Mount Washington にも上る豫定です。

高々六七千尺位ですのこ頂上にホテルあり鐵道が通じて居るのこでイヤになります、それでも五分ないよりかましてす然し私は紐育の Club Life なるものをホッく味ひたいと思つて二つはいいりましたその一はこのアスレチッククラブです随分運動の種類があります、紐育の運動に興味ある紳士の會合です私は毎日銀行の退出後ここに立寄り水泳をやります冬でも出來ますので温度を適當してありますから贅澤な話ですそれから此處で食事し Chair を吸ひ Easy chair にもたれ十時過ぎに歸ります、山の本特に Alps 方面のガウントあります。

山の寫眞などもありまして私は實に愉快です。幻燈の方は如何、講演はいか、此夏は暑くなるぞモウ日本の原始的な山を想ひ出します、Geopon Day は實に上等のがありますよ。

本日百瀬君と茨木君連名の手紙がまゐりました茨木君のスケッチに實に私を喜ばしたのです。

塚本君は六月廿六日の諏訪丸で歸朝されます、私の追憶は同君より御尋下された。(大正七、四、二三、New York Athletic Club. にて今村幸男)

△林君と久振りで御目に掛つて色々御話をして居ります。忘れられぬのはこれからの日本の夏です、羨しくて腹が立つから兩人で飯松と雷鳥とが他人が聞いても譯の分からぬ山話に時を送りましたそして兩人で日本酒の杯を挙げて御互の健康を祝するのではなくて日本山岳會の萬歳を祈りました。ドーカ山岳同人諸君にもよろしく。大正七年六月十三日紐言日本俱樂部今村幸男、林聖木

△山登りの時節となりました定めて例により盛に御活動の事と察上ます今村さんが紐言へ來られましたので私も先日南下して御面會致し大忙の時間を割いてもらうて山岳の閑話に時を移しました。

我山岳會の益隆盛ならん事を祈ります。

ホストン着後直に宿所は通知致しましたが、多分不着してゐるでせう「山岳」に参りません尤他の會員の所へ送附して來るので毎號讀んで居ますから以後も御送りには及びませぬ留守宅の方へ御届けを願ひます。

私も渡歐は断念、今年末までには歸りますからその節費地に御面會を致しますつもり楽しみにして待て居ます健康を祈ります。(大正七年六月十三日紐言日本俱樂部にて二木生)

△八月八日大町出發高瀬入り濁澤幕營、九日烏帽子麓幕營、十日眞砂麓幕營、十一日双六池幕營、十二日夕立に逢ふ坊主泊、十三日午前四時出發穗高の縦走なく北穂高にて夕立に逢ひ奥穂高にて晴れ午後八時上高地着同行田頭凱夫案内者黒岩直吉。(松宮三郎)

△去る三日飯田町發大橋御夫婦外に學生一名の四人連にて大町より針ノ木、黒部、五色より立山温泉の順路を経て本日芦崎寺に着

きました、途中一日雨に逢ひました以外極めて天候は真好でした、案内は玉作外に人夫四名。

五色ヶ原の遠望は申分ありませんでした二三日ゆつくりこゝに投じたいと思ひました。(大橋繁)(七、八、一〇、芦崎寺にて村岡齋)

△小生本月二十日夜行列車にて出發二十一日大町に着二十二日より行動を起し針木越大澤小屋に一泊二十三日黒部龍の渡の手前にて露宿二十四日五ヶ原に一泊此處迄で當地四條嶺中學生十三名許りと同伴したるが是の團體は其夜温泉泊り翌日立山見物の客小生は二十五日鬼、龍王、淨土を越えて立山一越に露宿二十六日別山富士折立の今一つ先の雪溪より直ちに別山に攀ぢ劍澤に下り眞砂、平澤出合の露營地に一泊二十七日長次郎澤より劍岳へ上下再び宿營地に歸り二十八日池ノ平より小黒部を下り釣橋の手前に一泊二十九日祖母谷温泉より大黒嶺山に上り一泊三十日四谷を経て大町に歸着致候天氣は頗る真好にて展望の自由を得候。(七、八、三、柳直次郎)

△小生等三名七月廿三日芦崎寺より立山に登り眞砂子澤を下り三ノ窓より劍岳に登山いたし更に嶺を縦走しつゝ室堂にまゐり五色原針の木峠を経て大町に下り申候天氣快晴の上今年には近年にめづらしき程雪多く壯觀云ふ方なく誠に愉快に御座候案内は長次郎にて御座候先は暑中御見舞かつくゝ勿々。(七、七、三〇、信州大町にて中上川小六郎、伴野清、宮川久雄)

△吉澤庄作氏の山岳記事及「黒部峡谷」なる著書参考して大黒より祖母谷に到り七月廿四日こゝより祖母谷を経て白馬頂上に参り候吉澤氏は清水の尾根まで七時間と稱し居るも小生等は費下を嘗つ

て御案内せし丸山市三郎及啓吉を伴ひて二日を要し途中硫黄澤の合流點の大岩(貴下の雨中に一夜を明かされし)の上に一泊致し候其後慶應の山岳隊は鐘釣より二泊して上頂に参り申候當時を懐ひて一書呈上仕候頓首。(七、七、三一、信州南安豊科にて八木貞助)

△中房より常念山脈を縦走し槍に登り候小生は今回が第三回目の登山にて一回は御岳槍、第二回は白山立山劔針の木に三回共一度も雨に會はず眺望も申分なきほどにて誠に幸者と思ひ居り候。

(上高地にて岸本七郎)

△此十一日鐘釣温泉泊り、十二日雨に妨られ祖母谷温泉廢屋に一泊、十三日祖母谷を朔り、溪水多く架橋二ヶ所、大ヤブくぐり三ヶ所の後猫の踊り場附近野營、十四日大蓮華裏、朝日を當面に望む處に野營本日四ツ谷に下り申候、本年は到る處雪多く驚くばかりに御座候、導者は音澤村の佐々木助七、右御通信申上候。(七、一五、姫川谷飯田村にて武山良次)

△只先月九日羽州の鳥海山に登山いたせしも例年になき深雪にカンチキの用意なきかりし爲に烈風強雨に會し目的を達し得ず中途下山いたし候。先づは右まで草々不一。(七、八、九、佐々木健太郎)

△拜呈本月十六日例に依り安代温泉に参り同地を根據地として附近を少々歩き岩管と津根白根に遊び候、これだけでは大に活動せし様なるも實は僅々四五時の勞動にてへト〜に勞れ誠に意氣地なく會員の資格あるや否や頗る疑問に御座候。(七、八、二六、上州萬座温泉にて辻本滿丸)

△七月には大町より針木を越へて別山尾根より劔へ登攀仕り候。去る四日には松田總領より立倉川上流に出で熊木澤を溯つて姪岳

に登り、丹澤塔岳迄縦走仕り候。(七、九、一四、藤生武治)

△小生は例に依て白山へ來て居ます。山開きは今月の十八日でしたが其後づつと天候悪く登山日和ではありませんでした、二三日前から天候定まつて愈々恰好の氣候になりましたから昨日登りました。年今の大雪は今に残て居る雪でもそれと判断が出来ず、雪の多かつた爲めか御花鳥も花が十分に咲きません、毎年桂松室の附近に多く美觀を添へる「クリンサウ」未だ咲きませんで總體に花は遅れましたやうですが「黒百合」は意外に多く咲いて居ます。

今朝は冥く暗れまして雲海の彼方には立山諸峰をはじめ穂高、御嶽及乗鞍が物の見事に突立て居ました。登山者は多く此山に登りさへすれば目的を果したやうに夜松火を點じて登つて只下りて仕舞ふ人が多い。其中で京都の人森本成兄弟の御方で白山を石徹白から一ノ峯、二ノ峯、三ノ峯、別山を縦走して御前、及大汝を踏破して室堂に一泊今朝飛騨口より下山して是れから信飛方面を迂つて立山へ上るこて出發されましたが、こんな山登りらしい山登りの人は稀れです。それから序に申しますが陸地測量部五萬分の一白山圖幅に飛騨口の道を地獄谷のみつけてありますが、其道は今では迎も駄目で無いといふ方がよいので新道は安全な道で室堂から白水瀧の近くで舊道と一つになります、一寸附加へて置きます。(七、七、二五、加賀白山室堂にて玉井敬泉)

福地信世氏の來狀

本會高頭幹事に宛てたる私信、福地氏の許諾を得て載せたり。

山岳と云ふ雜誌に登山者の道德日々に衰へ行くを嘆せられ宜しく登山道德を重すべしと御教訓有之候、然し乍ら登山道德とは如何なるものか其目を説ける經書無之候間好き機會に登山道德の項目を山岳に御掲載有之度希望候高山植物學家は山に登り自らは研究と稱して草木を根から掘り取りて置き乍ら他人には一葉たりともむしるべからずと叱り地理地質學者は山に登りて自らは調査と號して石の大塊を引きずり出して持ち歸り乍ら他人には鐵槌の傷もつけてはならぬと高札を立てる有様に御座候或はらくに登山出来る道路を知り乍ら人には教へずして自分が其山に登りし探檢談に鼻を高くし或は自分では何に一つも書物雜誌に書かすして徒らに世間に好著述なきを罵るが如きものども有之候。

これ皆登山道德の衰退かと存じ候。
茲に戯れて小生が理想の登山道德の大綱を書し

て御目かけ申度候。敬具

八月十七日

福地 信世

(上記登山道德の大綱は載せて巻頭タイトルページにあり)

立山、劔岳附近五萬分一

模型圖頒布

會員佐伯藤之助氏は半歳の苦作になれる、立山劔岳、針木岳等附近を含む五萬分一模型圖を本會に寄贈せられたり、本會は氏の勞を多とすると共に其複製を希望せらるゝ人々あるを以て、本誌廣告欄の豫約方法に由り、希望者を定めて、石膏を以て複製せしめ、相當裝飾を附して頒布し、一は佐伯氏の勞を永遠に遺し、併て同趣味者の山岳的慾求を満さんどす。

本模型圖は、陸地測量部五萬分一地形圖に由り適法の厚さを有する厚紙を、同圖の等高線に従ひて切り抜き順次積み重ねたるものにして、五萬分一圖は各二十米突の等高線を以て圖示せるを以て、本模型圖は二十米突毎に各一枚の厚紙を以て

山

重ねたり、本模倣圖は趣味者の熱求的動機に由りて成りしものにして、其道の者の手に成りしものならねば或意味に於ては技巧十分ならざる點あれど、敢てそれは本圖の缺點なりと云ふべからず、本圖は複製物の精巧を期すると共に原型は多數の複製をなすを得ざるを以て、僅少の個數を頒つに過ぎざるべし。(本誌廣告欄參照)



外國文欄の創設

岳

本誌には從來外國文欄の特設なく、本邦山岳を海外に紹介する點よりしても亦外人會員の爲めにも不便少なからざりしが、今號より外國文欄を創設して時々外國文の記事のみを卷末に附録として上梓する事とせり、廣く同好諸君の活用を望む。



新入會者

校
正
者

高 梅
野 澤
鷹 親
藏 光

大正七年十二月七日印刷
大正七年十二月十日發行

定價金八拾錢



發行兼編輯者

新潟縣三島郡深才村深澤
高頭仁兵衛

印刷者

橫濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

印刷所

橫濱市山下町百〇四番地
福音印刷合資會社

發行所

橫濱市本町四丁目六十七番地
高野鷹藏方
日本山岳會事務所

(振替貯金口座東京四八二九番)
電話特長本局百七十一番

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

立山劍岳附近五萬分一石膏模型圖豫約頒布の方法

本模型圖は會員佐伯藤之助氏半歳の勞作になれるものにして、從來有りふれたる模型圖の如く、想像に由りて作製されたるものに非ずして、陸地測量部五萬分一地形圖の各二十米突毎の高低線を適法なる方法に由りて原紙に切り抜き順次推積して、山岳模型を作製したるものにして、在來市販の如き水平垂直線各其比を異にするが如きものならずして、總てに於て五萬分一に縮少されたる山岳なりと云ふべし。

本模型の包含する所は、五萬分一立山圖幅に就て云へば、東は岩小屋澤岳を南北に引く線、西は大日岳の東方約四分を引く線、南は立山圖幅の縁邊、北は東谷山赤谷山を引く線の内に含るゝ地積にして、圖面の大きさとしては南北一尺一寸六分、東西九寸を算す。

本模型圖は、當初一般に頒布の目的ならざりしも、希望者多く、此れを數人にして秘藏するは同好諸士に喜びを分つる故にあらざるを以て此原型に由り、石膏型に複製せしめ相當裝飾及び硝子覆ひを施して希望者に頒布する事とせり。

本模型圖は多數の複製に耐へざるを以て少限度に於て豫約の方法に由り頒布すべし。

豫約方法

△豫約申込

大正七年十二月末日限り、住所、姓名、送附先を詳記し、左記豫約金を添へて本會事務所へ申込まれたし。

△價

格

一組金十五圓以内の豫定、(送料實費)製作の數量に由りて費用を遞減し得べきを以て、總てを終了の上價格を決定すべし。

△出 來 期

日〔豫約〆切後約一ヶ月半。〕

△豫 約

金 〔金十五圓申込と同時に御送附の事、相成るべくは振替口座へ拂込まれたし、製作の上過剰金を生せば御返戻申すべし。〕

△送

料 〔實費を支拂れたし、本模型は小包郵便を以て送附し難きを以て送附名宛は鐵道所在地にせられたし、荷造等は夫々完全を期して發送せしむべし。〕

横濱市本町四丁目六十七番地

高野鷹藏方

日本山岳會事務所

大正七年十一月

電 話 (特長) 本局一七二番

(長) 本局五二六四番
振替口座東京四八二九番

會員及同好者諸君に

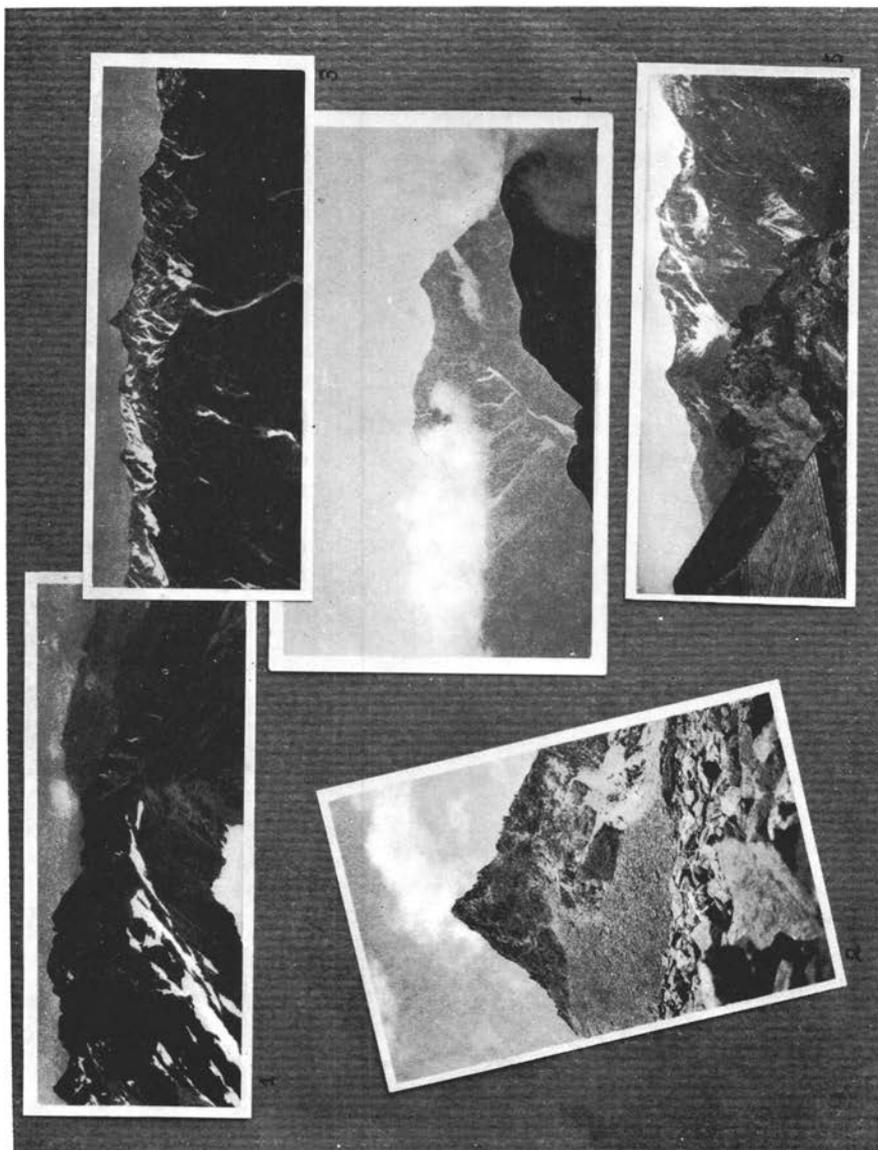
△本號から初めました「登山案内者」の一欄に就ては各位からの御通信を特に希望致します、案内者の改善進歩は他面に於ては愉快なる登山を得るわけで御座います。

△毎號の「雜報」は新聞其他の切抜きで御座います、何時かはあれに由つて登山史なり何になりを完成したいと云ふ希望を以て集めて居ります成るべく各地方の材料を得たいので御座いますから、どんな僅かな物でもよろしゆう御座いますから御惠與を願ひます。

△同趣味諸君の御通信を希望致します、限りある吾々同人の方では十分の材料を集める事が出来ません、何事にまれ御通信を願ひます。

十一月十五日

日本山岳會同人



1. Hodakayama from Yurigatake. 2. The top of Yurigatake. 3. View of Yurigatake from Jonen Range.
 4. Hodakayama from Kasumizawadake. 5. Hodakayama from Ninomata-no-koya.
 (1, 2, 3, 5. From the collection of Mr. S. Kanai) (4. Photo. by Mr. Tomlinson)

JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the Japanese part of this the current issue of the Journal are :—

- Over Tsurugi, by M. Kamuri.
 The Waterfalls of Nikkō, by H. Takeda, D.I.C., D.Sc.
 An Account of the Gozen-Byōbu, by T. Numai.
 The Gap of Hachimine, by S. Yamaguchi and K. Asahi.
 About Guides and Coolies at Omachi, Ashikuraji,
 Nikkō Yumoto. and Kōshu Tabayama.

THE ILLUSTRATIONS IN THE JAPANESE PART.

- Plate 1.—Karataki, Tamadarenotaki, Chōjinotaki, Ōdaki, Tainainotaki, The former view of Urami-no-taki.
 Plate 2.—Nebazawa-no-taki, Nanataki, Karataki, The former view of Jikwan-no-taki.
 Plate 3.—Kattadake (Centre) and Goshikidake (Right) View towards West from Sainokawara (Ushiro-Eboshidake) and Byōbudake at the right) Gandoyama, Kumanodake—the principal peak.
 Plate 4.—The Gap of Hachimine.

AN ALTERATION OF THE CLUB RULES.

The Rules concerning Admission of New Members have been altered as follows :—

Any one desirous of joining the Club should be proposed by two members and seconded by one of the secretaries.

THE SECOND MEETING OF THE FOREIGN MEMBERS.

The second meeting of the foreign members was held at the premises of the Club 67, Shichome, Honcho, Yokohama, on October 1st, at 8.00 P.M. Presided by Dr. H. Takeda. The following members were present :—

Mr. Eric N. de Bunsen, Mr. J. G. S. Gausden, Mr. E. Mendelson, Mr. G. Moilliet, Dr. Paravicini, Mr. M. Schellenberg, Mr. T. Z. Takano, Dr. H. Takeda, Mr. I. Tsujimura, Mr. M. Yagi, Mr. C. Umezawa, and Mr. S. Kondō.

Several friends of the members were also present.

Mr. Gausden gave an account of his climbing the Eboshi, Akadake, Kurodake and Yakushi during the last season, illustrated with his beautiful slides made from his own negatives. Md. Umezawa explained the slides made from the negatives taken by Mr. Ishizaki, J. A. C. during his climbing trip Kashmir mountains in 1917.

The next meeting will be held at the premises of the Club early in 1919, and notice will be given to the members from the secretary.

NEW MEMBERS.

The following gentlemen have been admitted to the Japan Alpine Club at the Council meeting of November 3rd, 1918.

- Mr. William Cliff, No. 80 Kyomachi, Kōbe.
 - Mr. N. Libeaud, No. 46 Harimamachi, Kōbe.
 - Mr. H. W. Malcolm No. 26B Naniwamachi, Kōbe.
 - Mr. Lionel Nuzum, No. 14 Mayemachi, Kōbe.
 - Mr. O. Manchester Poole, F.R.G.S. No. 50, Yamashitachō, Yokohama.
 - Mr. A. Schulthess, No. 246A, Yamashitachō, Yokohama.
 - Mr. H. Treichler, No. 90A, Yamashitachō, Yokohama.
 - Mr. J. P. Warren, No. 82, Kyomachi, Kōbe.
-

**THE FOLLOWING CLUB PUBLICATIONS HAVE
BEEN ADDED TO THE CLUB LIBRARY
SINCE JANUARY, 1918.**

- | | |
|--|--|
| The Alpine Club of Canada, Constitution and List of Members. | Alpine Club of Canada
Banff, Alb. |
| Alpine Journal
No. 215-218. | The Alpine Club,
London. |
| The Annual of the Mountain Club of South Africa, No. 20—1917. | Mountain Club of South Africa, Cape Town. |
| Butlleti del Centre Excursionista de Catalunya, No. 261-262. | Barcelona, Spain. |
| Bulletin of the Associated Mountaineering Club of North America, May 1918. | New York. |
| The Canadian Alpine Journal,
Vol. No. 8. | Alpine Club of Canada,
Banff, Alb. |
| Jahrbuch des Schweizer Alpenclub,
Jahrgang 1916. | Schweizer Alpenclub,
Berne, Swiss. |
| La Montagne,
12 Anne, 4-6 10-12. | C. A. F. Paris. |
| The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 14 No. 84. | The Scottish Mountaineering Club, Edinburgh. |
| Sierra Club Bulletin,
Vol. 10, No. 2 and No. 3. | The Sierra Club,
San Francisco, Cal. |
| Svenska Turist Foereningens 1917. | Stockholm, Sweden. |

**FOLLOWING BOOKS HAVE BEEN PRE-
SENTED TO THE CLUB.**

- | | |
|--|---|
| " INAKA " Nos. 1 to 8.
Mount Rainier. | By H. E. Daunt, Esq.
By S. Kondo, Esq. |
|--|---|

Karuizawa, August 24th, 1918.

Mr. Elwin I think told you of our intention to attempt the Yarigatake-Hodaka climb.

We tried it last Friday and succeeded in doing it is just under 13½ hours from Bozu Goya to Kamikochi.

You want, I believe, an account of the trip for the English section of the Sangakukai Magazine. I have written one, and if you like it will send you together with some photos that I took. Mr. Elwin also, I believe, is thinking of sending an account of another short but difficult climb, he did.

Have you ever thought of the idea of a Club Tie? Up at Cambridge University we always used to wear ties as a badge of the club to which we belonged. If such an idea met with your approval, how would the following design do:—



It would preserve the three colours most common to climbers—green for vegetation, white to snow, brown for earth. I merely offer it as a suggestion, and would be interested to hear your opinion.

Yours very truly,

W. H. MURRAY WALTON.

Karuizawa, August 20th, 1918.

On August 14th: With Tsunejiro (Uchino) as guide I went from Bozu Goya to the ridge on the right instead of straight up to saddle. We went along the ridge to the left and then I climbed to the saddle. We went along the ridge to the left and then I climbed to the right diagonally across the north arête of Yari and straight up several steep chimneys to the top. It was approximately Weston's climb (P. 264 of 1913 Murray) which he did with Seizo and Kamouji in 1912. Tsunejiro affirmed that no one had done it since then and he would not come beyond the diagonal climb so I went up alone.

On 15th: We were weather bound in Bozu Goya.

On 16th: Rev. W. H. M. Walton and I with Tsunejiro did the ridges and peaks from Yari Peak to Hodaka as we had planned. From 5.15 A.M. to 11 A.M. we had fine weather but from 11 A.M. to 6.40 P.M. rain and mist. The only ridge which we definitely avoided was the one on the Yari side of the first Kita Hodaka.

It was an interesting but strenuous trip. Apparently Japanese are taking to it a good deal though we are the first foreigners that we know of who have done it.

Mr. Walton or I will be writing something for the Alpine Club Magazine probably.

Thanking you for your advice the other day.

Yours sincerely,

(Signed) W. H. ELWIN.

TIMES ON AUGUST 16TH BY OUR WATCH.

Bozu Goya	5.15 A.M.
Yarigatake Peak	5.56 "
left	6.00 "
Obami Sama... ..	6.59 "
Yokoo ,,	7.45 "
I Kita Hodaka	11.4 "
II ,, ,,	1.40 P.M.
Oku Hodaka... ..	2.34 "
Hodaka	4.25 "
Kamikochi	6.40 "

From Yari to Hodaka peaks time—10 hours and 25 minutes.

From Bozu Goya to Kamikochi time—13 hours 25 minutes.

N.B.—We did not attempt to Mae Hodaka. Our plan was to go from Hodaka to Yari but weather and Kamikochi landlord and guide all conspired to make us go first to Yari.—W.H.E.

tains? I have lately completed a second book on my mountain expeditions in the Japanese Alps, called "The Playground of the Far East," to be published by Mr. John Murray, (publisher of Murray's Guide Books, etc.) I should think it will be ready this autumn. I shall explain in it about the origin of the name "Japanese Alps," which probably was first suggested by him (or possibly by Mr. Gowland) though it was never actually used until I employed it myself. Yesterday I had tea with Sir Ernest Satow, and he said he thought I must have invented the title; but I said "No, I think you or Mr. Gowland did though I was the first actually to use it." Please give my best *Yoroshiku* to all my J.A.C. friends, including Mr. Tsujimura Takano, and remember Mrs. Weston and myself kindly to your wife, and with every goodwish to yourself, believe me always

Yours very sincerely,

(Signed) WALTER WESTON.

Osaka, September 11th, 1918.

I am just back from a delightful trip to the Kurobe valley and wish to thank you for all the trouble you took. My friend and I climbed Orenge from the Babadani in perfect weather. Thence we went to Daikoku Kozan where we were most kindly treated. My friend had most unfortunately to leave me there but I climbed Goryusan, returned to Babadani, ascended the Kokurobe and then crossed Tateyama from the Tsurugizawa. Altogether it was most delightful and I hope when I have time to write a short account. The path from Aimotobashi to Babadani, on to Daikoku and down into the Omachi district is surprisingly good. It seems therefore a thousand pities that the bridges are not kept in better condition. I am thinking in particular of a bridge over the Kurobe at the junction with the Babadani River. The bridge itself is quite a good 'tsu rihashi' but more than half the planks are missing. The result is that in places one has to take a long step from one plank to the next. If the authorities would keep this bridge and similar ones in repair, it would be possible for *ordinary pedestrians* to make the trip from Aimotobashi to Daikoku in comfort. Would it not be possible for the Sangakukai to take the matter up? The scenery is perfect.

Yours sincerely,

(Signed) OSWALD WHITE.

NEWS FROM MEMBERS.

78, Melbury Gardens, Wimbledon, S.W. 19.

May 30, 1918.

I was much interested to get your notice about the Exhibition of Pictures etc. at the J.A.C. last month and earnestly wish I could have been present.

It made me feel quite homesick because it made me long in vain, for the beautiful mountains and valleys of the Alps of Japan. Owing to the war, we cannot go even to Switzerland, so you can imagine how much we miss the peaks and passes that we love so much.

Mrs. Weston and I, however, always spend 3 or 4 weeks on the Coast of Cornwall near the Lizard Point, and Land's End, where there are fine granite rocks, and beautiful 'coves' (little bays) which are hardly known to the people who keep to the beaten tracks, just as the *Inaka* of Japan is almost unknown to those who only travel in the large towns and on tourist routes near the sea coast.

Yesterday, I lectured on "Japan" at the Military Hospital at Exeter, and I also have to give a series of Cambridge University Extension lectures next term on the same subject at Hastings, on the South Coast, near Brighton. So you see, I am a kind of special envoy, to try to interpret Japan to my educated fellow countrymen, as well as to our sailors and soldiers all over the country.

Last month (April) Mrs. Weston gave a lecture on "Fuji San," at the Japan Society, in London, which was received with much appreciation. It is the first time a lady has done that kind of thing in England, so the Nippon Sangaku Kwai will, I hope, be pleased to know that one of its members has tried to make known the charms and interest of the "Matchless Mountain."

It was a wet cold day, but still there was a large audience, and afterwards the Japanese officials of the Society gave her a pretty little "sake" cup with Fuji's picture inside, as a souvenir of the occasion. Amongst these present were Viscountess Chinda, Mr. and Mrs. Sawada, Lady Arnold and Mr. and Mrs. Yada. Mrs. Yada is the daughter of Professor Shiga and we like her very much. The Chairman of the meeting was Mr. K. Mori, financial agent of the Japanese Government in London, with whom we had a Japanese dinner a few days later.

It is a long time since I heard of Mr. Kojima, for though I wrote to him at Los Angeles, I have not received any reply at present. I wonder what all my J.A.C. friends are doing in the moun-

24.

Far out on the fringe of that astral group,
 Ultima Thule—the white-robed palmer :
 See the Sword Peak frowns—but we climb to stoop—
 The Shrine on Tateyama.

25.

The pine-clad ridge floats through the smoke-blue mists,
 Far up the snow peak cuts the sapphire sky :
 To turquoise pools the leaping torrent twists,
 Deep the speckled beauties lie.

26.

With beads in hand to Kengamine's tor,
 In the dim red dawn the pilgrims flock then :
 From Fuji's crest at sunset thence we saw,
 The Spectre of the Brocken.

27.

Namu Amida Butsu. Chant and pray.
 Through cedar aisles the sacred mountains loom.
 "Lead kindly light." Lest wayworn footsteps stray
 "Amidst the encircling gloom."

28.

Have we sensed it? The Lure of the Yama.
 Sceptics may call it:—"The Call of the Wild."
 Yet as strong as the fumes from Asama,
 Its' charms have many beguiled.

29.

Kegon !! Loud as the roar of your fountains,
 Soft zephyrs !! As light as your rippling breath :
 We have sensed it—The Call of the Mountains,
 Stillness as silent as death.

30.

*To the Great Horn Gate—past the realms of light ;
 Rising Star—regaining uplands purer :
 A golden kirin winged his upward flight,
 Past twin-topped Norikura.*

16.

Eight peaks in all soar high above the ridge,
From Vulcan's forge sprang Yatsu-ga-take :
Across the cliff we made a pilgrimage,
To sun-kissed Aka-dake.

17.

Tho' the pilgrim path was sodden with rain,
And the night as dark as Erebus :
Whilst the pine torch flared through the shades again.
The Pride of Kaga cheered us.

18.

Your sea-green snow-fed rivers run apace,
Thro' heart o' Alpland Kurobe forges :
My fancy there methinks for second place,
Takasegawa's gorges !!

19.

Like some rare gem set in yon mountain crown,
—Deep in lair the artful badger lazes—
Upon your plain—O-ku-no-tai-ra—down
The Crystal Mountain gazes.

20.

Above your snows camp fires we lit o' nights,
Where your limestone crags Yakushi tower :
And iron gates 'neath heaven-kissing heights,
Astride your Etchu-zawa.

21.

The dawn flushed pink beyond the smould'ring glow,
A summer night her stilly course had run :
Then Hell broke loose—see Iwo-dake throw
His red lava to the sun.

22.

Tsu-bame-dake's tree-clad spurs hang steep,
Steeper still the slopes on Ar-i-ake :
Along the ridge the dancing white hares leap.
Your hat, Eboshi-dake !!

23.

Lakelet gold and green where the brown trout swim,
And Kamonji's hut smoked black and sticky :
'Tis the silent toast we may drink to him,
Lovely My-o-jin-ike !!

8.

And eke the purple iris dot the heath,
Kiji call beside the scarlet berry :
 The rocky ledge—the bulbul chirps beneath,
 There blows the mountain cherry.

9.

The silver dragon crept across the wall
 Phantom sprung from mountain dew and sake ?
 No !! We saw the shimmering moonbeams fall,
 That night on Jonendake.

10.

Fast to the line on Hō-ō-zan we cling,
 Few ever dare that lofty spire essay :
 In camp that night the *raicho* heard us sing,
 “The End of a Perfect Day.”

11.

A stream there flows in Hida—swift as rack
 That scud past Yari's spear—adown the glen,
 Beneath Hodaka's crags—then call us back
 To Kamikochi Onsen.

12.

Land where the eaglets nest above the cave,
 Where the grey goat roams, and the black bears cower :
 Fast as the spindrift from the flowing wave,
 Speed on A-zusa-gawa !!

13.

Where Alpine flowers of many a hue,
 Bloom 'neath the ever-burning silent stars :
 There from his mane the White Horse shakes the dew,
 Renge Onsen—Queen of Spas !!

14.

Whilst the wild hawk swings on the mountain breeze,
 Round your rock-bound walls—Komagatake :
 Your headless image—Jizo—rests at ease,
 On top of Jizodake.

15.

The famous pass—where stunted alders grow—
 The flashing stream, and boulders not a few :
 The towering cliffs—the slope of frozen snow—
 Over all the azure blue.

CAMEOS.

BY

"BLUE DRAGON-FLY."

1.

*From the Ivory Gate—through realms of light,
Falling Star—forsaking uplands purer—
A golden kirin winged his downward flight,
Past twin-topped Norikura.*

2.

Beyond red Yaketake's smoking cone—
Star of stars in some galaxy stellar—
Proud snow-streaked Kasadake looms alone,
Great Peak of the Umbrella.

3.

The lilac haze clings to the beetling rock,
Fantastic shape of legend long forgot :
Grey dawn. The widgeon stream across the loch,
Sunsets mauve and apricot.

4.

Otenjo's crown. We rise to hail the morn,
Black, then violet—fast the shadows fly :
Rose pink and amber—then the golden dawn,
Thus the sun god takes the sky.

5.

Through woodland glades we reached Kaigane's crest,
His rockstrewn ridge gleamed 'neath a storm-swept sky :
Midst dripping creeping pine we crouched at rest,
Whilst the storm king thundered by.

6.

The silent mists came swirling round our peak,
Far down the vale the rain-fed river ran :
We took his "scalp"—and down a mud-swathed streak
Dropped from Akaishisan.

7.

We crossed the crater floor of Tarozan,
What time the tiger lilies were aglow :
Again his cone we scaled—Shiranesan,
The emerald tarn below.

were over. As we took the path down the weather cleared and we reached Kamikochi less than two hours later. How well we understood the fascination a hot spring has for the Japanese.

The complete trip from Bozu Goya to Kamikochi by the seven peaks had taken us 13 hours 25 minutes, of which we had lost one hour through mistakes in the mist. Our landlord assured it was record time: at all events we had the satisfaction of knowing that we were the first foreigners to do the complete trip. And here's to the health of old " Dame San."

GENERAL OBSERVATIONS AND TIMES.

1. The trip both from the point of view of safety and pleasure should only be attempted in settled weather.
2. A guide is indispensable, a rope expedient, a climbing pole a nuisance.
3. Luggage should be an absolute minimum, and coolies should not be taken.
4. A good head is essential.
5. North to South seems the easier direction.
6. Snow to drink is easily obtainable en route.
7. Times :

Bozu Goya to Yarigatake summit	41 minutes.	
Rest...	4	"
Yarigatake to Obamisan	59	"
Obami San to Yokoosan	46	"
Rest	15	"
Yokoosan to Kita Hodaka No. 1	184	"
Rest...	43	"
Kita Hodaka No. 1 to Kita Hodaka No. 2	113	"
Rest...	6	"
Kita Hodaka No. 2 to Oku Hodaka	48	"
Rest...	3	"
Oku Hodaka to Hodaka	108	"
Rest...	22	"
Hodaka to Kamikochi...	113	"
Total	805	" = 13 hours 25 minutes.

valley detour, be up before us? A short scramble and a very steep descent over bushes however enabled us to carry out our first plans without very much alteration and half an hour later we were on the top of Kita Hodaka No. 1, and ahead of our guide.

The view was wonderful! Away to the south continue the jagged ridge gradually ascending up to massive Oku Hodaka with its 10,250 ft., then in a grand sweep to the left it led on to Hodaka, which from this aspect at all events might well be called the 'Matterhorn' of Japan. Up its slopes from the valley between was a mighty belt of snow, pierced here and there by some obdurate rock, which refused its silent covering. Instinctively I got my camera out, when a small fleck of cloud slightly obscured the view—I waited for it to pass. It was our last view of Hodaka! For the mountain mists, caught by the western wind, rose thick and fast from the valley to our right and shut out mountain and ridge and everything. We didn't leave our guide after that! Perhaps his *Dame* wasn't going to be so far wrong after all.

The mist got thicker and after half an hour's climb down we came to an abrupt stop. The mountain seemed to fall away from our feet. For twenty minutes we retraced our steps, wondering where now he would lead us for he seemed strangely uncommunicative and would admit no error. Whether he had mistaken the ridge, which judging by our bearings is more likely, or whether he had tried to take a short cut, as he said, we do not know, but at all events we lost the best part of a very valuable hour.

The mist had a very terrifying effect: not only did slopes fade away to nothingness all around us, giving us the impression of being suspended in space, but also peaks had a very unpleasant way of suddenly appearing as if overhanging us. Yet, though the mist did tend to magnify slopes many of them were indeed extremely steep; and the limited vision and the consequent limited choice of route made things no easier. Added to that the necessity of trying every grip and foot-hold made the work slow and anxious.

At one point after passing along a narrow ridge and climbing a short steep slope, we seemed really to be at the end of all things. We made a slow descent to our right, testing for precipices as we went by throwing stones, and presently found ourselves on a ridge. It seemed familiar and when compasses were produced we found that we had been a complete circle. Again we climbed the slope, and this time things did not stop abruptly, the ridge continued, just as we desired. The mist had become thinner!

Oku Hodaka, which but a few hours before was so inviting, had now lost all interest. We might have been anywhere for all we could see! when finally, we reached Hodaka about 5 o'clock in heavy rain, it was welcome indeed: for we knew our difficulties

pine needles fitted us for what was to be one of the most strenuous days of our lives.

Every minute the east got brighter and grander and filled us with increasing hope. Fuji San with Komagatake and Shirane on the right and smoke-topped Asama away to the left were conspicuous landmarks on a marvellous panorama. And now suddenly the spear point of Yari behind us got lit up with the rays of the rising sun, and with its previous gloom our doubts were for ever dispelled.

We left Bozu Goya about half past five and, despite the protests of " Dame San " that we had little enough time to spare as it was, we rushed up to the summit of Yorigatake in 41 minutes, in order to do the whole series of the peaks. It was worth it—those four minutes on top! Far up the slopes of Kasagatake the sun cast the triangular shadow of the peak on which we stood, and as if to do special honor to its majesty, it had crowned the shadow with a halo. To the south lay our route, Obamisan, Yokoosan, Kita Hodaka No. 1, Kita Hodaka No. 2., Oku Hodaka and Hodaka, six peaks connected by a long, uneven and precipitous ridge. Below to the right was smoking Yake by whose crater we had stood only three days before, while beyond lay Norikura and Ontake. All were now lit up in the fresh glow of the morning.

The early part of the climb as far as Yokoosan was not difficult. A curious panorama we noticed en route: perhaps some scientist can explain. Snow lay on the eastern and southern flanks of the mountain, but never on the colder west and north.

From Yokoo onwards conditions changed. The hitherto more or less even ridge now became very broken and the guide informed us it was dangerous to proceed except by way of the valley below. As we looked at the depths of the valley in question, we decided that he should go his way alone we would try the ridge. Kita Hodaka has on its western face the biggest precipices in the Alps, and this feature is not uncharacteristic of the whole mountain. As we approached it we began to realize that no easy climb, indeed, awaited us. The ridge got uncomfortably narrow, and stones got unpleasantly loose, as one of us found to his cost. Approaching the final slopes of the mountain was a narrow ridge, in shape something like the peaked roof of an out-house against the perpendicular wall of the main building. Attempts had evidently been made to scale it, as we saw several discarded climbing sticks at its base. As we had not brought our rope with us, on the guide's recommendation, we decided to try a different route, so crossing the top of an enormous slide of loose stones, we climbed up the rocky N.E. shoulder of the mountain, intending to try and get up more from the east. But plans had to be modified for we found that the further side of the shoulder was a sheer precipice. Would the guide, despite his

stone slabs. How it is they come to be there is quite a puzzle. Sometimes a leg each side was necessary. On a sudden down I went with a loose stone but a few feet below good simultaneous holds for hand and foot saved me and the climb was continued with a thankful heart for the escape. At the next dip we also left this rather risky steep and crossed the gully which formed the top of our guide's valley seeing him as a speck below. Scrambling round over ridge and gully we succeeded by a final steep climb up in reaching the top of Kita Hodaka before our guide.

After lunch, in clouds and rain we had to rely on our guide to take us to Kita Hodaka II. A few steep walls of rock made any load on the back a difficulty and in one place the guide had to lower his pack, of only food and straw sandals, etc., by a cord to me. We skirted the tops of snow fields and round deceptive peaks in the mist till Oku Hodaka and finally at 5 p.m. Hodaka itself were reached. A recently opened up new steep way down brought us to our Kamikochi Inn in two hours.

The whole trip took thirteen and a half hours but an hour may be deducted for false tracks and delays owing to the mist. Our guide brought us through remarkably well. One realizes that this peak and ridge climb should be made only in assured fine weather. A good guide is absolutely necessary. No baggage can be taken. Hence it must be a strenuous one day trip.

Not a few Japanese are now making this trip but we have not heard of any other foreigners who have taken it.

FROM YARIGATAKE TO HODAKA BY PEAK AND RIDGE.

BY

W. H. M. WALTON, J.A.C.

Dame desu! It was 2 a.m. on August 16th, and as we rolled over on the hard couch of pine branches in the little mountain cave of Bozu Goya, where we had been for a day and a half, prisoners of the weather, our guide's verdict was not encouraging. The long roar of the wind in the amphitheatre around seemed to second his verdict. So we rolled over and told him to call us again at 4 o'clock. Blissful two hours, but oh, how short!

Dame desu! But this time no answering blast confirmed his opinion, and as we crawled out of the cave, indeed, the rich yellow light of early dawn and the hush of the mountain around seemed to contradict him. "We go over the peaks!" we announced.

Bacon and beans and a judicious but uninvited admixture of

1



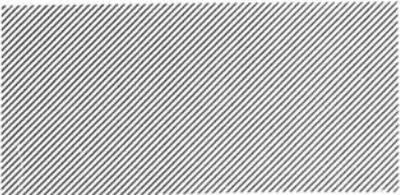
2



3



4



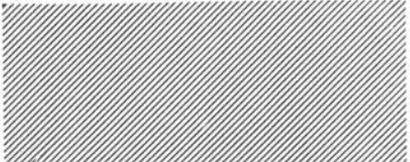
4



5



6



1. Yeboshi Ridge. 2. Akadake. 3. Snow Bridge over Echizuawa. 4. Takasegawa Road.
5. Kurodake. 6. Karasuwadake. (Photo. by Mr. N. E. Daunt)

My guide, who affirmed that no one had done it since then, would not follow me as I worked round into the gully at the level of the saddle from which the ordinary ascent is made. So I went on alone going up probably much as Weston did. With a very sharp watch on loose rocks at hand or foot the climb is exhilarating and not too difficult for any one with some experience of real rock climbing.

Weather forced us to spend two nights and a day in Bozu Goya with our optimism being slowly drained away by alternately sharing cold gusts of wind, drippings from the roof and smoke from the fire.

But in spite of the word *dame* being often applied to the weather by guide and coolies it cleared early on Friday morning. Two of us with our guide and the lightest possible load started off at 5.15 a.m. From the Koya Fuji and Asama stood out in the green gray light before the sunrise. 6 a.m. found us at the top of Yari glorying in the unique panorama of peaks and valleys.

"The view" says the Rev. Walter Weston "as one looks straight down into the wild and desolate valleys that stretch away from the base of the mountain, is most impressive. To the north lie the almost unknown peaks of the range between the provinces of Shinshiu and Etchu, which stretches far towards the Sea of Japan. On the west stands the rugged form of Kasadake. Southward the eye rests on the nearer giants of this group, Hodakayama and the massive double-topped Norikura, and beyond these Ontake with the Komagatake of Shinshiu on its eastern side. To the south-east but farther off, stands the great mass of mountains on the borders of Shinshiu and Koshu, the most prominent peaks being Shiranesan, Akaishisan, and Komagatake. But most striking of all is the stately cone of Fuji rising with its majestic sweep supreme above all else, at a distance as the crow flies of over 85 miles. To enumerate all the summits to be seen from the point on which we stand would be to give a list of all the grandest mountains in Japan. Only the haze and clouds to the N.E. prevent our view from embracing the sea in the bay of Toyama, so that nearly the whole width of the central portion of the main land is included in this magnificent prospect." (Murray's guide pp. 264-265).

Then began our long hoped for climb along ridges and up and down peaks. An hour brought us to Obami and another took us past Yokoo. The most spectacular ridge for climbing which we saw ahead before the mists came down was undoubtedly from the dip beyond Yokoo to Kita Hodaka. Alpenstocks lay about showing that hands as well as feet were indispensable for the work. Our cautious guide turned to the left dipping across the broad loose rock strewn valley and toiled up Kita Hodaka from the east. We went straight on over narrowing ridges made up of loose rocks and

dake. Shortly after leaving this waterfall we passed some charcoal burners' huts, and from this point we found a good track which led us to the junction of the Etchuzawa and the Joganjigawa, this latter being the river which flows past Tateyama Onsen. We again took the bull by the horns and instead of going round by a bridge we forded the two rivers and climbed the cliffs on the far side which brought us to the road that runs to the onsen itself. After a long walk of over an hour we reached our goal at 6.15 p.m., all more or less as tired as dogs.

PEAK AND RIDGE CLIMBLING IN THE JAPANESE ALPS.—Aug. 12-17, 1918.

BY

W. H. ELWIN, J.A.C.

Climbing in war time! Yes, the call of the mountains is a good call even then. One's body is toughened up to feel something of the physical indifference to knocks and to inconveniences that the men in the trenches must feel: one's mind is invigorated to meet the problems of life in the plains: and in the heights away from man a sense of a higher Presence than our own is generated and one's heart is prepared for spiritual realizations out of one's perview before.

So three of us started from Karuizawa early on a Monday morning. We left Matsumoto on bicycles carrying tent, rope, clothes and food for the thirteen miles to Shimajima—a fatal road for punctures and bursts!

By 3.30 p.m. we were on our way walking with two coolies and 10 p.m. saw us at Kamikochi, having negotiated the Tokugo Toge, a pass 7,100 feet high. In spite of careful letters before hand a guide is hard to get and the Tuesday was spent merely in going up Yakedake and wandering round the Taisho Lake, fording it at its base. The Tashiro Lake can be included in this walk. On Wednesday we three had our guide and two coolies and fine weather. Leaving Kamikochi soon after 7 a.m. we lunched by this year's abundant snow above the new "Alps Hotel," and reached Bozu Goya, the cave formed by a rock 40 by 30 by 10 feet, soon after 2 p.m.

Having been up Yarigatake several times I had a desire to explore. The guide took me to the right over large loose stones and rocks on to the ridge N.E. of the peak. From there one looks down into the gully from which in 1912 Weston, with Kamonji and Seizo as guides, climbed to the top "by several steep 'chimneys' in the nearly perpendicular rocks immediately below the highest point" (Murray's Guide, 1913, p. 265).

grass slope, very slippery in places, with a snow-slope on one side and stunted oaks on the other. This was before the sun had time to get in some fine work and dry the slope. More than one carrier came what is known as a howling cropper.

After negotiating this piece of the mountain we had a very steep watercourse to descend which ended up in the usual drop of a small waterfall, in this case being over 20 ft. At this point it is believed that the river known as the Etchuzawa commences, being fed by the snow-slope which we had just left. The angle of the lower snow-slope below the waterfall was some 60 degrees and at one point there was a large snow-bridge stretching from side to side of the gorge, underneath which the stream itself had made a large tunnel, and through which we took our downward course. The valley, although getting wider and wider, did not show any signs of getting less steep, and on one snow-slope some of our party put on *kanjiki*.

Shortly after taking a second breakfast we came to a check in the shape of a large waterfall with precipitous cliffs rising from the river in a sheer precipice for a great height. There was no possibility of descending the river by the watercourse, so a detour had to be made over a spur. This was a steep climb through giant dockleaves and slippery bamboo grass over a steep ridge, and then through dense jungle till we reached the river again. This was a new way from Yakushidake to Tateyama with a vengeance, and although we treated this mountain with scant ceremony he had his revenge on us by laying us several stymies in the shape of magnificent waterfalls. The farther we proceeded the less prospect appeared to be of reaching Tateyama Onsen that night, and finally we gave up the idea altogether as at about 5 o'clock we came to another waterfall which was reported to be again absolutely impassable. Being very tired and in want of food we decided to camp for the night by the side of this stream, which here rushes through the gorge with considerable velocity, foaming in magnificent cascades over enormous boulders. On the far side a steep rocky bluff rose sheer from the water's edge, covered with small pine trees growing out of the solid rock just like a Chinese *kakemono*. The following morning we made an early start and after an exceedingly fierce climb over a very steep spur and down a very steep and slippery slope the river itself was again reached after four hours exceedingly hard work. Here a magnificent sight met our view in the shape of a large waterfall some 70 ft. in height. The river, confined to a very narrow space, was rushing with the speed of an express-train over the top of the fall and a large volume of water came pouring through the narrow outlet with a terrific roar. The carriers made a plentiful mid-day meal on rice and wild rhubarb, which plant grows in profusion on the northern lower slopes of Yakushi-

was very hard and the gradient was exceedingly steep. We reached the river at ten minutes past one after a really hard morning's work, but for some reasons best known to himself the guide considered that we should certainly get a good run for our money, so after lunch a bridge consisting of small trees lashed together with creepers was thrown across the river from one rock to another. The Kurobegawa at this point is some twenty yards wide with the water foaming at a rapid pace over large boulders into a large pool where no doubt the wily *iwana* were lurking and waiting for unsuspecting insects. On both sides sheer precipices covered with pines, alders, oaks and other alpine trees rose straight up from the water's edge. The angle of the spur on the far side must have been at least 80° , and for the first few hundred feet was a very severe test for our climbing powers as we literally had to hang on with hands and ice-axes for dear life before we reached an easier gradient. The dock-leaves in places were very slippery, as also the bamboo grass. We had to negotiate a very steep water course, and finally we camped in the dusk below the summit of Yakushidake at 8,700 ft. This was the hardest day's work we had had during the trip, and it must be said that we treated both the Kurobegawa and Yakushidake with great disrespect. From our camp on the ridge we had a magnificent view of the Okunotaira plateau which we had left in the morning, and beyond Yarigatake formed the principal sight in a magnificent mountain picture. There was a full moon and the following morning a glorious sunrise. A very fine view of Kasadake was obtained from this point with its long ridge running eastward and terminating with Nukutodake.

On the 23rd we left camp at 8.10 a.m. and arrived at the first trig. station at 9.10 this point being the southern peak of the crest of Yakushidake itself. The mountain is covered with loose dry rocks of limestone (?); and is noted for being the home of the wild boar.

We reached the shrine on the summit at 11.10 a.m. taking things very easily. On our right a vast amphitheatre was filled with snow. Still taking things very easily after lunch on account of our exertions of the previous day, we decided to camp on the northern side of the mountain at 4 p.m., partly owing to a thick mist which the guide said would prevent him from going any farther. We pitched camp by the side of a snow-slope, which afforded us water for cooking the dinner. The night turned very cold as the wind blew off the snow right into the tent. The next day, the 24th, tea was ready by 4.40 a.m., accompanied by a magnificent sunrise. We left camp at 6.35 a.m. and instead of taking the ordinary route over the ridge to Etchuzawadake and Tobiyama for Tateyama Onsen the guide again showed us what he could do in the way of cross-country travelling by dropping off the mountain down a long

also a small piece of Norikura hidden behind Kasadake. To the right Tarozan—a conical peak with a large rent in one side, evidently an old volcano,—rose above the Okunotaira plateau. Beyond we could see the Toyama plain, and to the right Yakushidake. Turning round beyond Otenjo we saw behind the Swallow Peak Asamayama smoking in the far distance. We reached the top of Kurodake—The Crystal Mountain—at 9.30 a.m., where we had a good view of the Sea of Japan. The rocks on this peak are covered with black lichen; and several crystals were found and taken away as souvenirs. We took tiffin at 10.45 a.m. below Akadake itself by the side of two ponds full of melted snow. Although we had originally intended to climb Washiha and Tarozan, we decided to make for the Kurobegawa and Yakushidake, so we dropped down off Akadake over rough country covered with creeping pine, patches of snow and stunted oaks to the Okunotaira plateau. To appreciate Kurodake to the full one should view this mountain from the western side from Okunotaira. We got to our camping ground at 2 p.m. This plain is 8,000 ft. above sea-level, and must be the original of all Japanese landscape gardens as it is covered with small ponds, rocks, and small pine-trees, the whole forming an ideal spot for a mountain camp. In full view of the opening of our tents was the Tateyama range with Tsurugidake—The Sword Peak—beyond, Yakushidake on the left, and away in the distance even Hakusan could be seen, covered with gleaming snow. The following day, the 22nd, the whole party were up before sunrise. The kettle was boiled and tea made over a spirit lamp. A beautiful day was again in evidence with not a single cloud to be seen anywhere except a white cap on Tateyama, which cleared away before breakfast time. The height of this camp by Negretti & Zambra's aneroid barometer was 8,071 ft. We left the camp at 7.20 a.m. and started for Yakushidake. Another very fine view of Hakusan was obtained. Several badger holes were passed, and the track led alongside a stream choked full of rocks with water running underneath them. Presently we met with a check, as the track petered out, and the Omachi guide decided to take a new route to Yakushidake by dropping over the northern edge of the plateau right down to the Kurobegawa—in other words a bee-line from point to point. If any mountaineers are desirous of experiencing a new sensation in the way of climbing they should certainly follow in our foot-steps, as the drop straight off the plain down to the river itself must have been fully 3,000 ft. below.

At one place we had three ropes out tied together, and on our immediate left there was a cliff—a sheer precipice—on the side of which hundreds of swallows were flying in and out of the holes in the solid rock. We christened this place Tsubame Goya. The work

actors, and *manzai*). The way up this formidable looking buttress was on the north side, and we had a stiff climb to the final arête. There was one piece of rock only some few inches wide for a distance of about ten feet, where both the foreigners had to go down on their hands and knees, and negotiated this *mauvais pas* straddled-legged. Both the Japanese guides went across like Blondin on a tight rope. However, discretion is always the better part of valour, and in this case a drop either side on to some wicked looking rocks below was quite enough to call for an inquest if any climber fell on them. The rocks on the top of Eboshidake are very hard and sharp, consisting of black and white granite. The Omachi guide, Yaguchi, informed us that he did not know of any foreigners having climbed this peak before. Murray's Guide contains no mention of this redoubtable peak, which is 2,621 metres high according to the map issued by the Army Surveying Department, say 8,999 ft. No ropes were used on this occasion, but it would be advisable to take one. Some fine views of the range running from the Harinokitoge were obtained as well as also of Karasawadake, Gakidake, Tsubakurodake and the Otenjo ridge as far as Otenjo itself, but the mist shut out the view in other directions. We got back to our camp at 6.20 p.m. Saturday, July 20th, saw another late start, as one of our party wished to go back to Eboshi for some photographs. The route to Akadake for the major portion of the distance is very easy, being merely a walk over the ridge on which Mitsudake and Gorodake deserve honorable mention.

At tiffin time the temperature was 102 deg. F. as there was no shade obtainable. Nearing Akadake the going became more interesting, and some loose stone ridges and a considerable amount of *haimatsu* had to be negotiated.

The weather was perfect, no clouds to be seen anywhere and a lovely blue sky over all; a magnificent view in consequence was the result. On our left hand Karasawadake, Gaki, Tsubakuro and Otenjo; ahead Jonen, Yarigatake and Hotakayama; to the right Kurodake, Yakushidake, the Tateyama range and Tsurugidake. Whilst behind us lay the mountain mass surrounding the Harinokitoge, and beyond it the "Lotus Group." We had a clear view of the Zaragoe, the pass that leads to Tateyama Onsen from the Harinokitoge. The carriers being heavily loaded proceeded very slowly, and we camped below the Akadake ridge at 4.30 p.m. A very strong wind blew all night from the south-west, and it was still blowing hard when we left the following morning, July 21st. We struck camp at 7.30 a.m. The first piece of ridge after leaving was very interesting, and in many places we were "hanging on by our eye-brows." We reached the top of Akadake at 8.30 a.m. and secured a fine view of Yari and Hotakayama, Renge and Washiha,

gawa gorges are well worthy to rank with some of the finest hill scenery in Japan. At noon we crossed the river by a wire-rope suspension bridge, and another one at 2.35 p.m.

One of the principal sights in the day's walk was the Fudo Waterfall some 70 to 100 ft. in height, and it was a curious sight to watch the water falling, as owing to recent rains a very large volume was pouring over the fall itself. The spray from this fall was carried by the force with which it fell for some considerable distance.

We reached Nigori Goya, where there is a small house belonging to the Forestry Bureau, at 3.15 p.m., height 3,850 ft. At this place we came up with a party of students from the Keio University, who were making for Kamikochi Onsen over Yurigatake and the Adzusagawa valley.

The next morning we left our camping place at 6.10 a.m. and reached the Eboshi ridge at 3.30 p.m., camping some three-quarters of a mile or so from the peak itself. The gradient after leaving the Nigorigawa is very steep.

Well up the spur we secured a very fine view of Karasawadake with its jagged ridges, on which we saw several *gendarmes* projecting from the ridge itself like the rugged teeth of a saw. The climb of the ridge itself was interesting, and in many places hands and ice-axes had to be used for hauling oneself up the hillside. We also obtained very good views of *Gaki*—The Demon—and Tsubakuro-dake. From our camping place on the Eboshi ridge we were in full view of the Tateyama range, all the various peaks being plentifully streaked with snow. Wind began to blow in fitful gusts, which betokened bad weather. In spite of the very fine day we had experienced the glass fell rapidly, and rain fell in heavy showers at 8 p.m. and continued throughout the night.

The weather the next day (Thursday), the 18th, if anything got worse, and heavy rain-storms at intervals fell all day. There was nothing to be done except to "lay off." That night more wind and more rain was experienced, though the next day, the 19th, the weather cleared up about noon, which was too late for us to make a start for the camp below Akadake, our next resting place. A torrential rain storm came on at 1.10 p.m. and lasted for ten minutes, but this was the clearing shower and at 4 p.m. we started for the peak of Eboshidake. The route led along the ridge itself in and out of the *haimatsu*, and stunted oak trees which were sopping wet. We climbed over a rock knob on the ridge which we at first from a distance took to be the summit itself, but the real "hat" appeared directly we had topped the summit, and a glorious sight came in view in the shape of a mass of black rock jutting some fifty to sixty feet from the ridge itself in the form of a tulip (or a kind of cap formerly worn by nobles, and at present used by *kannushi*, *nō*

IN ALPLAND.

BY

“YAMAKAZE.”

AFTER a flying glimpse of Ariakesan, the conical mountain that guards the entrance to the Nakabusa valley, looming up through the mists which hid the rest of the mountain giants beyond, we reached that famous mountain climbers' hotel at Omachi—the Taizan-kwan—on Sunday, July 14th, 1918. Here Mr. Momose Shintaro, the son of the proprietor, made all the necessary arrangements for our trip to Tateyama Onsen via the Eboshi ridge, Kurodake and Yakushidake.

The sun's rays as we walked through the mulberry fields to Noguchi the following day beat down upon us with pitiless ferocity. A late start had been made on account of various necessary arrangements such as buying *aburakami*, *kanjiki*, etc., etc. for our carriers, and tiffin was taken at Oidemura, where the old man who keeps the resthouse sold the writer a piece of *kamoshika* skin for two *yen*. These bits of fur are very useful for sitting down upon when the carriers have an *ippuku*, and afford great protection from damp in the mountains. Facing us to the right was the farfamed Harinokitoge, with snow gleaming through the thick mist which covered the mountain tops. We crossed the Kagogawa, which river flows into the Takasegawa near the entrance to the valley that leads to Kuzuno Onsen. The Takasegawa itself was soon reached, and the road began to rise clinging to the side of cliffs, and winding its way through magnificent scenery with the snow-fed river flowing below. The water was a pale sea-green colour except where it curled over the boulders and rushed through the rapids in white foaming waves. Past rocky pine-clad bluffs we wandered on, taking things very slowly, as the guide had made up his mind to spend the first night at the comfortable resting-place known as Kuzuno Onsen, which we reached at 3.30 p.m. The height above sea-level measured 3,100 ft. and the temperature was 70° F. There is a nice bath at this onsen, and fish can be obtained in the river.

We left the onsen at 9.50 a.m. the next morning, the 16th, and took things very easily. The path gets narrower and in places hangs to the rocky cliff sides like a fly on the wall. These Takase-

CONTENTS.

	PAGE
IN ALPLAND.—By “Yamakaze”	1
PEAK AND RIDGE CLIMBING IN THE JAPANESE ALPS.—	
By W. H. Elwin	7
FROM YARIGATAKE TO HODAKA.—By W. H. M. Walton.	9
“CAMEOS.”—By Blue Dragon-fly	13
NEWS FROM MEMBERS	17
CLUB LIBRARY	21
LIST OF FOREIGN MEMBERS	22
THE SECOND MEETING OF THE FOREIGN MEMBERS	23
JAPANESE PART OF THE JOURNAL	24
ILLUSTRATIONS IN THE JAPANESE PART.	24
AN ALTERATION OF CLUB RULES	24

The Journal of the Japan Alpine Club

SANGAKU

(English Supplement)

Vol. XIII

• • •
1918

No. 1